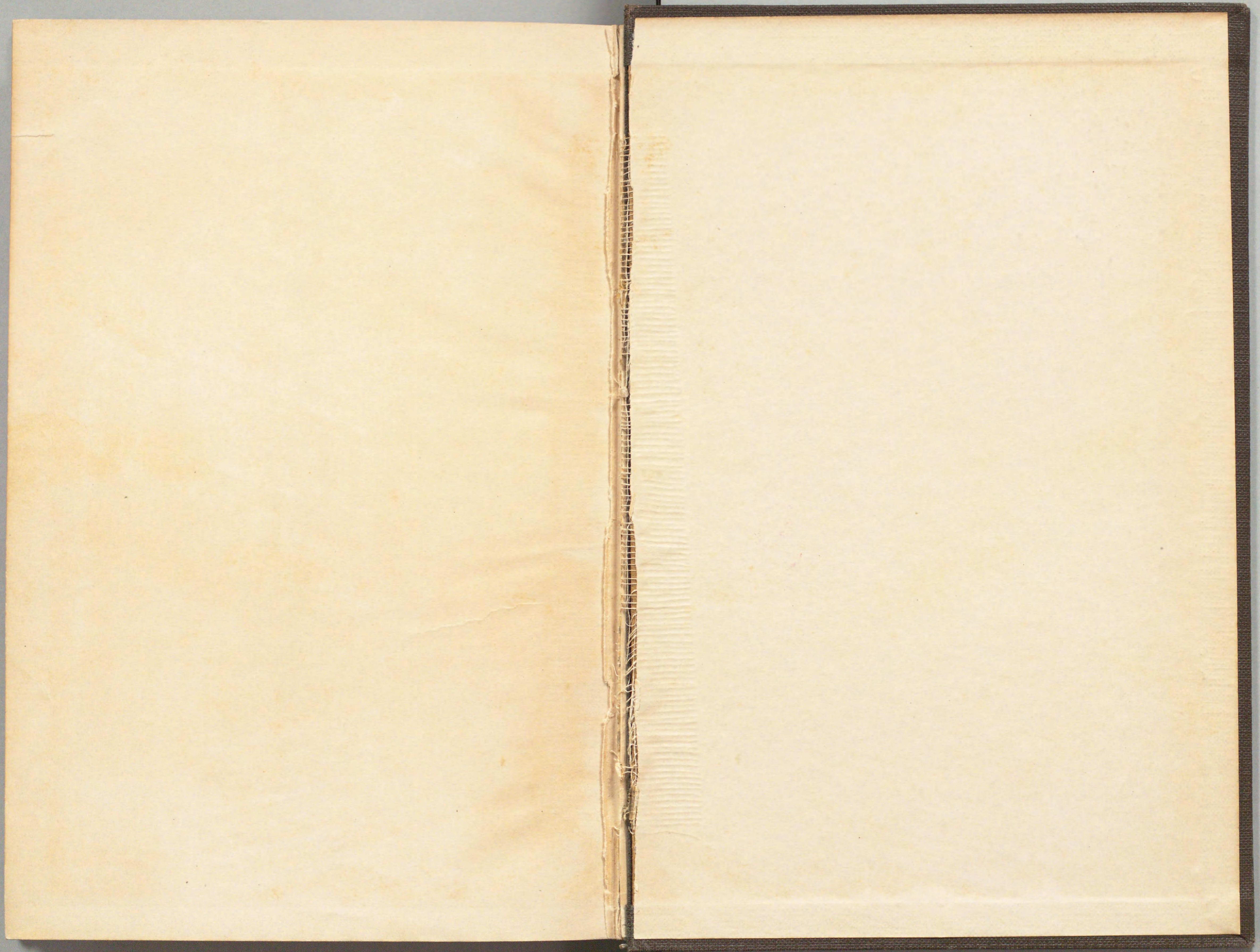




210.6
N6880





大隈重信関係文書第四

大隈重信関係文書 第四



228105

大隈重信關係文書第四

自明治十二年七月
至同十四年十二月

目次

明治十二年

七五一	德大寺實則書翰	「大隈重信宛」	明治十二年七月五日	一頁
七五二	グラント接伴懸書翰	「大隈重信宛」	明治十二年七月六日	二頁
七五三	澁澤榮一等書翰	「大隈重信等宛」	明治十二年七月六日	三頁
七五四	竹添進一郎書翰	「大隈重信等宛」	明治十二年七月六日	四頁
七五五	福澤諭吉書翰	「大隈重信宛」	明治十二年八月二日	七頁
七五六	白上直方書翰	「大隈重信宛」	明治十二年八月廿五日	九頁
七五七	竹添進一郎書翰	「大隈重信宛」	明治十二年八月卅日	一一頁
七五八	五代友厚書翰	「大隈重信宛」	明治十二年八月卅日	一三頁

目次

七五九	福澤諭吉書翰	「大隈重信宛」	明治十二年九月十二日	一六
七六〇	調所廣丈書翰	「大隈重信宛」	明治十二年九月廿六日	一八
七六一	シーボルト書翰	「大隈重信宛」	明治十二年十月二日	一九
七六二	大谷光勝書翰	「大隈重信宛」	明治十二年十月四日	二一
七六三	福澤諭吉書翰	「大隈重信宛」	明治十二年十月五日	二二
七六四	宍戸璣書翰	「伊藤博文宛」	明治十二年十月五日	二四
七六五	宍戸璣書翰	「井上馨宛」	明治十二年十月五日	二八
七六六	福澤諭吉書翰	「大隈重信宛」	明治十二年十月十三日	二九
七六七	永山盛輝書翰	「前島密宛」	明治十二年十月十九日	三一
七六八	吉井友實書翰	「大隈重信等宛」	明治十二年十一月一日	三三
七六九	徳大寺實則書翰	「大隈重信宛」	明治十二年十一月卅日	三五
七七〇	伊藤博文書翰	「大隈重信宛」	明治十二年十二月九日	三五
七七一	長岡義之書翰	「大隈重信宛」	明治十二年十二月九日	三六

七七二	内海忠勝書翰	「大隈重信宛」	明治十二年十二月十日	三八
七七三	鮫島尙信書翰	「大隈重信等宛」	明治十二年十二月廿七日	四一

明治十三年

七七四	時任爲基書翰	「大隈重信宛」	明治十三年一月八日	四五
七七五	常盤井堯熙書翰	「大隈重信宛」	明治十三年一月二十日	四六
七七六	五代友厚書翰	「大隈重信宛」	明治十三年一月廿七日	四八
七七七	白上直方書翰	「大隈重信宛」	明治十三年二月六日	四九
七七八	ハウス書翰	「大隈重信宛」	明治十三年二月十九日	五二
七七九	岩倉具視書翰	「大隈重信宛」	明治十三年二月廿六日	六一
七八〇	ハウス書翰	「大隈重信宛」	明治十三年二月廿四日	六二
七八一	河緒齋書翰	「大隈重信宛」	明治十三年二月廿九日	九一
七八二	ロベルトソン書翰	「大隈重信宛」	明治十三年三月二日	九二

七八三 佐野常民書翰 「大隈重信宛」 明治十三年三月十四日 九四

七八四 福澤諭吉書翰 「大隈重信宛」 明治十三年三月十六日 九五

七八五 ビットマン書翰 「大隈重信宛」 明治十三年四月八日 九八

七八六 五代友厚書翰 「大隈重信宛」 明治十三年四月九日 九九

七八七 蜂須賀茂韶書翰 「大隈重信宛」 明治十三年四月十日 一〇二

七八八 佐野常民書翰 「大隈重信宛」 明治十三年四月廿八日 一〇二

七八九 大木喬任書翰 「大隈重信宛」 明治十三年五月二日 一〇三

七九〇 ハウス書翰 「大隈重信宛」 明治十三年五月八日 一〇四

七九一 五代友厚書翰 「大隈重信宛」 明治十三年五月十日 一〇七

七九二 ハウス書翰 「平井希昌宛」 明治十三年五月十一日 一一〇

七九三 榎本武揚書翰 「大隈重信宛」 明治十三年五月廿四日 一一二

七九四 大隈重信建議書 明治十三年五月 一一二

七九五 大隈重信建議書 明治十三年五月 一二五

【参考】 山縣有朋書翰 「三條實美宛」 明治十三年五月十四日 一四九

【参考】 勅語 明治十三年六月八日 一五〇

【参考】 グラント談話 明治十二年八月十日 一五〇

【参考】 佐々木高行書翰 「岩倉具視宛」 明治十三年五月卅一日 一五二

【参考】 元田永孚書翰 「佐々木高行宛」 明治十三年五月廿九日 一五三

【参考】 伊藤博文書翰 「熾仁親王宛」 明治十三年六月八日 一五四

【参考】 元田永孚書翰 「佐々木高行宛」 明治十三年六月十日 一五五

七九六 徳大寺實則書翰 「大隈重信宛」 明治十三年六月六日 一五六

七九七 芳川顯正書翰 「大隈重信宛」 明治十三年六月九日 一五七

七九八 三條實美書翰 「大隈重信宛」 明治十三年六月十四日 一五八

七九九 ハウス書翰 「平井希昌宛」 明治十三年六月十九日 一五八

八〇〇 佐野常民書翰 「大隈重信宛」 明治十三年六月廿三日 一六〇

八〇一 竹添進一郎書翰 「大隈重信宛」 明治十三年六月廿七日 一六一

八〇二	鍋島直彬書翰	「大隈重信宛」	明治十三年六月廿九日	一六二
八〇三	松方正義書翰	「大隈重信宛」	明治十三年七月三日	一六四
八〇四	内海忠勝書翰	「大隈重信宛」	明治十三年八月二日	一六五
八〇五	鈴木大亮書翰	「大隈重信宛」	明治十三年八月十七日	一六六
八〇六	五代友厚書翰	「大隈重信宛」	明治十三年八月十九日	一六七
八〇七	五代友厚書翰	「大隈重信宛」	明治十三年十一月五日	一六八
八〇八	德大寺實則書翰	「大隈重信宛」	明治十三年十一月八日	一六九
八〇九	岩倉具視書翰	「大隈重信宛」	明治十三年十一月九日	一七〇
八一〇	德大寺實則書翰	「大隈重信宛」	明治十三年十一月十一日	一七一
八一一	佐野常民書翰	「大隈重信宛」	明治十三年十一月十二日	一七二
八一二	伊藤博文書翰	「大隈重信宛」	明治十三年十一月十九日	一七四
八一三	德大寺實則書翰	「大隈重信宛」	明治十三年十一月二十日	一七七
八一四	福澤諭吉書翰	「大隈重信宛」	明治十三年十一月廿四日	一七八

八一五	黒田清隆書翰	「大隈重信宛」	明治十三年十一月廿六日	一七九
八一六	大隈重信等建議書		明治十三年十一月	一八〇
八一七	井上毅書翰	「大隈重信宛」	明治十三年十二月三日	一八四
八一八	德大寺實則書翰	「大隈重信宛」	明治十三年十二月十日	一八五

明治十四年

八一九	ハウス書翰	「大隈重信宛」	明治十四年一月一日	一八七
八二〇	ハウス書翰	「大隈重信宛」	明治十四年一月三日	一九三
八二一	伊藤博文書翰	「大隈重信等宛」	明治十四年一月五日	一九五
八二二	末松謙澄書翰	「大隈重信宛」	明治十四年一月八日	一九六
八二三	櫻井勉書翰	「大隈重信宛」	明治十四年一月八日	一九九
八二四	ハウス書翰	「大隈重信宛」	明治十四年一月十三日	二〇二
八二五	佐野常民書翰	「大隈重信宛」	明治十四年一月廿一日	二〇六

八二六	鍋島直虎書翰	「大隈重信宛」	明治十四年一月廿一日	二〇八
八二七	鍋島直大書翰	「大隈重信宛」	明治十四年一月廿二日	二一〇
八二八	佐野常民書翰	「大隈重信宛」	明治十四年一月廿三日	二一一
八二九	關新平書翰	「大隈重信宛」	明治十四年一月廿七日	二一四
八三〇	渡邊清書翰	「大隈重信宛」	明治十四年二月五日	二一六
八三一	佐野常民書翰	「大隈重信宛」	明治十四年二月五日	二一七
八三二	日下義雄書翰	「大隈重信宛」	明治十四年二月十日	二一九
八三三	德大寺實則書翰	「大隈重信宛」	明治十四年二月十二日	二二三
八三四	德大寺實則書翰	「大隈重信宛」	明治十四年三月四日	二二三
八三五	岩倉具視書翰	「大隈重信宛」	明治十四年三月十四日	二二四
八三六	德大寺實則書翰	「大隈重信宛」	明治十四年三月十五日	二二五
八三七	井上馨書翰	「大隈重信宛」	明治十四年三月十八日	二二五
八三八	福澤諭吉書翰	「大隈重信宛」	明治十四年三月十九日	二二七

八三九	岩倉具視書翰	「大隈重信宛」	明治十四年三月卅一日	二二九
八四〇	ロベルトソン書翰	「大隈重信宛」	明治十四年三月	二三〇
八四一	大隈重信奏議書		明治十四年三月	二三〇
【參考】	伊藤博文書翰	「三條實美宛」	明治十四年七月一日	二四七
【參考】	伊藤博文書翰	「岩倉具視宛」	明治十四年七月二日	二四八
【參考】	三條實美等書翰	「岩倉具視宛」	明治十四年七月十二日	二四九
【參考】	岩倉具視日記		明治十四年七月	二五一
【參考】	佐々木高行書翰		明治十四年十月四日	二五四
八四二	岩倉具視書翰	「大隈重信宛」	明治十四年四月三日	二五八
八四三	佐野常民書翰	「大隈重信宛」	明治十四年四月八日	二五九
八四四	島惟精書翰	「大隈重信宛」	明治十四年四月十九日	二六〇
八四五	德大寺實則書翰	「大隈重信宛」	明治十四年四月廿二日	二六四
八四六	鍋島直彬書翰	「大隈重信等宛」	明治十四年五月五日	二六五

八四七	佐野常民書翰	「大隈重信宛」	明治十四年五月廿四日	二六七
八四八	伊藤博文書翰	「岩倉具視宛」	明治十四年五月廿九日	二六九
八四九	ハウス書翰	「森有禮宛」	明治十四年六月六日	二六九
八五〇	ハウス書翰	「平井希昌宛」	明治十四年六月十三日	二七一
八五一	ハウス書翰	「大隈重信宛」	明治十四年六月廿五日	二七七
八五二	三宮義胤書翰	「大隈重信宛」	明治十四年七月二日	二七九
八五三	竹添進一郎書翰	「大隈重信等宛」	明治十四年七月四日	二八〇
八五四	上野景範書翰	「大隈重信宛」	明治十四年七月六日	二八三
八五五	岩倉具視書翰	「大隈重信宛」	明治十四年七月六日	二八五
八五六	徳大寺實則書翰	「大隈重信宛」	明治十四年七月十四日	二八五
八五七	安田定則等書翰	「大隈重信宛」	明治十四年七月廿九日	二八六
八五八	伊藤博文書翰	「大隈重信宛」	明治十四年八月二日	二八七
八五九	小野義真書翰	「大隈重信宛」	明治十四年八月六日	二九一

八六〇	大隈重信書翰	「寺島宗則等宛」	明治十四年八月十九日	二九二
八六一	淺野長勳書翰	「大隈重信宛」	明治十四年八月十九日	二九四
八六二	佐野常民書翰	「大隈重信宛」	明治十四年八月二十日	二九五
八六三	中島盛有書翰	「大隈重信宛」	明治十四年八月二十日	三〇一
八六四	小松彰書翰	「大隈重信宛」	明治十四年八月二十日	三〇八
八六五	大隈重信書翰	「伊藤博文宛」	明治十四年八月廿三日	三一〇
八六六	櫻井勉書翰	「大隈重信宛」	明治十四年八月廿三日	三一〇
八六七	石井省一郎書翰	「大隈重信宛」	明治十四年八月廿四日	三一三
八六八	山崎直胤書翰	「大隈重信宛」	明治十四年八月廿五日	三一四
八六九	五代友厚書翰	「大隈重信宛」	明治十四年八月廿七日	三一六
八七〇	佐野常民書翰	「大隈重信宛」	明治十四年八月三十日	三一七
八七一	大隈重信書翰	「伊藤博文宛」	明治十四年九月五日	三一九
八七二	ハウス書翰	「平井希昌宛」	明治十四年九月七日	三二〇

八七三	郷純造書翰	「大隈重信宛」	明治十四年九月十一日	三二六	
八七四	小松彰書翰	「大隈重信宛」	明治十四年九月廿五日	三二九	
八七五	小野梓書翰	「大隈重信宛」	明治十四年九月廿九日	三三二	
	【参考】	小野梓意見書	明治十四年九月廿九日	三三六	
八七六	三條實美書翰	「大隈重信宛」	明治十四年九月	三四五	
八七七	福澤諭吉書翰	「大隈重信宛」	明治十四年十月一日	三四七	
八七八	北畠治房書翰	「大隈重信宛」	明治十四年十月三日	三五〇	
八七九	副島種臣書翰	「熾仁親王・大隈重信宛」	明治十四年十月五日	三五五	
	【参考】	熾仁親王書翰	「岩倉具視宛」	明治十四年十月廿三日	三六三
八八〇	岩橋轍輔書翰	「大隈重信宛」	明治十四年十月六日	三六五	
八八一	北畠治房書翰	「大隈重信宛」	明治十四年十月八日	三六八	
八八二	三條實美書翰	「大隈重信宛」	明治十四年十月十一日	三七一	
八八三	大隈重信辭職願書		明治十四年十月十二日	三七二	

八八四 太政官達 明治十四年十月十二日

三七三

	【参考】	三條實美書翰	「岩倉具視宛」	明治十四年九月六日	三七三
	【参考】	東久世通禧書翰	「岩倉具視宛」	明治十四年九月二十日	三七五
	【参考】	岩倉具視書翰	「三條實美宛」	明治十四年九月廿七日	三七七
	【参考】	伊藤博文書翰	「三條實美宛」	明治十四年十月五日	三七九
	【参考】	川村純義書翰	「岩倉具視宛」	明治十四年十月六日	三八〇
	【参考】	黑田清隆書翰	「岩倉具視宛」	明治十四年十月六日	三八二
	【参考】	三條實美書翰	「岩倉具視宛」	明治十四年十月七日	三八三
八八五	井上毅書翰	「岩倉具視宛」	明治十四年十月七日	三八四	
	【参考】	井上毅書翰	「岩倉具視宛」	明治十四年十月八日	三八六
	【参考】	伊藤博文書翰	「岩倉具視宛」	明治十四年十月八日	三八七
	【参考】	黑田清隆書翰	「岩倉具視宛」	明治十四年十月八日	三八九
	【参考】	黑田清隆書翰	「岩倉具視宛」	明治十四年十月十日	三八九

【参考】 岩倉具視書翰 「山田顯義宛」 明治十四年十月十一日 三九二

【参考】 伊藤博文書翰 「岩倉具視宛」 明治十四年十月十五日 三九三

【参考】 岩倉具視日記 明治十年七月 三九六

【参考】 岩倉具視日記 明治十四年八月 三九七

【参考】 岩倉具視日記 明治十四年九月十日 三九九

【参考】 岩倉具視日記 明治十四年十月 四〇三

【参考】 佐々木高行日記 明治十四年十月 四〇八

○

【参考】 福澤諭吉書翰 「伊藤博文等宛」 明治十四年十月十四日 四一三

【参考】 井上馨書翰 「福澤諭吉宛」 明治十四年十月十六日 四三三

【参考】 福澤諭吉書翰 「伊藤博文等宛」 明治十四年十月廿九日 四三四

【参考】 井上馨書翰 「福澤諭吉宛」 明治十四年十一月十八日 四三七

【参考】 福澤諭吉書翰 「井上馨宛」 明治十四年十二月廿五日 四三七

【参考】 福澤諭吉書翰 「井上馨宛」 明治十六年五月十三日 四四一

【参考】 明治辛巳紀事 (福澤諭吉) 明治十四年十月廿八日 四四四

【参考】 大隈重信談話 「明治十四年の政變」 四六一

八八六 佐野常民書翰 「大隈重信宛」 明治十四年十月十六日 四六七

八八七 島惟精書翰 「大隈重信宛」 明治十四年十月十八日 四六八

八八八 山田秀典書翰 「大隈重信宛」 明治十四年十月廿三日 四六九

八八九 古澤滋書翰 「大隈重信宛」 明治十四年十一月一日 四七〇

八九〇 前島密書翰 「大隈重信宛」 明治十四年十一月三日 四七二

【参考】 三條實美書翰 「岩倉具視宛」 明治十四年十月廿八日 四七四

【参考】 三條實美書翰 「岩倉具視宛」 明治十四年十一月二日 四七四

八九一 大隈重信・伊藤博文建議 明治十四年 四七五

目次終り



大隈重信關係文書 第四

自明治十二年七月
至同十四年十二月

明治十二年

七五一 德大寺實則書翰〔大隈重信宛〕 明治十二年七月五日

來ル七日

聖上芝離宮へ

行幸於同宮米國前大統領グラント氏へ午十二時食饌被進候ニ付御陪食被仰付候此段申入候也

明治十二年七月五日

宮内卿德大寺實則

參議大隈重信殿

追テ本文御陪食之儀ハ人員御都合モ有之候ニ付必ス明日中ニ御參ノ

大隈重信關係文書第四 (明治十二年七月)

有無御申出可有之且大禮服御着用可被成此段申添候也

【備考】七月四日前米國大統領グラント氏其夫人を伴ひて來朝し、延邊館に館す、即日參朝、明治天皇に謁見仰付けらる、天皇は七日日比谷練兵場に行幸、グラントを召し、陸軍師隊式の陪覽をゆるされ、正午延邊館に於て御陪食を賜ふ、

七五二 グラント接伴懸書翰「大隈重信宛」 明治十二年七月六日

米國前大統領グラント氏延邊館滯留中徒然ヲ慰センカ爲メ御用暇ヲ以時々御訪問相成候ハ、グラント氏於るも満足可被致且食事刻限ニも同餐ヲ共ニシ寛々懇話希望被致候事も可有之尤日時を從前豫メ難申進突然御來車ニお暗ニ好機會ヲ被得候ハ、都合宜敷候此段當懸及御内報置候也

十二年七月六日

接伴懸

大隈參議殿

追ふ

日時彼是申進候義ハ難取計候間萬一當館へ御來車相成候節グラント氏差合筋有之空敷御面晤ヲ不被得候程モ難計候間此段も兼る御心得置被下度候御令聞又之令嬢御同伴も可然ト相考候也

七五三 澁澤榮一書翰「大隈重信宛」 明治十二年七月六日

一筆奉啓上候然者本月八日虎門内工部大學校ニ於テ合衆國前大統領グラント君接待之爲メ夜會相開候間同日午後第九時同校へ御光臨奉願上候恐惶謹言

明治十二年七月六日

東京接待委員總代

澁澤榮一

福地源一郎

大隈 參議 様
御 簾 中 様

七五四 竹添進一郎書翰〔大隈重信等宛〕 明治十二年七月六日

密信第九號

英公使ウエード氏も琉球事件ニ付テハ穩なる説を唱へ候趣ニピットマン
も申たる由ニ承及候處右ウエード氏之支那最負たるも人々皆熟知致し
候義ニテ琉球之件も清國に左袒スルハ疑ヲ容レザル所あり但老功之人ニ
候間ピットマンも程能打合せたるに相違有之間敷存候小官之聞ク處ニ
據レハウエード氏去六月廿九日
北京ニ着セリ之論も臺灣之時支那を金ヲ出たしたる故以
テ琉球ヲ日本之屬國と認定スルノ理も無之且今度日本之所置も勢力を以
テ琉球ニ加へたるをのよして道理ヲ以てせしをのに非らば清國ニ於ても
必黙止セザルベシ故到底戰爭ヲ開クニ至ルあるべし云々

一小官過日李鴻章と筆戰之節琉球一件ニ付るも彼レ十分ニ憤怒致し居候
を察知仕り候處近日承候處よてハ彼レ云フ我レヲして臺灣一條を談判せ
しめハ決して穩便ニも濟マシ申間敷其ノ時ノ結局ヲ以テ琉球ヲ日本之屬
國と見るハ尤道理を根元琉球も中國ニ臣屬し中國も親好ヲ加へたる
末ニ付今日罪無クして日本ノ爲メニ滅亡するも於てハ中國ハ力ヲ盡して
之ヲ保護し舊ニ依テ獨立ノ國たるを得せしむるハ乃チ今日迄親好ヲ加へ
たるの情義ヲ盡クス所よして日本ハ轍ヲ改メザルニ於てハ到底戰ヲ開ク
有ルノミ我ハ偏ニ小國ヲ保護スルノ美名ヲ愛ス敢テ利害損益ヲ計較スル
所ニ非ラスト

獨リ恭親王ハ大ニ憂歎して云ク日本ノ無理ヲ爲ス連年已ム事おし今度琉
球事件も我よりハ如何様ともして和熟ヲ謀らんと欲スルモ日本ハ無理を
推し通し一步モ退カザルニ於ても不得已戰爭ニ出でざるを得ず然ルニ一
小國之爲メ中東ノ親和ヲ破ルハ實ニ好マザル所あり李鴻章ノ議論も餘リ

強キも過キ是ヲ説得シ難キも苦シむト 是ノ説果して信ふらハ何如璋ヲ激烈之照會哉我外務省ニ致タセシハ蓋シ李氏ノ命ニ出でたるあり

一 恭親王又云琉球人進京之上歎訴して日本之無理ヲ申出ルニ於るハ無事ヲ謀ル更ニ難カルベシ如何様とぞして穩カニ纏め度き迄の之ト
一 恭親王切ニ兩國之平和ヲ望ミ敢テ戰端ヲ開クヲ好マズ因テ考フルニ過日總理衙門諸大人^(環)宍戸公使ニ面晤之節我等も衙門之大臣ニ非ラス閣下も欽差公使ニ非ザル處ニテ御話し合申度琉球事件閣下ノ御見込も如何無事ニ歸スル様之御考へハ有之間敷哉と再三申出候處其砌小官も邪察ヲ加へ彼等詐術ヲ以て我ヲ試ミ候と存し密件第七號ヲ以テ申上候次第ニ候處今日之聞ク所ニ據レハ過日之談判も全ク恭親王之意ニ出テ無事ニ相纏リ候様我レニ一步ヲ譲リ吳度との注文ニテ有之たる事と存付候
一 李氏ノ論旨も其意專ラ琉球ヲ復シテ獨立國とあし以テ小國ヲ庇保スルノ美名ヲ博スルニ在リ左それハ廢藩置縣之令ヲ取消スニ非サレハ決シテ

承服スルニ至らざるべし

一 以上傳聞之件々果して實説ニ候ハ、到底各國ノ仲裁ニ付スル歟戰爭ヲ開ク之ニ途ニ出でざるべし乍此上廟議之確然不拔ヲ奉祈候
一 萬一何如璋東京ヲ引拂候様相成我全權公使も依然北京ニ駐在致し居候ハ、是非共總理衙門之掛合ヲ引受討論セザルヲ得ザル之勢ニ立至リ可申是亦豫メ御廟議有之度事と奉存候

明治十二年七月六日

在北京

(大藏權少書記官)
竹添進一郎

大隈參議殿

伊藤參議殿

七五五 福澤諭吉書翰

〔大隈重信宛〕

明治十二年八月二日

横濱の洋銀當春の騰貴以來先づ平に歸し目出度事には候得共結局其勢を挫くにあらざれば再騰なきを期すべからず其再騰は兎も角も全體に洋銀の面目を失はしむるに非ざれば我貿易銀の流行も埒明申間敷唯今の勢にては我商人は品物賣買の外に又洋銀を以て窘めらるゝ者なり依て先日より一二友人と談じ様々談論の末別紙一冊出來申候何卒御熟覽被下度此一事所謂山師の手に掛りては徒に政府をして私の山を助けしむるに過ぎざることなれども自から亦慥なる人物なきにあらず其人物あれば政府は唯庫内の金を外に出して準備に用るに異ならず毎日驗査するも可なり毎週報告するも可なり且大丈夫を押へて無利足と覺悟を定るも必ず利なきを得ず十數年の後は其利足の嵩みたるものを以て恰も一種の常平局を設け洋銀なり貿易銀なり終年注意して其調子を取らば當春の如き騒もなく永年に平均して我貿易の爲には大なる利益ありと存候

右の一條若し思召御座候はゞ尙御相談の上これと申人物も可申上又は御

預け金の手數順序検査の方法等も相同度小生は大藏の全局を知らず唯貿易一條に付外人に利を占めらるゝを不快に覺へ最も大切の事と存候より態と申上候篤御勘考被成下夫れにも不及との御見込に候得ば亦唯夫れ切りの事のみ思付の儘申上候間可否の御報奉願候或は事に依り御着手の御思召も御座候はゞ一日を卜し參上候ても宜敷此段要用申上度早々頓首

八月二日

福澤諭吉

大隈先生侍史

追て本文の事は随分山師有志者の好む所のものならんと存候間若し御着手の思召なくば誰にも御話し被下間敷徒に山師に貸すに山の種子を以てするのみ

七五六 白上直方書翰「大隈重信宛」明治十二年八月廿五日

肅啓愈御健全御機務御浩繁可被在爲朝野欣幸此事ニ奉存候過日ハ函館邊御旅行之處御無恙御歸京被遊敬賀之至リ御座候陳又鄙官赴任以來淺才微力を以罪を次官之職ニ待已ニ一周年餘を經過し尙寸効を奏スル能ハス慙愧之至リニ候得共當縣下民間之慣習風俗等ハ漸次略察仕候心得ニ罷在候然ル處縣治之事ハ時勢之變遷人情之開進等ニ隨ヒ民度ヲ量リ其權衡宜シキヲ得候之固ヨリ容易ナル事ニハ有之間布候得共豫テ御賢知之通り當縣令永山氏ノ性質ノ如キハ唯一片之守朴ノミニシテ治民上ニ付テハ尤モ巧ナラス夫レカ爲メ自然官民離隔之勢ヲ顯ハシ動モスレハ人民其針路ヲ誤リ候モノ無之ニ非ス之レカ爲メ遂ニ昨今之如キ暴民等ヲ醸出スルニ至リ實ニ御申譯無之次第ニ候得共何分平素鄙官ト縣治上意見ヲ異ニスルヲ以テ卑說ノ容レラレサルモ亦少カラス眞ニ遺憾奉存候最モ今回人民騷擧ニ及ヒシ如キハ唯一時ノ事ニシテ即チ虎列刺豫防法ヲ誤解之妄說ヲ信シ又一ツハ米價之邊騰セシ杯ニ對シタルコトニ候得共之レ畢竟右申上候通り平

素官民間離隔セシ邊ニ起因候義と奉存候實ハ右等之事情申上候ハ甚恐懼之至リニ候得共嘗テ御懇旨被下候次第モ有之忌諱ヲ不憚内々具上仕候間不惡御取捨奉希候誠惶頓首

八月廿五日

(新潟縣大書記官) 白上直方再拜

大隈公閣下

七五七 竹添進一郎書翰「大隈重信宛」明治十二年八月三十日

密件第十三號

英人ビットマン氏ヲ北支那ニ派出被命候モ貿易穿鑿ヲ名とし其實モ駐北京各國公使之模様ヲ相探リ候之御旨意ニ可有之と竊ニ推考仕候支那政府ニ於テ外憂内患多端之折柄ニ付萬々戰ヲ開クヲ好マザルモ彼レ之照會文中之語氣ニテ明白ニ相見ヘ申候然ルニ英公使ウエード氏ニ仲裁ヲ依頼

まゐるハ必定ニ候間右ウエード之意中ヲ相探リ候モ今日最緊要ナル儀ニ候
 處右ピットマン來着之上モウエード氏之意中委曲探リ取り出來可申存候
 小官儀九月ノ初旬北京發足之積ニ有之候處^(通)宍戶公使より現今總理衙門
 ノ第二照會文を御國ニ轉致中ニ付右照會文之返答到着ヲ待テ更ニ總理衙
 門之模様ヲ見込ヘ然ル上ニテ細詳上申之爲メ歸朝致し候方公邊之御爲メ
 筋ニ可有之との見込ニ有之小官も其義を尤ニ存候間遂ニ當分滞在致し候
 方ニ内決致し候尤十一月之末ニ相成候ヘモ天津河水結候ニ付十月ヲ過キ
 候上モ速ニ北京ヲ發程仕候覺悟ニ御坐候右内信を以テ御聽ニ達置候也

明治十二年八月三十日

在清國北京

^(大隈權少書記官)
竹添進一郎

大隈大藏卿殿

追啓前便密件第十三號ヲ以テ申上候琉球人天津ニ來着セシ云々モ全

ク訛傳ニ屬し候義ニ付此段追申候也

七五八 五代友厚書翰「大隈重信宛」明治十二年八月三十日

尙々亂筆御推覽奉希上候

爾後御動靜不奉伺候處愈御安泰先般北海道迄も御周遊之由御模様ハ松方^(正義)
 傳承奉欣賀候隨而^正生ニも無異消光仕候間乍憚御放念被下度陳モ先月
 來米價沸騰既ニ新潟縣杯ハ例之竹鎗を用候由兵坂地も諸縣下高直と惡病
 之唱アルトの貳ツニ入船無之殆食料之欠乏迄ニ至ントスルノ景況ニ相
 成申候併坂地丈も御藏米も有之可成ニ新穀迄取續キ可申候兵庫モ此未入
 船無之候ハ、餘程カスリ可申併是モ十月之事と存候間夫迄ニモ貳百十日
 共ニ無事ニ彌百姓豐作を知り貳三俵宛相蓄居候米をも賣出可申と希望
 候而已當秋モ彌豐作ニ相違無之十貳分之出來と想像仕候御同慶此事と奉
 存候

○條約改正云々之儀疾ク着手仕候筈御座候處彼惡病之爲ニ會議を催候も集會不致不得止遲延致居候處追々惡病も鎮消之折柄過日香港知事會議所ニ參候節之演舌ニハ人氣條約改正之焦眉不可欠之事を知り各議員大ニ憤發之兆を顯候處ハ過ル廿一日初日第一會を開引續キ隔日ニ小會を開テ頻ニ勉勵罷在申候何分ニモ己ら人形を相手ニ美決を取る之目的ニハ甚困却仕候仍之議員中ハ委員撰舉是ト小會議を開キ御趣意之アル處を教示且發論之目的を與ヘ然シテ後大會を開候手順ニハ隨分骨之折セタル議事ニ有之候御諒察被下度

横濱神戸大坂外國人商法會議所ハ意見書差出タル書類何モ承知和解爲致候處實ニ言語同斷之論を吐齒切ニ堪不申到底此論を破不申候ハ政府之御目的不相立加ルニ大坂商法會議所之任も亦不相立儀与一同憤發罷在候仍之必ス御見込も可有之与存候間過日電報を以奉伺候義ニ御座候御參考之爲御下問相成候條々モ折角手調中ニハ是モ無不都合御答辯申上候目的

ニ御座候即御下問之如きも小會議委員ニテ目的を究置不申候ハ大會議ニハ變ある處ニ目的を生候ハ甚不都合ニ有之候御笑察被下度大會議も此月節季ニハ商人モ餘程急ケ敷候ニ付來月二日ハ相始候筈勿論當日ハ傍聽も隨意ニ相免候筈ニハ兼ハ切合タル大角力を始候松方ニモ其時分モ當地へ參リ候約束ニハ三五日滯留爲致神戸横濱委員ハ差出候意見書ニ付討議スルノ條ニ於テ内密示談致候筈打合置申候間極内御承知被下置度見込ニハ此議事を本月七八日迄相片付夫ハ議事日誌及會議所ハ之獻言書等相認十貳三日之船便ニハ迂生持參出京仕候筈御座候間御待被下度

○家業之儀も内國ハ大ニ相開ケ從來之製造高ニハ不引足位ニ相成申候支那景蘇州表ニ一商路を開初ハ五拾樽を賣出追々景況宜候寧波表ハ德澄之破談後盛恭號此人物ハ德澄と條約之前ニ殆成約を爲候者ニハ再ハ條約之望を申出候趣ニハ其爲津村儀天津行遲延ニ相成候仍之津村ニモ比日天津航洋中と申位ニハ大ニ天津北京之着手延日ニ及遺憾不少天津ハ頻ニ津村之

出航を促來候良景ニ付津村之出張候上ニ必進歩を見るるをしと存候兩三日中ニそ彼御考配を蒙候森山も出京仕候間諸事同人を以可申上候其内ニ迂生も出京猶御直ニ可申上候先ニ御伺旁奉得尊意候也

八月卅日

松 陰

重 信 様 侍 史

貳白當地之惡病も追々鎮消目今三拾人以上と相成加ニ市中ニそ餘程相少ク候反ニ御地ハ蔓延之兆有之候趣大ニ掛念仕候該病ハ豫防と攝生之貳ツニ注意致候ハ、決ニ傳染不仕候間爲國家充分御注意被下度奉祈念候餘事申上度儀モ山海難書不日出京之上ト申上縮候

七五九 福澤諭吉書翰「大隈重信宛」明治十二年九月十二日

益御清適被成御座奉拜賀陳ば先日拜趨の節通辯の御話有之其時には不心

付候處爰に一名を思出し候舊鹿兒島藩士田尻種香(猶次郎)と申者先年弊塾え寄宿其後亞國留學凡そ八年計も執行の後本年八月歸朝昨今郷里え歸省いたし居多分今月末歟來月には出京可致此者は彼國にて専ら經濟學を勉め甚説もあり亦品行も正しく通辯は外國人同様に出來可申若し思召あらば可申遣但し本人の諾否は固より不被計候得共素より理財に志し候事ゆへ假令通辯と申ても大藏省とあらば或は甘じて奉職可致哉に臆測被致候人品は自から上等に候間給料も其思召にて御遣し被下度奉願候
バンクの一條はい才小泉(重吉)へ申含置同人より御話申上候積にいたし置候此一事に付先日御話の通り相違無之他えもいまだ御話もなく急度御役立の事に至らば小泉始め中上川(兼次郎)も共に盡力して恥かしからぬ成跡に至り可申何事も途中に變じては誠に困却他人に信を失ひ始終の妨相成候間彌以無間違處を小泉え被仰聞被下度既に先日之御話に由り極々信すべき都合の人えは内々話しもいたし置候事に御座候

右要用のみ申上度早々頓首

九月十二日

福澤諭吉

大隈先生侍史

七六〇 調所廣丈書翰「大隈重信宛」 明治十二年九月廿六日

尊翰謹お拜展

閣下倍御萬福御動止被遊謹祝之至ニ不堪奉存候

敬陳過般當道御巡視之節ハ何等之御招待モ不申上之處今特ニ御丁寧御挨拶ヲ受ケ却テ恐縮仕候御書中之趣ハ速ニ同僚中へ傳語共ニ御謝辭之辱キヲ感佩仕候義ニ御坐候却說香港鎮臺ヘンテツシ一氏ニモ曩ニ歸途ニ就カレ候由廣丈等ニ於テモ只管其海陸無恙歸任アラシトヲ祈望罷在候時ニ秋冷日ヲ逐テ相促シ申候處爲國家御自重被爲在候様仕度拜復旁謹お奉呈一

書候頓首敬具

明治十二年九月廿六日

開拓大書記官調所廣丈

大藏卿大隈公閣下

七六一 シーボルト書翰「大隈重信宛」 明治十二年十月二日

奥國ノ官本書林「ゼ・チ・バリール・デ・ブラウミユルレル」氏ヨリ御省ニ別段ニ要用ナル珍書一群大藏卿閣下へ奉呈ノ儀依頼ニ付右申上候光榮ヲ有ス

「ゼ・チ・バリール・デ・ブラウミユルレル」氏ハ奥國ニ於テノミナラス猶ホ又タ數多ノ他國ニ於テ大ナル勳功ヲ得タリ是レ同氏カ二十五個國ヨリ少ナカラサル君主ヨリ賞牌ヲ受取リタルト云フ事實ハ其職業ノ拔群ナルヲ見ルニ足ルベシ

猶ホ申上候儀ハ「チ・バリール・デ・ブラウミユルレル」氏カ曾テ一二年前數多ノ

書籍ヲ日本政府ニ送り又々過日更ニ第二ノ群書ヲ伊藤博文公閣下ニ由テ
日本政府ニ送りシハ是又申上置候

此書狀ニ封入シテ右奉呈候書籍ノ目錄ヲ差上候間閣下此目錄ニテ御調査
御落手相成其御請取書ヲ「ブラウミュル」氏へ御遣シ被下度奉希候拜具
一千八百七十九年十月二日

ヘンリー・フォン・シーボルト

大藏卿大隈重信公閣下

日本帝國大藏卿ニ「ウキナー」府官本書林「チバリール・デ・ブラウミュル」
レ「氏」ヨリ奉呈スル書籍目錄左ノ如シ

「ブラウヘル」氏
獨逸政體書

「ケールニヒ」氏
豫算表調製方

「エシリーヒ」氏
出納及ヒ計算全書

「ケルン」氏
統計書

「ミユリ」氏
埃國理財書佛書

「ノイマン」氏
歐洲通法

「カルリー」氏
經濟書

「ハウスホーヘル」氏
統計書

「マルハチー」氏
領事心得書

「スタイン」氏
經濟理論

「ハクテール」氏
正貨及信任論理

七六二 大谷光勝書翰「大隈重信宛」明治十二年十月四日

秋冷ニ候先以御健享奉賀候陳者兼々御配意奉蒙候 勅額客月廿九日宮内
省より御下附昨日弊山(東本願寺)被爲成拙初始闔山ニ徒歡天喜地愈 天恩ニ優
渥なるを感戴仕候右奉辱盛典候事ニ偏ニ 殿下吾宗教を高庇被成下候特

愛ニ出候儀ト奉畏候此段不取敢奉謝度如斯候也誠惶謹言

己卯十月四日

(東本願寺法主)
大谷光勝

呈

大隈參議閣下

七六三 福澤諭吉書翰「大隈重信宛」 明治十二年十月五日

爾來益御清安奉拜賀候近日は別て御多忙奉察候過日拜趨の節極内の御話の一條は其後小泉より承り追々御着手にも可相成由就ては茲に一人あり名を中村道太と云ふ此人は舊豊橋藩會計頗る地方の名望を得て既に豊橋の銀行も同人の起立老生は多年懇意致し極て慥なる人物に付實は此度の一條も彌以御着手相成候には學者の外に實地熟練の人なかるべからず即ち此任に當る者は中村道太ならんと存じ少しく秘事を洩し候處同人にも

大に説あり(但し洩し候共此人より他に洩るゝ恐なし)就ては最第一の緊要は人民の金を募るに在り此金を募るに付中村なれば江州大阪等に知人甚多し何卒御内意を承て其方に取掛度との義其邊の事も唯今銀行云々の事を公然と申す譯には不參何とか名義を付けて江州大阪其他新潟の方へ参り度との事に御座候右の事情は小泉より可申上筈いたし置候得共何は扱置此中村えは一度御逢相成候ても随分面白かるべきと存じ爲に一書を認め同人え相渡候間罷出候はゞ御都合次第御逢奉願候尙い才は本人より可申上洋銀等の事に付ては随分説ある人なり一時間計りの時を御費し御話奉願候右要用申上度早々頓首

十月五日

福澤諭吉

大隈先生侍史

七六四 六戸璣書翰「伊藤博文宛」 明治十二年十月五日

去月廿六日福島安正事英人畢德曼氏同道にて北京來着八月十二日御仕出
 之御書面并ニ覺書共印刷三本奉收手候右ニ有グラント氏へ御談話之様子
 等明了いし申候去月廿二日爰元（卷）井上外務卿へ私信中ニ有申出置候通
 リ支那總署之所謂有明白事理之人出而主持公道云々ハ暗ニグラント氏汝
 頼ミ申出せる事ニ相違無之候此回畢德曼氏威妥并ニハルト氏ニ面談之趣
 ハ大略別信を以て外務卿へ申出候付素々入御覽候事ト存候間右ニ有御承知
 可被下尤威妥トシテハ球島之件總署ハ未ニ爲何談話ハ無之候へとも入
 京之節天津ニ有李鴻章ハ球島一件巨細承知いし候へ共偏聽ニ有ハ何と
 も返答いし兼候ト申置候處球島先年佛國ト條約相結居候處ニ有ハ獨立
 ノ一國ト相認居候段申居候よしニ御座候尤此回御持をニ印刷書ハ先日畢
 德曼ハ威妥氏へ見を置候由ニ付先々之偏聽ニハ不相成事と被察申候此書
 相認候最中今日畢德曼氏來話之趣ニハ今午前威妥氏へ參リ談話候處球島

一件之書面篤ト熟覽いし候よし小生ハ何ト有此一件ニ付談話も可有
 之處只今迄ハ一言も不承候間何卒談話も候ハ、承リ度杯申居候よし右ハ
 畢竟小官事球島事件ハ御委任ニ本務ニ無之且自國ニ有當然之御處分ニ相
 成候球島一件汝自我彼は相談ニ上外人ニ談話いし候ハ却而いり、しく
 ト存小官ハ何とも不申出候へとも白露公使又ハ獨逸公使杯ハ避暑談話
 ハ見込相違ニ候へともいハ可有之カヒットマン平生之愛憎上ハ見越起し候事も有之哉
 之序等彼ハ少々申出候事も有之ニ付諸公使中ニ有球島一件之議も有之候
 哉ト相尋候處別段各國へ關係無之事ニ付格別ニ談話いし候事も無之ト
 申候右ニ有外ニ尋問いし候様子も無之ニ付此方ハも強而不申聞候右ニ
 次第ニ付英公使へも只今迄ハ逢毎ニ彼ハも不申出ニ付此方ハも素より球
 島事件ニハ談及いし不申候へとも此方ハ依賴ニ姿ニ不相成様談話之運
 ニも相成候ハ、談話ニ及候事も可有之候扱之ハ外務卿へ之別信ニも申出
 候通威妥ハルトとも球島處分前ニ一應支那へ挨拶有之候ハ、可然事ニ候
 へとも右取計方支那汝輕蔑するニ當リ我國ニ有ハ兎角外交上ニ曲徑邪路

我步行スルとの申分有之由ニ候畢德曼氏も右ニハ少々不尤とも不考様子
 相見候ニ付同人ハ球島一件從來我政府ニ支那ト約束いしる事無
 之ニ付挨拶ニ不及ニ不都合無之支那ニハ兩屬と相心得よしニ付處分
 前ニ挨拶いし候ハ決而處分ハ出來不申且ツ朝貢等支那ニ球人ニ被
 欺騙候一事ハ非我邦ニ所知云々ト申聞を置候處いつを歸路天津ニ李鴻
 章ニも逢候心得ニ付此等相心得置候よろしきと申居候爰元へ滯居候而
 も最早格別ニ事も有之間敷ニ付明後日當地出足天津ニ赴キ夫より上海ニ
 而東京へ電信を以進退相伺候覺悟よし申居候ニ付任其意置候間右様御
 承知可被下候

去月廿七日懸合之上總理衙門へ參リ申候恭親王ハ公用有之よしにて出會
 いたし不申董珣沈桂芬王文韶夏家鎬四大臣出會ニ付只今迄ハ兎角御目ニ
 當リ候毎々議論ケ間敷事ノミ承リ候ニ付此よりハ何卒我本務ニ親睦交際
 いし度久々拜晤不致ニ付相伺度參上之段申入候處彼等も同様挨拶いし

し種々對酌閑話罷歸申候臨去いつを追而弊館へも御來臨相願候故恭王爺
 へも可然御傳語被下度尙諸公ニも其節必々御入來被下候様申入候處い
 つを也欣然參上可致申居候まじし球島一件ハ彼も何とも不申出ニ付一
 切談シ不申多分先日グラント氣付ニ照會書差出候故萬安心いし居候
 事ト被察申候尤丸々泣寝入外務卿は別信中云々ハルト之申分ニ有之故態ト申上置候いし候覺悟ニハ有之間敷グラントハ我政
 府へも兩國和平之儀ハ切言切告いし候故兩大員應接候ハ、何ト歎少し
 ハ支那ノ面目も相立候様いし吳候事ト總署ニハ思込候事歎ト被察候
 間御疎ハ無之事ト奉存候へとも爲念申上置候先ハ用事ノミ拜酬旁如此御
 座候也頓首

十月初五

再啓時下御保齋專一ニ御座候此回ハ外務卿へ別ニ巨細ニ私信差出不
 申候付此書面御傳覽被成下度山田工部卿へも御序よろしく御傳聲相
 願申候

拜復

春 畝 盟 臺

座下

七六五 尖戸璣書翰井上馨宛 明治十二年十月五日

奉拜啓候不被爲變御職務御多忙ト奉遙察候扱畢德曼氏來着後之様子ハ別
信を以申上候ニ付巨細御承知被下候御事ト奉存候其餘之事ハ春畝君へ渡
書中ニ委曲申述置候付此より御回覽被下候御事ト奉存候承り候へハ何如
璋ハ横濱へ参り居よし避病院方参り候事ニ可有之只今急ニ引拂と申譯ニ
無之事ハ當地總署之様子ニ亦も知レ申候いつを畢德曼近日出足歸途ニ就
キ候故巨細御承知被成候御事ト奉存候尤先日總署ハ照會之通り大員派遣
之談判もいつを少々ハ支那之面皮も立吳候事ト總署ニ亦ハ思居候事りと

被存候間御疎ハ無之事なりら御考慮被成置度奉願候グラントも兩邦へい
つを不失利様ニと勧め置候之と被存候總署ハ照會文中之意ト内務卿
ハ小官へ私信中切言切告云々ト披露し見候へハ總署輩之思想も大略想像
被致候事りと奉存候思出し候儘申上置試候也餘ハ讓後鴻候也頓首

十月五日

追々時下御保齋專一ニ奉存候杉山へもよろしく奉希候之

璣

井 上 盟 臺

閣下

七六六 福澤諭吉書翰大隈重信宛 明治十二年十月十三日

過日拜趨の節御内話のバンク一條創立の當分官よりデポジットの内援あ
れば必ず首尾能行はれ可申小生も之を信じて疑はず何卒遂には官の預け

金止めて人民の私有預け金と入替候様いたし度事なり此事も亦或は難きにあらざるべし就ては何分大金の義に付人物を定め候上は尙明白にも不申聞候得共假に言葉を設けて若しも今の世の中に斯る事のあらば金を出す者あるべきや否杯と遠廻しに申談候處中村道太杯は固より之に任じて自から疑を容れず其外弊塾舊生徒北越の一豪商某も此程出京中素より家人同様の者に付これにも夫れとなく内話致候處三十萬圓は一手にて引請可申との義旁以今般の一事其下た話は唯今より取掛候義に付其段御含迄申上置候決して内實の實情は口外不致候得共信すべき人物丈けには聊か内談不致ては不叶次第且御省の方にて先日御内話の通不日公然御發令の事ならん御發令次第中村道太始發起人數名にて出願可仕間極内に御含置被下様に内々の御指揮奉願候何分とも一大事業萬々一も間違有之候ては小生も親友に信を失する義如何にも恐ろしく思はれ候に付念に念を入れ尙一應申上置候要用のみ申上度早々頓首

十月十三日

福澤諭吉

大隈先生侍史

七六七 永山盛輝書翰〔前島密宛〕 明治十二年十月十九日

其後益御壯健被爲涉奉恐賀候先般上京中不容易御配慮ニ罷成恐懼ニ至千萬奉謝候昨日御届致置候通り大塚七等出仕着翌十四日出廳ニ處直ニコレヲ病發致シ早速夫々療養手ヲ盡シ候得共無其詮終ニ昨十八日正午過終去相成何共此節柄殊更遺憾ニ至ニ御座候埋葬等之儀ハ出張官員申談夫々不都合無之様取計申候夫が爲着已來諸般打合ニ儀も出來不申候甚混難致候得共已ニ御立前御咄ニ荒川方ニ手ヲ以新發田白勢方へ御申越趣ヲ以内話致し候處廿二大區ニ方ニハ所持地も少ク尤先般來歎願委任等も不致置廿三大區ニハ抱地も有之村方申談ニ次第も有之歎願ニ方ニ同意致置候得共

此上ハ致方も無之候付村方ニも申談御受之都合ニ致度廿二大區之方ハ金子村之白勢天王新田之市島へ申談不致候ハ壹人先立御受之都合ニも至兼候付早速申談度トノ事ニハ白勢宅へ代人共打寄一往協議ヲ盡候處金子之白勢ハ本家白勢之意ニ隨ヒ此上ハ受ニ可及外無之ト申事之由ニ候得共市島ニハ一往之談ニハ其場迄不相運故猶又新發田ハ白勢新潟差越市島末家白勢ハ申談候處いつ之筋苦情村々頭立之者共ハ申談可及返事トノ事ニ候新潟へ一往白勢ニハ罷歸候由可相成ハ小官説諭ヲ不受内彼等ハ申立方ニ致候へハ外聞等も可然トテ白勢ニハ精々中間ニ在テ盡力致ス趣ニ付猶又荒川へも實際之模様承候處右之都合ニ有之小官ハ白勢へ兩宅ニハ盡力之趣賞賛シ此上ハ到底願意難遂儀ハ顯然タルコトニ付一層兩家へ相諭シ速ニ相運候様申諭候ハ可然哉ニ存候旨荒川ハ申聞候處至極可宜トノ事ニハ荒川ハ白勢へ相通候筈ニ致置候處參候付前顯相催シ盡力之段賞賛シ速ニ兩家之所相運度申聞候へハいつ之兩三日中ニハ否相分候間其上何分

模様可申聞トノコトニハ本人ニハ專ラ盡力中ニ候伊藤退藏十二日東京出發候趣承居候付最早可致到着日限と相待候得共未之否不相分定テ水原ハ直ニ參候事ニも可有之候兼ハ打合置候都合も有之一面會不致候ハ差支候儀も有之相待居事ニ御座候廿二大區景況探偵候ニ未之一定不致最早絶念致居候者も有之或ハ歎願致度杯申者も有之由多分ハ市島白勢等受ニ及候ハ、或ハ歎願致心底之者も絶念可致と存申候白勢盡力ニ市島之模様と伊藤着ノ上一面會ヲ相待居候事ニ御座候猶委細ハ后便可申上候即今之模様一往御注意申上度旁呈書仕候謹言

明治十二年十月十九日

内務少輔前島密殿

新潟縣令永山盛輝

七六八

吉井友實書翰

大隈重信宛

明治十二年十一月一日

各位御清適奉賀候然者兼而御保護ニ預リ候彼製造所も粗體裁相備リ候間一日御都合を以御見分相願度御閑暇之折前日爲御知被下度希望候扱亦東京長崎兩所ニおひて消費之藥品代價一ケ年凡五萬圓ニ相及ヒ候ニ付彼清水某斷然辭職製藥以多し度所存ニ而詳細河瀬局長(秀吉)に申出置候由今少シ資本御下ケ相成候ハ、屹度成効ヲ奏シ可申候間急ニ御評決被下度猶委細ニ局長に上申相成候事与存申候此段御願申上度如此候也

十一月一日

(工部少輔)
吉 井 友 實

大隈 殿

松方 殿

追而松方殿小坂鐵山にも御踏入之由如何候哉定而御氣ニ入候半与相察居候

七六九 德大寺實則書翰「大隈重信宛」 明治十二年十一月三十日

來十二月二日午後六時於假

皇居伊太里皇族ジュツク・ド・シエーヌ殿下ト御會食被遊候ニ付御陪食被仰付候間參 内可有之此段申入候也

明治十二年十一月三十日

宮内卿德大寺實則

參議大隈重信殿

追テ大禮服御着用且御差支有之御不參之節ハ明一日正午十二時前迄ニ御申出可有之此段申添候也

七七〇 伊藤博文書翰「大隈重信宛」 明治十二年十二月九日

竹添(進)其外方之來書閱了候ニ付乃返上候御落手可被下候

官祿稅ヲ廢シ奏任月給復舊之事ハ内務省取調見候處一ケ年僅ニ一萬九千

圓半ケ年ニ於九千圓餘ニ有之候故無論定額ニ差繰出來可申此儀ハ是非御舉行之運ニ相成度と存候也

十二月九日

(參議院內務卿)
博文

大藏卿殿

【備考】是年十二月廿七日官祿稅廢止を布告し、明年一月より之を實施す、

七七一 長岡義之書翰「大隈重信宛」 明治十二年十二月九日

風霜肅索稍覺寒冽先以閣下益御健勝奉恭賀候陳ハ三菱會社香港開帆之業タル其日猶淺シト雖モ已ニ神阪兩港百般之商業ニ影響ヲ及セシテ實ニ少々ニ非ス乃輸出入品ノ元價噸數表備貴覽候其輸出入品中最高價ヲ占ムルモノハ銅ニシテ海產物ノ如キハ噸ニ市場ニ有荷ヲ賣盡シ諸國ヨリノ來荷ハ假令僅々之品ニテモ到着次第直ニ賣レ今日ニ至テハ其荷不足ニ困ムノ

姿ニ有之候將タ其輸入品ハ專ラ砂糖ニ候得共今便ヨリ印度木綿糸ノ輸入モアリ加之一體是迄英佛郵船外之本國仕出ノ船ト雖モ一應上海へ着シ夫ヨリ橫濱神戸へ荷役致候ヲ以神戸ニ來ル荷物ハ毎々橫濱之後ニシテ一ケ月餘ノ遲着ニ有之候處此開航愈取續ニ至ルキハ神戸へ來ル荷物ハ悉ク香港ニ於ル此三菱郵船ニ移シ輸入相成ルニ付輸入人等ハ從來遲着之不便ヲ除去スルノミナラス反テ橫濱ヨリ早着スルノ幸ヲ得ルナリト相喜明年ヨリハ此地方需用之物ハ直ニ神戸へ輸入スル哉ノ景況ニ相見へ候是全ク閣下曩ニ御盡力被成候賜ナリト言ハサルヲ得ス今運輸之路如此相開ケ百般ノ商業ニ便利ヲ相與候以上ハ神戸ニ於テ生糸ノ商業最モ企望スル處ニシテ已ニ先年申出置候通ノ次第ニ於當地ニ荷爲替并ニ荷物抵當貸付之事相調候得ハ必ス此商業ノ興起スルハ疑ヲ容レス果シテ然ラハ從來外國ノ貿易ハ獨リ橫濱ニ而已偏重セシ弊モ醫療シ商業均一ノ法ヲ得ルノミナラス間接ニ殖産之誘導トナリ逐々輸出品額ヲシテ輸入ト相拮抗スルニ至ルヤ

固ヨリ期シ難シトセス伏テ願クハ閣下今一層ノ御計畫アリテ事ノ全備ニ立至ル様御盡力アラシコトヲ依テ開航以來之現状ヲ報シ併テ將來貿易上ノ見込ヲモ開陳シ此段及稟申候也拜具

十二年十二月九日

(大隈少書記官、神戸在勤)
長岡義之

大隈重信殿

閣下

七七二 内海忠勝書翰

「大隈重信宛」明治十二年十二月十日

拜啓追日寒氣相加候處益御安康奉賀候先般滯京中ハ蒙御懇親奉鳴謝候其節廉々御内諭ヲ仰キ候得共猶相同度事件左ニ申上候
一 佐賀士族就産金拜借願之儀ハ如何御處置相成候哉御模様承知仕度候
一 先年減祿サレタル佐賀舊卒共山野開拓海面埋築等之企望ヲ以テ資金七

拾五萬圓政府ヨリ拜借之儀小官歸縣前出願之趣ニ付願人へ面會之上右拜借金之儀ハ爾輩上京致シ如何程歎願候トモ御聞届之儀ハ萬々無覺束ニ付好機會ヲ得ル迄ハ中止可然且上京之旅費モ又不少彼是省思有之度旨演說候處在京之同郷人即貴顯之方ヨリ拜借金出願之儀ハ即今好機會云々相促サレ候事モ有之趣申述候ニ付是又說破仕候得共當ニ東京之報知ヲ信シ變心不致體ニテ只管上京之儀申立候故右願書ハ過ル五日^(松方)内務卿へ進呈仕置候右ニ付是迄御聞込之廉も御坐候ハ、至急御内報被下度奉願候

一金祿證書御買上之儀本年限御廢止ニ付相伺候條目中年内之分ハ直ニ拜承來一月以後之分ハ追テ御示諭之筈然ルニ歸縣後實況ヲ觀察スルニ最早奸商共入込益困難之情態ニ付將來保護之途熟考仕候處當港へ株式取引所創立之儀御許可相成候ハ、格別之影響有之間敷哉抑モ株式取引所ハ東京大坂二府之外建設不相成御成規ニ有之候得共右二所ノミニテハ

各府縣之價格大ニ異動ヲ生シ僻陬之人民ハ常ニ損失ヲ蒙リ當縣ノ如キハ安價ヲ以テ之ヲ大坂或ハ東京へ賣却セサルヲ得ス若今當港へ創設御許可相成候節ハ金祿證券ハ勿論銀行株券并起業證券其他諸公債相當之時價ヲ以テ賣買差支無之隨テ金融便利ヲ得獨リ當縣ノミナラス近隣諸縣人民之一大幸福ト奉存候尤御成規之通資金廿萬圓積立候ハ到底難被行儀ニ付貳三萬圓之資金ニテ其相應之營業仕候様御詮議相成度希望罷在候自然僻遠之情態御賢察被爲在御許可ニモ相成儀ニ候得ハ一般ニ取リテハ都鄙平等之價格ヲ保チ士族ニ於テ引續無上之保護ヲ蒙リ一舉兩全之事ト奉存候間目今之機會ヲ失セス出願爲致度候ニ付何分之御賢考至急御洩シ被下度奉願候

右御禮旁事情内陳仕候不具謹言

十二年十二月十日

(長崎縣令)
内 海 忠 勝

大隈大藏卿閣下

七、七三 鮫島尙信書翰〔大隈重信等宛〕 明治十二年十二月廿七日

兩臺不相換御清穆御奉務之條奉萬賀候陳者條約重修之義ニ付先般歐洲各政府へ書翰差出候後佛白兩政府ハ之返書ハ已ニ過便外務卿へ差出置候ニ付疾ニ御承知相成候事ト奉存候其後英獨伊等ハも夫々返翰到來之處何分即今ハ歐洲中貿易條約說大ニ擴張シ各國多くハ此條約ヲ結ヒ互ニ制稅之權利ハ束縛セラレ居候折柄ニ付今日我邦ハ從來稅則束縛之域ヲ脱シ全く自由定稅之權ヲ得ント之望意ハ如何程談判ニ盡力致候ハも非常之返償ヲ與ヘサレハ到底時勢ニ背反之請求ニ付各政府之承諾ヲ得ル事ハ難相成候尤佛其他政府ニテモ我邦ニテ何程カ増額之事ハ異議無之様子ニ候得共我邦ニテ全ク制稅之權ヲ得ントノ義ハ承諾不致就ハ貿易條約ヲ結フヨリ他ニ良策ハ無之ト存シ過便略外務卿へ申遣置候主旨ヲ擴充シ今便委細其

方法ヲ具シ外務卿へ機密信ヲ以テ運ヒ尙其趣意ヲ以口述之覺書ヲ認メ松方大輔へ交付致置候條右之書類御熟覽篤ト御賢考早々庶議御決定相成候様御盡力被下度奉希望候尤右様之談判ニ懸リ候ニハ御委任之權限狹少ニテハ我充分之論旨ヲ主張スルヲ難相成兎角掣肘之感不少ニ付預メ寬弘ナル區域ヲ以全權御委任相成度且又近來ハ歐洲多事之折柄ニテ右様之商議ハ涉取兼急速之結局ニハ難運然ルニ年々八月各政府共定例之暑中休暇ニ相成諸省長官等一切之事務ヲ投棄シ他行致候習慣ニ御坐候間其頃迄ニ談判ヲ纏メ候積ニ付兼テ用意シ發議不致テハ無據中止セサルヲ得サル之場合有之且全權御委任無之官ハ公然談判ニ難及候故旁晚クモ來二月中ニハ庶議御一決訓狀御降付相成候様御差合之程相願候將又重修之機ニ臨ミ我々充分之權理實益ヲ享有スヘキ約ヲ結ハントスルニハ到底治外法權ヲ不廢テハ完全之目的相達候場ニ難到依テ此件ニ付テも愚考之次第前書類ニ認置候條御注意被下度尙委細ハ松方ニも承知之事ニ御坐候間親ク御

聽取被降度候

一歐洲諸國之形勢兎角不穩各國共少々の紛議ハ相絶ヘ不申伯林條約ハ結約各國ニ近々實施之場ニ爲運度との見込ニ御坐候當夏獨逸帝二度西班牙伊太利帝等狙撃之難ニ被遭候已後右之三ヶ國ハ勿論露國ニテも激論黨ヲ嚴ニ搜索シ或ハ國境外ニ驅逐或ハ拘留致候獨逸之ソシアリスト露之ニヒリスト伊之インテルナシヨナリスト杯唱ル過激論黨近々勢力ヲ増シ露國ニテハ學校生徒等此黨與ニ加リ頻ニ改革論ヲ主張致シ内政餘程困難之様子ニ相見ヘ候佛國ニテハ來一月五日上院議官新舉ノ爲メ先日來其人撰之義ニ付紛々議論も有之候得共先ツ一般之國勢ハ穩ナル方ニ御坐候英トアフガンとの戰事之報告ハ外務省へ差出置候ニ付右ニテ御承知相成度尙萬々松方御聽取被下度候右要件而耳申進度如此御坐候早々敬具

十二月廿七日

(佛國在勤特命全權公使) 鮫 嶋 尙 信

大隈老臺

伊藤老臺

尙々本邦之時情時々爲御洩被降候ハ、幸甚ニ御坐候

明治十三年

七七四 時任爲基書翰「大隈重信宛」明治十三年一月八日

謹白新年之御慶四海同風芽出度申納候

閣下益御清榮被遊御超歲奉恐賀候陳者舊臘六日(前館)日本港市街未曾有ノ火災

ニ罹リ候處類燒人民ノ困苦ヲ御高察被爲在閣下并ニ御省奏任官各位ヨ

リ金圓若干窮民救助トシテ御下付相成候趣東京(前指使)本使出張所ヨリ電報到

達仕候ニ付即時罹災窮民へ夫々相達候處深ク感銘拜戴候旨小官迄申出

候右ハ畢竟閣下愛民之御旨趣ニ被爲出候儀ト小官於テモ感佩仕居候殊

ニ

天皇陛下ヨリ特旨ヲ以テ金千圓罹災人民へ下賜候ニ付テハ類燒人民恩旨

ヲ拜シ唯感泣ノ外無之此末ハ各自奮起一途ニ業務ニ勉勵シ罹災損亡ノ

財産ヲ回復スルハ申迄モ無之將來一層地方公共ノ利益ヲ興シ誓テ 聖旨ニ奉酬候段申出候小官等モ民力愛養ノ御旨趣下民ニ貫徹候様努力可仕候條御省念被下置度先ハ人民一同ニ代リ御救助被下候御禮迄如此御坐候勿々謹言

明治十三年一月八日

(開拓大書記官) 時任 爲基

大藏卿大隈重信殿

追啓客歲當地御巡視之際御約束仕置候熊皮一枚當港製革所ニ於テ精製ノ上進呈仕候御寒防ノ一助ニ充ラレ候ハ、幸甚不過之時節柄一層御養護爲國家奉祈候

七七五 常盤井堯熙書翰「大隈重信宛」明治十三年一月二十日

新年之慶賀茅出度申納候時下嚴寒之處無御障益御安寧御超歲奉恭賀候抑

昨年之思召ヲ以 勅額下賜之恩命ヲ蒙リ無極之 天恩難有奉感戴候右御宸翰守護十二月九日發ニ而歸縣之處沿道之門末欣々然陸續相迎就中名古屋桑名等ニテハ數萬之門徒前後左右群集致混雜不一方大ニ困却致候程之次第ニテ日々賑々敷旅行致同廿一日無滯歸寺廿二日ニ直ニ大師堂ニ於テ報告式執行猶本月例年之祖師忌法會執行中十日ヨリ十四日ニ至ル五日間門末一同へ拜觀差許候處殊之外群詣仕實ニ一宗之光輝ヲ増シ無限榮譽ト孰レモ深ク優渥之 朝恩ヲ感戴仕候前件ニ付テハ種々御配慮之義相願御多用中御手数數相掛恐懼之至就而歸縣後早々御禮呈書可仕心得之處彼是延引是又恐縮之至ニ候先年甫御祝詞申述度乍此中御厚禮且宗徒一同天恩感戴不淺景況概略申上度猶期永陽如此候也恐惶謹言

十三年一月二十日

(眞宗高田派管長) 堯熙

大隈公閣下

再伸時下難凌寒威御自愛御保護專祈存候乍此中寒中御起居相伺度如此候也恐々百拜

七七六 五代友厚書翰「大隈重信宛」 明治十三年一月廿七日

愈御安康奉恐賀候陳（大阪府大書記官）て地方官會議ニ付吉田豐文本日出京仕候間京坂之事情御聞取被下度當月と不相替不融通ニ（重信）當時各銀行壹萬圓之金スラ遊金無之餘程困却之場合ニ御座候然るに米價と再高價ニ相成候得共其米と食料之外決（重信）不相動全空相場之爲に騰貴ニ赴キ折柄兵庫ニ（重信）千五百石程輸出之唱有之候（重信）小前共ハ無法ニ買進候事ニ相聞候併當年ハ幸ひ買方ニ金力有之候者壹人も無之有力家と反（重信）通合之力を以是非相下候事ニ盡力罷在申候就（重信）何方も金融不辨ニ付玄米と不相動ハ即相場之下落を兆候儀与存申候當地公債と金融不辨（重信）各銀行と勿論公債を貯居候金力家何れも賣出候景況ニ（重信）如斯下落を兆し申候何れ來月初旬ニ（重信）御下坂と奉存候間

猶事情可申上候東京ハ政體上之御變革有之との説紛々ニ（重信）其内ニ（重信）注意可致策略も有之候哉ニ被考候間隨分御注意奉仰候今日之處ニ（重信）吉原を御招呼探偵御申含有之候（重信）如何滯京中同人ニ（重信）懇々申含置候儀も有之候付決（重信）御掛念ハ無之と想像仕候不遠内御下坂と存候得共喋々掛念不少候付任幸便不取敢申上置候恐々敬白

一月廿七日

松 陰

重 信 様 侍 史

七七七 白上直方書翰「大隈重信宛」 明治十三年二月六日

肅啓氣候寒凜閣下倍御健勝可被遊御座欣喜此事ニ奉存候陳ハ當縣越後國東半部改租之儀ハ逐次御賢知被爲在候通増反別増租額ナルカ爲メ百端ノ苦情ヲ湧出シ頗ル整理ニ苦ミ候處客歲永山縣令登京之際深ク御懇示ヲ垂

レサセラレ候旨趣ヲ體シ歸縣後將來着手之順序ヲ期シ舊各大區へハ掛官員并改正出張官員等派出シ百方懇諭ヲ盡シ漸次悉皆整頓セリ於茲舊廿二三大區改租未整村々へハ更ニ手段ヲ異ニシ間接ニハ有志者ヲシテ重立タル地主ヲ鼓舞誘導シ直接ニハ縣令初メ屬官等飽マテ懇諭ヲ主トシ力ヲ極メテ調整ヲ期セシ處幸ニ右重立タル地主ノ内五十嵐甚藏齋藤治忠等改租ノ旨趣ヲ解シ衆ニ先チ事ヲ成サント欲シ大ニ盡力シテ漸ク地主共之方向ヲ轉シ八十三ヶ村計ハ請ケニ及ベリ之レ全ク伊藤退藏ノ力ナリ是レハ退藏ニ托シタル公然具狀シタルカ如シ時キニ縣令ハ水原町邊へ巡回中ニシテ右請書ヲ收ム就中殘村々へハ誠意ヲ表シ懇諭ヲ悉スト雖モ如何セン歲晚月迫ニ際シ不得已シテ一旦歸廳シ本年再ヒ同地ニ出張一月六日迄滞在シ未整村々地主共ヲ招集シ夙夜説諭ヲ悉スト雖更ニ承服ノ色ナク剩へ石川縣改租再調査之影響ヲ及ホシ一層勢焰増加シ且種々之妄説ヲ唱へ傲然トシテ上ヲ凌ク形態ニ至リタリ水原町ハ巨豪富農アリテ大厦巨屋モ尠カラサル一村落ニ有之候處縣令

并屬官ノ旅宿ヲ設ケス寺院或ハ倭屋不潔ノ旅亭ニ泊セシメ不充分ナル夜具ヲ與ヘタルノ類アリ其他名狀ス可カラサル有様ナリ即民心ノ一背斯ノ如キニ至リ長歎息ニ耐ヘス於茲縣令等方策ヲ施スニ由ナク終ニ空シク歸廳セリ此時ニ當リテ更ニ一策ヲ施シ該區内苦情村々魁首タル高橋清太郎ヲ説服セリ其手段ハ豫テ御承知被爲在候元山口縣士族當時東京府平民河野光太郎儀是レハ管テ河北俊彌ノ紹介ヲ以テ屢々閣下ニ拜謁ヲ煩シタルモノニシテ小官等舊交アルモノナリ先年歐洲ニ遊ヒ性頗ル豪膽ニシテ稍々奇オアリ一商用ノ爲メニ客年六七月頃ヨリ新潟港ニ淹留シ局外ヨリ深く改租ノ事ヲ患ヘ居タルニ因リ此ノ者ヲシテ抑人民タルモノ政府ニ對スル義務ヲ主トシ其他種々ノ大義ヲ以テ説キ清太郎ヲシテ反省セシメ隨テ小官亦彼レニ親シク面會シ遂ニ彼レカ方向ヲ一轉シ專ラ官民ノ爲メ力ヲ盡スノ精神ヲ表シ光太郎ト兩名ノ間ニ於テ歃血自主盟約ヲ結ハシメタリ即チ右寫シハ御一覽ニ供ス故ニ別途處分二十ヶ村并四拾餘ヶ村及ヒ難易之差別アレモ其他ノ未整村々共合シテ總計百有餘村共其表面上ハ益大固結ノ姿ニシテ五十嵐

等ト全ク分離シタレモ其實ハ反テ結果ヲナスノ方便ヲ得タルニ似タリ巨細之手續ハ有尾カ書記官ノ具狀セシ形態ニ有之候間宜布御裁決伏シテ奉仰候何分此結果ヲ得ル能ハスシテ終ニ六十八號ヲ用イルニ至リテハ實ニ縣治將來之事益々困難ヲ極ムヘク痛心罷在候也

副白前文河野光太郎ヲ用ヒ候一條ハ至極機密ニ涉リ候事柄ニ付伊藤退藏輩ニハ具サニ此ノ事ヲ洩サス歸京セシメ候間此段御内含被成下候様奉願上候謹言頓首

明治十三年二月六日

直 方拜

大隈公

閣下

七七八 ハウス書翰「大隈重信宛」 明治十三年二月十九日

謹白余着港後早速香港鎮臺閣下ト往復スルノ好機ヲ得彼新聞創設ノ一件ニ付討議相談ヲ盡クス已ニ數回ニ至レリ然ルニ鎮臺ニハ閣下ノ貴見ニ付テ深ク關心シ大ニ其利害ヲ謀ラル、アレハ此事業ヲ執行スルニ毫モ難キヲ覺フルヲ無ルベシ是レ閣下ノ満足セララル、所ナルベシ
鎮臺閣下ハ協同盡力セララル、アルヲ以テ此舉ヤ大體ハ已ニ緒ニ就キシニ依リ今ニ至テハ最早巨細ノ件ナラデハ取極ノ談ヲ要スルモノナシ巨細ノ件トハ即チ此事業ヲ起スノ用意取扱振等如何ニ係ルヲ是レナリ去レバ愚察ニテハ右等第二段ノ件々ニ付キ今喋々申云スルモ毫モ得ル所ナカルベケレバ歸京次第早速閣下ヲ訪フテ詳細ヲ悉サント欲ス
余ハ鎮臺ノ依頼ニ應シ尙ホ二週間當港ニ滞在スルヲ一決セリ即チ次ノ三菱汽船ノ歸着迄滯港ノ積リナリ抑モ余ガ斯ノ如ク延滞スル所以ノモノハ首トシテ鎮臺ガ右ノ事業ニ付猶更ニ見ル所ヲ盡クサンヲ余ニ希望シ且ツ右ノ事業ト其質ヲ同フスルノ目論見ニシテ猶ホ一層廣濶ノ事業ト共

ニ右ノ事ヲモ會談センコトヲ余ニ請ハレシニ依レバナリ以上ノ外尙ホ日本ノ利害ニ密着スル要件アリソハ閣下ニ取り利スル所アルベキニ付更ニ下文ニ申云シテ貴覽ニ供ス

余ヤ總理衙門ト北京駐節ノ外國公使トノ間ニ近頃締結セシ著明ノ往復書ニ付閣下ニ陳云セント欲セシコト久シカリシガ今聞ク所ニ依レバ右ハ已ニ「ピットマン」氏ヨリ其詳細ヲ井上閣下ニ具陳セラレタル由ナレバ閣下ハ同氏ニ就キ以テ支那ガ其外國政略上ニ一大面目ヲ收メタルヲ明知セラル、ナルベシ

余ヤ香港着以來「ゼテラル・グラント」君ヨリ近報ヲ得タリ其報ニ曰ク「ゼテラル・グラント」君ハ今度斷然日支兩國ノ兵力ニ付其見ル所ヲ廣ク天下ニ示サシコト一決セシ由是レ蓋シ閣下ニ取り利スル所アルベシ
蓋シ「ゼテラル・グラント」君ハ近來迄ハ右ノ一點ニ付其裁決如何ヲ世ニ洩スコトヲ太ダ好マザリシガ目下ニ至リテハ躬ツカラ大ニ其事ヲ主張スルノ色

アルハ今余ガ一言半句ノ遺漏ナク引用スル所ノ同氏ノ言ヲ以テ一目瞭然タラン去レバ同氏ノ言ニ曰ク

余ハ親シク日本ニ在テ其至精至美ナル飾隊式ヲ目撃セリ去レバ余ハ今日ノ久シキニ至ル迄未タ曾テ日本ノ如ク其兵ノ具備セルモノアルヲ世界諸國ニ一見セシコトナキヲ斷言セザルベカラス

日本ハ實ニ良全ナル兵ヲ出スノ國ナリ其兵ハ熟練至ラザルナク軍令整備セザルモノナク其兵器ハ皆ナ近代ノ新發明ニ係リ精巧至ラザルモノナシ軍備至レリト云フベシ去レバ日本ノ兵ハ何事トシテ一モ歐洲諸國ノ兵ニ同シカラザルモノナシ

夫レ日本ノ人民ハ其身輕量ナリト雖モ其性質頗ル強壯ニシテ所謂鐵質ヲ帶フルモノナリ

去レバ恰モ軍備熟練現今ノ如キ日本ハ兵一萬ヲ以テセバ支那地方ニ蹂躪シ至ル所支那兵ヲ打拂ヒ連勝ヲ以テ三千里ノ所ニ進軍シ得ベシト

以上「グラント」君ノ言ハ以テ西郷中將ノ心ヲ喜悅満足セシムルニ足ルベシ

支那兵ノ事ニ付キ「ゼチラル・グラント」君曰ク
支那ノ兵ヤ極メテ賤劣ナリ支那人ハ文明諸國ニ普通ナル兵士質ヲ備具
セサルモノナリ去レバ支那人ハ到底軍人ニテアルト余ハ信セザルナリ

凡ソ以上「ゼチラル・グラント」君ノ論ハ已ニ出版シテ世ニ公示セラレタルカ
否ラザルカハ余未タ之ヲ知ラスト雖此之ヲ出版スルモ毫モ異議アルコトナ
シ依テ閣下ノ視察セラル、所若シ之ヲ日本ノ諸新聞紙ニ掲載スルヲ良シ
トセラル、アラバ右様ナサルベシ余ハ之ヲ東京タイムス新聞紙上ニ登録
スル固ヨリ論ヲ竣タス

「ピットマン」氏ハ同氏ガ「チャップマン」社讓受ノ事情ヲ余ニ懇話セリ其
讓受ノ一件事頗ル至急ニ出テ電報ヲ以テ舉行セリ余願フニ其讓受ケ代價
ハ洋銀六千弗ナリトス然シ其金高ハ或ハ余ガ思フ所誤算ニ出ルモ量リ難

シ

蓋シ「ピットマン」氏ハ凡ソ一ケ年間モ用途ニ供セスシテ東京ニ備ヘアル若
干額ノ金員ニ據リテ此讓受ノ舉ヲ行ナハントスルアルハ余ガ知ル所ナリ
余察スルニ右ハ何等ノ金員ニ係ルモノナルカハ閣下ノ明知セラル、所ナ
ルベシ

近頃森君(有慶、清國駐劄公使)ガ香港滯在中ノ舉動ハ之ヲ閣下ニ報道シテ以テ其如何ヲ知ラシ
メザルベカラス蓋シ其事ニ付テハ鎮臺ヘンテツシ「閣下ガ深ク干涉セラ
ル、所ナレバナリ

鎮臺ハ余ニ森君ノ舉動ヲ語り以テ森氏ノ上ニ位スル諸君ガ日本ノ事ニ付
同氏ガ輕卒ノ談ヲナセシコトヲ明知セラル、コソ願ハシキ旨ヲ告ケ且ツ森
氏ノ後行ヲ目撃シテ初メテ同氏ヲ信スルノ厚キニ過キタルヲ知り太ダ遺
憾トナス旨ヲ語ラレタリ

余モ亦鎮臺ニ語ルニ余ガ毫モ森君ヲ尊ハスシテ今日迄久シク同氏ヲ疑視

スル旨ヲ以テセリ因テ鎮臺ヨリ直接ニ閣下カ井上君ノ内へ其事ヲ書通スルノ上策ナルベキ旨ヲ同鎮臺ニ告ケタリ其然ル所以ノ者ハ若シ余ヲ經テ其事ヲ書通スルニ於テハ余ガ獨リ森君ノ愛國心如何ト職務如何トニ付テ不信ヲ懷クノ餘リ或ハ徒ラニ虚飾スルヤニモ視做サル、ノ恐レアレバナリ

日本ノ圓銀ヲ合法貨幣タラシムルコトニ付テハ已ニ鎮臺ヘンテツシ「閣下ノ許ニ英國ヨリ報道ノ達スルアリ其報ニ右ノ一件ハ「サー・エム・ヒツクス・ビイチ」氏ガ大藏省ト協議中ナリト蓋シ大藏省ト斯克協議スルニ至リタル所以ハ凡ソ右様ノ件ニ付テハ殖民地ノ政府獨斷執行スル能ハザル旨ヲ大藏省ヨリ發議セシヲ以テナリ然レハ鎮臺閣下ハ再應其事ヲ女王陛下ノ政府ヘ上申シ以テ廟議ニ付セリ依テ鎮臺ハ其事ノ必ス奏効スルアラント信シテ止マス猶ホ鎮臺ハ「サー・エム・ヒツクス・ビイチ」氏ヨリ電報ヲ以テ其情願ヲ實行スベキ許可ヲ受クベシト思考セラル、アリ

假令其事タル日本ニ關係スルニハアラスト雖ハ支那兵ヲ雇入レテ以テ英人ヲ其士官トシ香港ノ防禦ニ備へ從來ノ英兵ハ悉ク香港ヲ去ラシメシトノ用意最中ナルヲ聞クハ閣下ニ取リ利スル所モアラン尤モ此舉未タ世ニ洩レスト雖ハ實行スルニ至ルハ必スベシ其際ニ當リ鎮臺ノ敵黨ハ大ニ此舉ニ抗抵スルハ論ヲ埃タスト雖ハ斷シテ其實施セラル、ヲ期スベキナリ鎮臺ヘンテツシ「閣下ハ英人ノ「サー」スベリイ」侯ヨリ一書ヲ接手セラレタリ其書中「サー・ハアリ」パークス」ガ日本ニ歸任セザルコトヲ確論セリ其書ニハ「パークス」ノ歸任ナキヲ確認スト雖ハ余ガ所見ニ依レバ未タ必スシモ其事廟決シタルニハ非ルベシ

余ガ確信スル所ノモノヲ重テテ爰ニ一言セントス請フ閣下之ヲ許セソハ日本ノ諸友ト共ニ余ガ明知セルモノニシテ即チ「パークス」ガ歸ルト否ラザルトト決スルハ一ニ東京ニアル日本政府ノ廟議如何ニ是レ由ルコト是レナリ去レバ「パークス」ハ日本 天皇陛下ニ抗抵スルトノ一語ヲ外務省ヨリ斷

言スルアラバ以テ其進退ヲ一決スベシ而シテ其果シテ然ルヤ否ヤハ鎮臺
「ヘンネッシー」閣下ガ盡ク干涉スル所ナリ

然ルニ海外ノ日本黨即チ歐洲ノ日本賛成者ノミ日本ノ爲メニ哀訴スルル
ハ英國政府ハ左ノ如ク辯解スルヤモ量リ難キハ平素ニ恐ル、所ナリ

果シテ「パークスト」申ス人ハ夫レ程迄ニ惡人ナラバ我政府ガ日本政府ヨ
リ未タ曾テ同人ニ反對スルノ言ヲ一モ聞カザルハ抑何故ソヤ

日。本。政。府。ニシテ毫モ我政府ニ哀訴スル所ナキ以上ハ何等ノ事故アリテ
以テ同人ヲ轉免シ得ベキゾヤト

閣下ハ一目以テ以上ノ言ノ適當ナルヲ明知セラル、ナルベシ去ラバトテ
今日本ノ全權公使ニ右ノ事ヲ談判センコトヲ説服シ難キモノ、如シ現ニ森
君ノ如キハ鎮臺閣下ガ「パークスト」ヲ退クルノ一策ヲ論セラレシハ同氏ハ鎮
臺ノ意見ニ同意スルヲ固ク拒絶セリ。

鎮臺ヨリ閣下へ宜敷傳言アリタリ又彼ノ日本ニ廻漕スベキ象ノ廻漕方少

々遷延ニ流レタレモ目下專ハラ其最中ニ付キ必ス遠カラス日本ニ到着ス
ヘシ

「ピットマン」氏ヨリモ宜敷傳言アリタリ同氏ハ來三月中旬頃躬ツカラ閣下
ヲ訪ハル、ベシ同氏ハ余ト同船ニテ三月七日出帆ノ三菱汽船ニテ日本へ
歸航スル積リナリ依テ同十六日頃横濱着船ノ筈謹言

千八百八十年

二月十九日

在香港

イ・エツチ・ハウス

大隈重信殿

閣下

七七九 岩倉具視書翰「大隈重信宛」明治十三年二月廿六日

今朝來臨忝存候分離一件井上ハ申入候
通り安心也跡人撰頗ル困難さめに瓦解も不可知

形行明朝御評議も一大事難者と存候就るハ明朝八時參集之事故六時來車
の小生を參上る何レニ亦も御決答願候也

二 廿六

具 視

大 隈 殿

實ニ此際一言之上ニも萬ノ關係ヲ生シ候次第此上ハあらぬ堪忍ニ亦
も跡盡力御依頼申候事ニ候以上

【備考】 是年二月二十八日參議と諸省卿を分離し尋いで太政官中に法制會計
軍事内務司法外務の六部を置く而して重信は軍事と外務の主任とな
れり、

七八〇 ハウス書翰「大隈重信宛」 明治十三年二月廿四日

余カ此地ニ滞在スルハ來三月六日迄ナルガ故ニ今爰ニ一書ヲ送呈シテ以
テ當殖民地ニ關スル件ニシテ而モ閣下ニ利害スル所ノモノヲ報道スルハ

余ノ過誤ニアラザルベシ

彼新聞一件ノ目論見ハ舉テ悉ク閣下ノ權内ニアリ鎮臺ヘンテツシ一ノ應
援アラシテ閣下ノ願望スル所一トシテ容易ニ舉行セラレサルモノナシ
爰ニ於テカ余信シテ保證ス凡ソ右ノ一件ニ付テハ前路ニ遮テ以テ閣下ノ
所望ヲ妨碍スルモノ寸毫分厘モ之レ勿ランコトヲ

圓銀ノ事ニ付香港商法會議所ニテ開會セシ顛末ハ已ニ電報ヲ以テ承知セ
ラレタルナラン蓋シ其發論中僅カノ言語ハ欣喜満足スルニ餘リアリ鎮臺
ニ於テモ今般ノ決議ヲ滿悅セラル然ル所以ハ實ニ今般ノ決議ハ以テ其舉
ヲ促シ其事ヲ便ニスルノ益アレバナリ

然ルニ當商法會議所ノ衆議ハ圓銀ヲ可決スル右ノ如クナラスシテ苟モ其
反對ニ出テタランニハ蓋シ鎮臺ハ左迄深ク干涉セラレサリシナルベシ其
然ル所以ノモノハ他ナシ鎮臺ハ假令ヒ如何ナル事情アルモ必ス本國政府
ノ許諾ヲ得ルヲ期スレバナリ

鎮臺ハ今方サニ今般ノ會議ノ顛末ヲ電報ニテ英國へ急報セントス左レバ其報ノ彼地ニ達スルヤ即坐ニ圓銀ヲ香港ニ合法貨幣タラシムルノ許可ヲ得ルハ恐クハ大丈夫ナルベシ尤モ其必定ナルヤ否ヤハ許可ヲ得ザルノ今日ニ豫期スベカラザルハ論ヲ埃タスト

儲テ當商法會議所ノ衆議ハ「ヂヤクソン」氏ノ發論ニ依リテ我方ニ可決スル所トナリタリ抑モ「ヂヤクソン」氏ハ香港上海銀行ノ支配人ナリ同氏ガ圓銀ノ應援者トナリテ以テ痛論切議至ラザルナキハ別紙中余ガ印ヲ付シタル同氏ノ發論ニ就テ一覽セラル、ガ如シ然レモ余察スルニ同氏ノ論スル所一ノ誤アルヲ覺ヘタリ(即チ別紙? 印ノ廉是レナリ)蓋シ余ガ考察スル所ニ由レバ同氏ガ論及セシ所ノモノハ曾テ德川政府ノ爲セシコニシテ維新政府ノ舉ニ出テタルニ非ス

儲テ又別紙ニ就テ以テ圓銀反對論者ノ巨魁ガ暗ニ「ピットマン」氏ノ事ニ論及セシヲ承知セラルベシ(即チP印ノ廉是レナリ)實ニ「ピットマン」氏ハ周旋

盡力至ラザルナク大ニ爲ス所アリタルハ實ニ然リ然リト雖モ同氏ハ決シテ反對論者ガ云々スル如キ建白書ヲ草セシニアラス又自身ハ勿論其他ノ人ヲモ連結センコト等ヲ求メタルノ舉動毫モ之レナシ同氏ハ實ニ支那人社會ニ威望アリテ其名社會ニ高シ

圓銀ノ反對論者タリシ「チルソン」ハ有^{チヤイタルドネルカニタイルバンク}理銀行ノ支配人ニシテ平素日本ヲ敵視スル者ナリ然レモ如何セン今般ノ議事ニ際シ此反對論者タル「チルソン」ヲ賛成セシ者ハ僅ニ一人ノ「シャープ」アリタルノミ然ルニ「シャープ」ト雖モ議事ノ終ル迄「チルソン」ヲ賛成セスシテ中途ニ其說ヲ變セリ左レバコソ議事方サニ決セントスルニ臨ミ衆員ヲシテ起立セシメタルニ圓銀ヲ合法貨幣タラシムルノ議ニ反對セシ者ハ唯一人ノ「チルソン」アリタルノミ

凡ソ今般ノ會議ニ關スル議事ノ詳細ハ閣下ニ取り實ニ有用ナルカ否ヤハ余未タ之ヲ知ラス若シ閣下ノ有用トセラル、アラバ之ヲ回送スルニ於テ毫モ故障等ナシ且又諸新聞紙上ニ掲載シアルヨリモ猶ホ細ニ物事ノ景況

如何ナリシヤヲ知ラント欲セラル、アラバ何時ニテモ貴望ニ應スベシ謹言

千八百八十年二月二十四日

在香港

イ・エツチ・ハウス

大隈重信殿 閣下

追啓

新任大檢事^{オ・マレイ}氏ノ香港ニ來着スルアリテ鎮臺^{ヘンチツシ}閣下ハ其位置其政略上ニ深クカヲ添フルノ色アルヲ覺フ何トナレバ^{オ・マレイ}氏ハ徹頭徹尾鎮臺閣下ト同心協力シ充分力ヲ盡クシテ鎮臺ニ應援スルアレバナリ^{オ・マレイ}氏ハ以前^{ヂヤマイカ}島ニ大檢事タリシ人ナリ

鎮臺ハ^{オ・マレイ}氏ノ外亦支那人某^{ナグチヨイ}氏立法官ノ一員トナリ

テ以テ協力スルアルニ依リ他日ニ多少好結果ヲ成サンコトヲ期ス定メテ閣下記臆セラル、ナルベシ同氏ハ曾テ歐洲ニ於テ教育ヲ受ケタル支那ノ法學士ナリ尤モ現任ハ唯立法官中ノ欠員ヲ補ハンガ爲メニ出テタルノミナレ^レ鎮臺ハ同氏ヲシテ立法官ノ常備外員トナサンガ爲メニ已ニ夫々ノ取計ヲナシタリ

凡ソ此等ノ諸事アルガ爲メニ香港ノ民ヲシテ鎮臺閣下ニ對シ失敬暴言至ラサルナカラシム然レ^レ鎮臺ハ堅ク公道正義ヲ執リテ動カス左レバ如何ニ衆口嗷々罵詈スルモ之レガ爲メニ毫モ屈撓スルコト等勿ルベシ

【別紙】

日本圓銀貨ノ事

マクイウエン氏曰ク

余敢テ一言セント欲スル者ハ他ナシ即チ當議會ニ於テ曾テ我カ殖

大隈重信關係文書第四 (明治十三年二月)

六十七

民地中日本圓銀貨ヲ以テ法律上ノ通用貨幣トナサハ必ス有益ナラ
ンヲ評議セシマリアリヤ否ヲ質セント欲スル是ナリ近來當港ト日
本國トノ交商ハ甚タ廣大ニ赴キ今後尙ホ益ス其隆盛ヲ加エント欲
スルノ兆アリ頃日聞ク處ニ依レハ過般或ル支那人ヨリ我カ鎮臺閣
下ニ到テ右事件ニ關シ建白セシ者アリタル由幸ニ支那銀行社員ノ
當席ニ臨マル、者アルカ故ニ定メテ同氏ヨリ發言サル、處アラン
ヲ期望ス

議長曰ク

余カ識ル處ニ依レハ曾テ當議會ニ於テ右議問ニ付評議セシマナシ
然レモ今回此議ヲ起ス者アルニ於テハ必ス當議會ノ面々喜ンテ此
ヲ討論スヘシト信ス尤モ唯今マクイウエン氏カ云ハレタル如ク若
シ支那銀行代議者ヨリ此ニ就テ辯解サル、處ナレハ之ニ優タルヲ
ナカルヘシ

子ルソン氏曰ク

未タ右事件ニ關シ我カ政府ヨリ何等ノ沙汰モ無キカ故ニ今當會ニ
於テ之ヲ評議スルハ甚タ不當ナルト思ハル近頃余或ル支那人ニ
就テ聞キ知ル所ニ依レハ彼ノ建白書ハ或ル殖民間ニ名ノ高キ一紳
士ノ筆頭ニ係タル者ノ由ナリ而シテ彼ノ人ハ職ヲ日本政府ニ奉シ又
當殖民地ニ於テハ彼ノ阿片商社及ヒ餘他ノ商事ニモ多少關係ヲ有
シ殊ニ我鎮臺閣下トハ親昵ナル交誼アリト云エリ(黑點アルトコロ)元
來此マテ當殖民間ニ於テ之ニ類セル種々ノ事件ニ關シ各々之ヲ處
置シタル手續キモアレハ又宜シク之ニ倣フヘク尤モ當件ノ如キハ
早晚就テ爲ス處アルヘキ事柄ナレモ未タ我カ政府ヨリ沙汰ナキ前
ニ走ツテ之ニ赴キ既ニ我カ政府ニ於テ之カ處置ニ着手シタリト心
得ルハ實ニ過キタリト云フヘキナリ故ニ今我カ書記官足下ヨリ政
府ニ伺ヒ既ニ我カ政府之ニ就テ爲タルヲアリア否ヲ尋問スルコソ

余輩カ目前至當ノ所業トナスヘキナリ

ライリー氏曰ク

今回ノ議案ハ決シテ新題ト稱ス可ラス既ニ反覆之ヲ論究シタルヲアリ

チルソン氏曰ク

否ナ右ハ彼ノ貿易銀ニシテ當件ノ圓銀ニ非サリキ

ライリー氏曰ク

否ナ當會議ニ於テ曾テ縷々之カ評議ヲ遂タルヲアリ而シテ當時之ニ反對スル論者ノ多カリキ所以ハ概テ未タ當議會ニ於テ確カト日本政府カ後來必ス右銀貨ノ本位ヲ違ハスヲナカルヘキヲ保スルヲ能ハサルノ一事ナリキ蓋シ此一事ハ右銀貨ヲ拒ム者ノ齊シク憂フル處ナリタルヘシ然ルニ余曾テ能ク右貨幣ノ事ニ適シタル諸氏ニ聞キ又近頃マテ彼國造幣司長タリシメイジョ・キンタル氏ニ就テ知

タル處ニ依レハ今日ニ至テハ日本政府ハ今後決シテ右貨幣本位ヲ貶ケサルヲ保スルニ足ルヘキ充分ノ證左ヲ世ニ示シタリト斷言シ得ヘシ既ニ余カ今日當議會ニ臨ムノ初ヨリ必ス議論ノ此點ニ及フヘキヲ期シタリ而シテ案ニ相違ナク過刻マクイウエン氏カ起テ當件ニ係ル議案ヲ提起サレタルヲ見ルニ及テ大ニ喜フ處アリキ實ニ今回ノ會議ニ於テ右件ヲ評議スルハ至當ノ事ニシテ既ニ當議會ニ於テ曾テ之ヲ議シタルヲアレハ今再ヒ之ヲ論スルニ當テハ決シテ政府ノ指令ヲ俟ツヘキノ要ナシ定メテ政府ニ於テモ其固有ノ意見アルヘシ然レモ余ハ之ヲ知ラス唯政府ニ關涉スル所ナキ諸人ノ意見ニ就テ之ヲ論セント欲スルノミナリ今日實際福州廣東新嘉坡及ヒペイナン(卑南歟)ノ諸地方ニ於テ人々右貨幣ヲ受取ルヲ嫌ハサルノ確信ヲ得ルニ際シテハ是レ眞ニ彼ノ議案ヲ再發スルノ好時節ト謂フヘキナリ且ツ今日ニ至テ之ヲ議スヲアレハ必ス評議ノ

決着スル處大ニ曾テ其アリシ處ニ相違スル者多カラント信セラル
議長曰ク

唯今論者ノ語中福州廣東等ノ地方ニ於テ人々右貨幣ヲ受取ル云々
ノ數句アリキ右ハ以上諸地方ニ於テハ右圓貨ヲ以テ諸上納ニ充テ
差碍リナシトノ義ナルカ又ハ商人間自由ニ之ヲ遣リ取リスルノ意
ナルカ將タ金額高ニ制限ヲ置キ右制限以下ハ右貨幣ヲ自由ニ通用
スルトノ旨ナルカ三者皆ナ其趣ヲ異ニスルカ故ニ余之ヲ質スルハ
殊ニ肝要ナルトト思ハル

ライリー氏答テ曰ク

右報告ハ福州ノ余カ商社ヨリ其實驗ニ基テ之ヲ申送シタル者ニ非
ルカ故ニ委細ハ之ヲ知リ難シ唯報申書面ニハ曩キニ余カ陳述シタ
ル如キノ語字アルノミナリキ故ニ余カ之ニ就テ謂ヒ能フ處ハ之ニ
過クルヲ得ス其正否細密ヲ探尋スルコソ當議案評議ニ取掛タル后

ノ第一急務ナルヘシト思ハル

ビイコン氏曰ク

余ハ實際廣東ニ於テ通用上右銀幣ノ拒マル、コナキヲ知レリ

アーノルド氏曰ク

尤モ右貨幣ノ諸港ニ於テ既ニ通用ノ實跡アルヤ否ヲ糺タスハ實ニ
肝要ナルコナリ且ツ諸港居留者ノ中ヨリ既ニ我カ政府ニ照會シタ
ル條々モアリシ様ニ聞キ及ヒタル上ハ實際其運ヒ得タル處及ヒ其
該貨幣本位ノ後來變更セサルヘキヲ信スルニ足ルヘキ憑據ノ有無
ヲ探知スルハ殊ニ望マシキコナリ

ジヤクソン氏曰ク

余敢テライリー氏カ疑問ニ答フルヲ得ヘシ即チ廈門及ヒ福州ニ於
テハ彼銀圓貨ニ待^(對)スル餘地何等ノ貨幣ヨリモ之ヲ重ンシ何時ニテ
モ何程ナリトモ人々之ヲ受取ルコトヲ拒ムノ色ナシ是レ即チ余輩カ

昨數週間ニ實見セシ處ニシテ曾テ余輩ヨリ該地方へ差送タル銀圓
貨ハ悉皆之ヲ拂ヒ捌キタリ且ツ英領ストレート、セツトルメント(海峽
在殖民
地ノ意)ニ於テモ亦之ヲ遣リ取リスル由ナリ加フルニ十日計リ以前
彼ノ香港上海銀行ヨリ得タル處ノ電報ニ據レハ右地方ニ於テモ支
那人彼ノ墨西哥弗貨ヨリモ寧ロ日本銀貨ヲ喜ブト甚シク然ルニ唯
今ノ處ニテハ右地方ニ於テ法律上ノ通貨ト爲ス者ハ皆ナ悉ク彼ノ
墨西哥弗貨ナリト云エリ依是觀之レハ開港諸地方ニ於テ大ニ該貨
ヲ甘受スルノ情瞭然タリ故ニ若シ香港ニ於テ右貨幣ニ附スルニ通
用貨幣ノ効力ヲ以テスルハ居留者ノ之ヲ喜フヘキト又明カナリ
過刻マクイウエン氏ハ日本國トノ通商ハ近來其盛大ヲ加エタルト
往日ノ如キニ非ルトヲ述ラレタリ余モ亦之ニ同シ向後尙ホ益ス隆
盛ニ赴クノ兆アルヲ知レリ既ニ彼ノ三菱汽船會社ノ如キモ直チニ
大阪造幣局ト接路ヲ開キ實際盛シニ其間ニ往復セリ故ニ今若シ當

殖民地地方ニ於テ右銀貨ニ附スルニ通用貨幣タルノ効力ヲ以テセハ
必ス交商ノ便路ニ於テ爲ス處多カルヘシト信ス譬エハ商賈ノ如キ
日本國ニ於テ其正貨ヲ要セサルノ際之ヲ爲替切手ニテ當地ニ送ラ
ント欲スルニハ當地地方在ノ銀行ニ於テ右切手上ノ銀貨額ハ必ス實
地通用ノ者タルヲ知ルニ非レハ能ハス如斯ク若シ該貨ニ許スニ一
般通用ノ効力ヲ以テセハ之ノミニテモ其商業ヲ補佐スルノ大ナル
ヲ知リ得ヘシ之ニ依テ余ハ該疑問ヲ目シテ眞ニ肝要貴重ナリト斷
言スルナリ今一方ニ於テ彼ノ貨幣本位ハ眞ニ永久恃ムニ足ル可キヤ
否ノ點ニ付テハ既往ノ事ハ暫ク之ヲ措キ余ハ必ス其倚憑スヘキヲ
信シテ更ニ疑フ處ナシト斷言シ得ヘシ即チ日本國ハ天下第一等ニ
位セル造幣局ヲ有シ絶エス其分析表ヲ以テ加爾哥太及ヒ桑港ノ造
幣局ニ郵送セリ且ツ自國利益ノ係ル處ヨリ必ス永久其本位ヲ違ハ
ストナキノ理由アリ其故ハ日本政府ハ畢竟右貨幣ヲハ其疆内ヲ出

テ通貨ト爲サンコヲ冀望スル者ナレハナリ若シ日本銀貨ニ於テ其本位ヲ貶サ、ルヲ保スルノ證據ナシトセハ果シテ彼ノ墨西哥弗貨ニ於テモ斯ル證據ト爲スヘキ者アリト爲ス哉蓋シ天下之ナシト信セラルル尤モ自ラ貨幣製造ノ事ヲ執ル者ニ就テ之ヲ聞キタルコトナシト雖モ全體貨幣鑄造ナル者ハ實ニ有益ナル製作所業ナリ又貨幣ハ常ニ爲替相場ヲ有スル者ナリ而シテ其有益ナル所以其相場ヲ立テ能フ所以ノ者ハ他ナシ唯其變更セサル本位ヲ存有スレハナリ今此點ニ付テ敢テ日本政府ヲ嫌疑スルハ其實彼國ヲ輕蔑スルノ甚シキニ當ルヘシ蓋シ日本ノ如キハ一旦其名譽ヲ質トシテ他國ニ接スルニ當リ能ク廉恥ヲ知ルハ決シテ他國ニ讓ラサルノ國ナリト信ス然レ人或ハ彼國ニ於テ曾テ其通貨ノ本位ヲ貶トシタルコトアリ故ニ今後復々其前轍ヲ蹈ムコトナキヲ保シ難シト云フ者アラシク然リト雖事情夫レ同シカラス如何トナレハ曾テ其本位ヲ貶シタル貨幣ハ是レ

日本國ノ舊貨幣ニシテ今日ノ圓銀ニ非ス故ニ又之ヲシテ其國疆ヲ離レテ通用セシムルノ意ナカリシナリ且ツ當時未タ其政府ト雖曾テ頓整シタル體裁ヲ備エサリシナリ之ニ反シ彼ノ圓銀ニ際シテハ日本政府固ヨリ之ヲ以テ支那及ヒ海峽邊ノ通貨ト爲サンコトヲ企ル者ナリ(黒點アルトコロ)以上述フル處ノ數條理アルカ故ニ余ハ偏ニ彼ノ圓銀ヲ以テ當殖民地ノ通用貨ト爲サンコトヲ欲シ且ツ此度當議會ニ於テ之カタメ爲ス處アラシク冀望セリ(衆皆ナ贊稱ノ聲ヲ發シタリ)

ライレー氏曰ク

余別ニ一言セント欲スル者アリ即チ余ハ我カ殖民地中通用ノタメ別種弗貨ノ製鑄ヲ創ンコトヲ欲スト雖モ此事到底行フ可カラサルヲ以テ余ハ單ニ彼ノ圓銀ヲ採用センコトヲ欲スルナリ而シテ唯今幸ニジヤクソン氏カ説カル、ヲ聞キタル上ハ猶更ラ此念ヲ禁スル能ハサ

ルナリ

子ルソン氏曰ク

右ニ付テハ種々云フ可キ事ナク就中ク厦門ノ一事ニ關シテハ余ハ曾テ聞ク所ニ依レハ彼ノ地方ニ於テハ圓銀ハ他ノ貨幣ト混シテノミ之ヲ通用スト云エリ

ジャクソン氏曰ク

今日ニ至テハ然ラス

子ルソン氏曰ク

目下余輩カ大肝要ト爲スヘキ所ハ即チ日本國ハ其既往ニ於ケル又其今日ノ景勢及ヒ利益上ニ於ケル彌ヨ眞ニ支那ノ爲メニ其貨幣ヲ鑄造スヘキノ國ト見做スヘキヤ否ノ疑問ヲ決定スル是ナリ蓋シ之ヲ決センニハ到底皆ナ想像上ノ説ニ據ルヘキヲ免レス而シテ余カ説ニ依レハ決シテ日本國ハ如斯ク見做ス可ラサル者トス且ツ夫レ日

支間ノ貨幣相場ヲ平均センカ爲メ斯ル無益ナル事件ニ固着スルハ大ニ當會議ニ於テ其趣意ヲ謬ル者ト信セラル

議長曰ク

余敢テ當件ニ關シ一言セント欲スル者アリ即チ他ナシ唯余カ知ル處ニ依レハ日本國ハ必ス其銀貨鑄造ノ事ヲ永久ニ保存スヘキノ見込アルト是ナリ蓋シ彼ノ國ニ於テ若シ該貨幣ヲ鑄造シ之ヲ流通スルニ於テ聊カ利益スル處ナカリセハ決シテ斯ル無益ノトヲ爲スヘキノ理ナシ故ニ今若シ日本國ニ於テ如斯キ貨幣ヲ鑄造シ之ニ印刻シ之ヲ發行シ以テ利益ヲ得ヘキ丈ケノ銀ヲ產出スルヲ得ヘシトセハ必ス今後其本位ヲ變スルトナキヲ保スルカタメ何ヨリノ確證トナス可キナリ而シテ此事既ニジャクソン氏能ク之ヲ辯解サレタリ然レモ今一方ニ於テ日本國ハ到底永久其銀貨ヲ鑄造シテ以テ利益ヲ得ヘキ丈ケノ銀ヲ自國ニテ產出スルト能ハサルノ位置ニ居ルノ評

論アリキ尤モ如斯クシテ彌ヨ日本ニ於テ其銀ヲ他國ニ仰カサルヲ得サルノ場合ニ立到ラハ余モ亦其本位ニ變更ナキヲ保スル能ハスト雖是等ハ皆ナ當殖民地地方ニ於テ該貨幣ノ採用スヘキヤ否ノ疑問ヲ決スルニ際シ毫モ關係スル處ナキ者ナリ如何トナレハ其畢竟如何ヲ問ハス其右貨幣ヲ鑄造シ能ハン限リハ必ス日本國ノタメニ利益アルヘク又我カ地方ノタメ便益アルヘシ故ニ余ハ嘗ニ後來竟ニ其鑄造上ノ利潤ヲ失フニ至ルヘキノミノ憂アルカタメ必スシモ其本位上ニ變更アルヘシノ説ヲ容レ難キナリ

オノレイブル・ピライリー氏曰ク

日本造幣局ノ出入相償フト償ハサルトニ付テハ日本大藏省造幣局ニ職ヲ奉セシ一紳士ノ曾テ余ニ報道セシヲアリ今其要ヲ摘ンテ云ハ、日本ニハ莊麗華美ノ一造幣局アリ加フルニ其勤務ノ屬員能ク其任ニ適スルヲ以テ或ハ損失ナキアタハスト雖モ日本ノ造幣局ハ

果シテ損失スルニ相違ナキカ否ハ余未タ之ヲ知ラスト雖モ今暫ラク議長ノ言ヲ假リテ云爾ス(即チ日本造幣局ノ鑄造スル所ノ貨幣ハ獨リ圓銀ニ限リテ其他ノ貨幣ヲハ鑄造セサルモノト假定スルモハ成程圓銀ヲ製スルニ於テ損失ヲ招クアルヘシト雖モ其造幣局ハ補助銀貨幣ト銅貨トヲ鑄造スルカ故ニ其益ヲ以テ其損ヲ償ヒ得ルモノナリ然ルカ故ニ日本ノ造幣局ニ於テハ補助銀貨ナリ銅貨ナリ此等ノ者ヲ製セサルノ造幣局ヨリモ遙カ恰好ニ圓銀ヲ鑄造シ得ルモノナリト

アルンホルド氏曰ク

運賃ニ太シキ差違アルヲ視サルハ余カ實ニ愕然スル所ナリ請フ其然ル所以ヲ爰ニ陳セン日本人カ銀ヲ米國ヨリ輸入スルノ運賃ハ吾人カ我洋銀ヲ輸入スルノ運賃ヨリモ低廉ナラサルニアラスヤサレハ^{メキシコドル}ケスウエツク^氏議長ノ起案ハ頗フル重大ノ事ナルヘシト

議長曰ク

余カ論セシハ異論ヲ唱フルカ爲メニアラス唯其様ノコモ他日ニ起ルナルヘシト云ヒシ迄而已依テ余ハ余カ論ヲ以テ至當ト察ス然シ不當ナルヤモ或ハ量リ難シ夫レ然リ然リト雖凡其事ハ余ヲシテ今圓銀ヲ當殖民地ニ合法貨タラシムルノ前路ニ妨碍ヲ投スルヲ欲セシメス余察スルニ蓋シ圓銀ヲ合法貨タラシムルノ舉ハ吾人社會ニ取リ便益ノコナルヘシト

ヂヤクソン氏曰ク

願フニ余モ其事ニ論及シ少シク其如何ヲ明ニスルヲ得ヘシ抑モ日本開港以來未タ僅カニ數年ヲ經過セシ而已而シテ其未タ開港セザリシ以前ニハ一粒ノ銀塊モ其國ニ輸入セシコナキハ吾人カ皆能ク明知スル所ナリ

然ラハ如何ナル譯合アリテカ是レ迄十又二ケ年ノ間ニ壹億弗ノ價

アル銀貨幣ヲ日本ヨリ輸出セシコアラシヤ況ンヤ其舊貨幣ノ中ニハ百年以前餘ノ製造ニ係ルモノモアルニ於テオヤ

余願フニ日本ノ造幣局ハ其全局ヨリ論スレハ頗フル利得ヲ占ムルモノナリ故ニ若シ其圓銀ヲ當地ノ合法貨幣トナシタランニハ其造幣局ハ尙ホ一層然ルナラント

子ルソン氏曰ク

成程日本ニ於テハ銀ノ供給ヲ仰キタルコナシサレハ「ヂヤクソン」氏ノ論セシ金額ハ即チ日本ニテ數百年間ニ蓄積セシモノナリト

ヂヤクソン氏曰ク

余爰ニ當商法會議所ハ日本圓銀ヲ當殖民地ニ合法貨幣タラシムヘキノ處置アラシコヲ我政府ニ建議センコヲ願フ

余願フニ蓋シ此事ハ香港ノ最上得策ナルヘシト

マクイウエン氏曰ク

余ハ「ヂャクソン」氏ノ發議ヲ賛成スト

子ルソン氏曰ク

余ハ左ノ如ク修正アラントヲ望ムト

當商法會議所ニ於テハ抑モ今般日本ノ圓銀ヲ當殖民地ニ合法貨幣
タラシメントテ我政府ハ如何ナル處置ニ出タルカヲ明ニシ併セテ
目下ノ圓銀ヲ本位トシ他日變更等ノ舉ナカラシカ爲メ日本政府ヨ
リ如何ナル保證ヲナスヘキカヲ知ラント是レナリ

余察スルニ當商法會議所カ今右ノ議ヲ賛成スルノ前ニ當リテ先ツ
日本政府カ他日其圓銀ヲ變更増減等セサルコトヲ充分ニ認メ然ル上
ニテ賛成ノ舉ニ出テサルヘカラス是レ余カ日本ノ貨幣ニ關シテ而
已獨リ云フニアラスシテ何國ノ貨幣ニ於ケルモ必ラス斯クナクン
ハアルヘカラスト爲スナリト

シヤープ氏曰ク

熟察スルニ今若シ當商法會議所ニ於テ日本ノ圓銀ヲ當殖民地ニ合
法貨幣タラシメ得ヘシト思考スルアラハ其圓銀ノ我殖民地ニ來ル
ヲ欣喜雀躍セサルノ社員ハ一人モアラサルヘシ抑モ此事タル已ニ
以前充分ノ討議ヲ盡クシ其際議長ノ論「ライリー」氏ノ說等皆筆記シ
テ以テ記錄ニ存セリ當時ニ於テハ(今ヨリ大約二三年前)未タ圓銀
ノ性合必ラス連綿トシテ純粹ニ止マルヲ保證スルモノナカリシカ
目下ニ至リテハ日本政府ハ太タ好シテ以テ當商法會議所ニ銀行者
ニ香港ノ全社會ニ充分ノ證據ヲ與ヒテ以テ嚮キニ當商法會議所カ
此舉ニ付テ懷キタル疑團ヲ氷解スルニ足ルヘシサレハ今急遽圓銀
ヲ迎待シ夫レニ依頼スルノ舉ヲ第二着ニ止メ先ツ以テ日本政府ハ
其圓銀ノ正質ヲ目下ノ如ク連續スルノ廟決ト力量トニ付テ當香港
殖民地ノ銀行者并ニ商買輩ヲ満足セシムルニ足ル丈ケノ保證ヲ與
フルコトヲ好ムカ又與フルニ足ルノ力アルカヲ明知セント欲スルコ

ソ相當穩便ノ便法ナルヘシ是レ予カ「チルソン」氏ト共ニ斯ク考察スル所ナリ余切ニ望ム動議者モ此舉ニ不同意ナルヲ主張スル勿ランヲ抑モ余カ斯克切望スル所以ハ當商法會議所ノ社員諸君ハ皆圓銀ヲ入ル、ノ説ニハ同意ナリト信スレハナリ

凡ソ日本政府ハ萬般ノ所欲ニ應シ且ツ萬般ノ事ニ於テ西國ノ文明ト併行セント欲スルノ熱心アルカ故ニ日本政府ハ「チルソン」氏カ發言セシ主旨ニ付當商法會議所ヲ満足スルニ足ルヘシト余ハ考察スルナリト

「ヂヤクソン」氏曰ク

余ハ修正論ニ付一言ヲ述サルヘカラス余ハ「シヤープ」氏ノ論ト同意スル能ハス余ハ今「シヤープ」氏ノ論セシ如キ事ヲ以テ日本政府ニ強迫スルヲ好ムヘキコト思ハス蓋シ此般ノ舉ハ日本政府ヘ對シ殆ト無禮ニ涉ルコト察ス現ニ日本政府ハ其力ノ應スル最上良善ノ保

證ヲ吾人ニ付與スルニアラスヤ看ヨ日本政府ハ毎年又ハ每半年ニ米國「サンフランシスコ」ノ造幣局英領「カルカッタ」ノ造幣局ニ其鑄造貨幣若干ヲ送リテ以テ其兩造幣局ノ試験分析ヲ請フヲサレハ今「シヤープ」氏所論ノ如キ問題ヲ日本政府ニ差出スモ政府ハ之ニ應セサルヘシト余ハ思考ス其譯ハ若シ斯ル問ヲ掛ケタラハ日本政府ハ斯ク云ハン「抑モ足下等ハ如何ナル意義ヲ含ミテ斯クハ暴言ヲ吐露スルソ足下等ハ我政府ヲ蔑視スルモノナリト」余察スルニ現狀ヲ以テ吾人ハ最上ノ保證ヲ共有スルモノナリト

「チルソン」氏曰ク

日本政府ハ其貨幣ヲ當殖民地ニ合法貨タラシメント欲スルヤ明亮ナリ然ルニ吾人ハ左迄格別ニ之ヲ欲スルニアラスサテ日本政府ハ獨リ當殖民地ナラス猶ホ其他ノ英領殖民地ニモ亦其貨幣ノ合法貨トセラル、アラソクヲ欲セリ

右ノ點ヨリ視レハ其圓銀ヲ當地ニ合法貨タラシムルノ前先ツ以テ
日本政府ハ如何ナル保證ヲ立テ、其貨幣ヲ他日ノ久シキニ連續ス
ルヤ又日本政府ハ果シテ正道公義ヲ履行スルヤヲ明知シ苟モ利害
ノ關スル者ヲシテ能ク其如何ヲ測量セシムルモ日本政府ヘ對シ毫
モ敬禮ヲ失スルコ勿ルヘシト余ハ推考ス

余願フニ日本ノ如キ一邦國ヨリ其鑄造ノ一貨ヲ英領殖民地ニ合法
貨タラシムルニ付テハ右ノ修正案ノ如キ事ヲ日本政府ニ照會スル
モ毫モ不敬ニ流レ蔑視スルコ等ナシト

マクイウエン氏曰ク

假令ヒ其造幣局ハ日本ノ造幣局ナリト雖モ其鑄造事業ハ高位ナル
歐人ノ從事スル所ナリ足下ノ如キハ其事ヲ知ルヤ否ヤハ余未タ承
知セス抑モ余ハ日本政府ニ不信ヲ懷クニ依リテ斯クハ申スニハア
ラス余ハ唯事ノ實狀ヲ申ス迄ナリト

子ルソン氏曰ク

足下ハ斯ク申セモ日本政府ガ歐人ヲ僱使スルノ舉タル其諸官府中
何レノ場所ニ於テモ毎月連綿トシテ然ルニアラス既往數ヶ月ノ經
驗以テ能ク其虛ナラサルヲ證スルニ足ルト推考スト

議長曰ク

「シャープ氏ヨ足下ハ修正案ヲ賛成セシヤ否ヤト

シャープ氏曰ク

余ハデヤクソン氏カ其動議ヲ取消シアランコヲ望ムト

「デヤクソン氏ハ斷然取消ヲナスヲ拒ミタリ爰ニ於テカ「シャープ氏ハ
修正案ニ賛成セリ

ウエルリヤムソン氏曰ク

假令ヒ原案ニセヨ修正案ニセヨ兎ニ角之ヲ政府ノ議ニ付シ其議事
ノ報道ヲ當商法會議ニ得テ然ル後ニ決スヘシト

子ルソン氏曰ク

然リト雖 凡當會ノ議決スル所ハ圓銀ヲ合法貨タラシメンコトヲ直チニ政府ニ建議セント欲スルニアリト
ウエルリヤムソン氏曰ク

是レ大ニ當ヲ得スト

オノレイブル・ビライリー氏曰ク

今度政府へ呈スル建白書中ニハ此舉ニ付香港政府ト日本政府ト照會往復セシコトハ連署人ノ既ニ知了セシコトヲ加へ且ツ政府ニ於テハ名代人タル商法會議所ヨリ差出シタル處置ノ得策ナルヲ其心ニ充分満足アルヘキコトヲ望ム旨ヲモ載スヘシト

爰ニ於テ議長ハ修正案同意ノ者ニ起立ヲ命セシニ僅ニ其修正發議者ト賛成者ノ兩人起立セシ而已

爰ニ於テ原案ヲ可決スル所トナリタリ只一人ノ之ニ不同意者アリタ

ル而已

七八一 河緒齋書翰〔大隈重信宛〕 明治十三年二月廿九日

一書謹啓仕候時下益御清穆被遊御座奉欣頌候陳者今般御改革ニ付内閣御專任被爲蒙仰候趣今朝傳承仕御賢勞之御儀と恐慶至極奉存候數年來不容易御恩顧被成下候段海岳不啻奉存候猶此上とも不相替御愛顧被下置候様仕度伏る奉懇願候扱吉原大書記官昨夕當地出立之際別番委託ニ付奉呈仕候御落掌可被成下候沖繩縣貢糖一件ニ付而也
閣下御下坂之上御 指揮被爲下候趣奉畏居候處現品到達ニ付追々吉原子示談之趣も御座候ニ付得ト協議之上御命令書案其外取調出納局副長迄今便さし出候間可然御指揮被下置度伏る奉仰願候恐惶頓首謹白

二月廿九日

(大隈少書記官)
河 緒 齋

大隈公

閣下

二白時下折角御自重被爲在度爲國奉專禱候
 五代等連合之盡力ニル米價も漸次下落候段欣躍之至奉存候
 當地米商會所定款及申合規則とも改正之儀も五代等之盡力ニル本日
 府廳(大阪)ヨリ本省へ上申相成候間是又可然御指揮奉仰候
 當地各銀行共不相替金融必迫之趣ニ相聞隨而三井銀行ヨリて兼而御
 特許相成居候一時拜借之儀折々願出聞届候節ハ一々本局へ具申仕候
 間御了承被爲在候事と奉存候得共乍序上申仕置候頓首百拜

七八二 ロベルトソン書翰「天隈重信宛」 明治十三年三月二日

余只今鎮臺へンテツシ閣下ニ面晤セリ同氏ハ日本ノ近狀ヲ探知センコ
 ヲ熱望シ居ラレタリ該銀行創立一件乃チ正金銀行ノコニ涉リ余同氏ニ其

事ヲ語リシニ同氏ハ實ニ能ク其舉ヲ賛成シテ以テ力ノ及フ丈ケ應援セン
 コヲ約セラレタリ余願フニ同氏ハ一書ヲ送呈シテ以テ其思想ヲ直チニ閣
 下ニ吐露セララル、ヘシ
 切ニ冀クハ是レ迄通り我東洋銀行へ貴政府ノ御用向ヲ陸續命セララル、様
 閣下カ事ヲ處サレンコヲ猶ホ此議ニ付テハ英國着ノ上閣下ニ書ヲ寄スヘ
 シ

余察スルニ圓銀ハ不日當地ノ合法貨幣トナルヘシ余ハ陽ニハ之ヲ爲サレ
 ルニ微力ノ及丈ケ周旋盡力シテ以テ其事ノ舉行セラレンコヲ謀リテ止マス
 當地ニアル余カ友人輩モ亦皆然ラサルモノハ勿ルヘシサレハ急遽其舉ヲ
 促スナク只堅ク其舉ヲ保持シテ止マサルヘシ果シテ然ランニハ閣下ハ結
 局ニ於テ奏効スルノ日アルヘキナリ
 余カ聞知スル所ニ依レハ新嘉坡ニ於テ曾テ舉行セシ圓銀ノ通用ヲ今日ニ
 廢スルノ企アリト乃チ曾テ發行セシ圓銀通用ノ布告ヲ廢止スルヤノ意ナ

リ)余ハ其狀況ヲ探リテ以テ猶ホ同地ヨリ閣下ニ報道スル所アルヘシ謹言
千八百八十年三月二日

在香港

チヨン・ロベルトソン

大隈 公閣 下

七八三

佐野常民書翰

大隈重信宛 明治十三年三月十四日

謹呈今朝副島先生相尋候處甚深案致し候も今少し唯今之通ニ候得て拙之
所見ニハ必病疾發し可申模様ニ有之候間同氏洋行之儀神速ニ御運御運ひ
相成度右ハ全ク 聖慮ニ出テ不申候半ハ是迎も相行レ申間敷ニ付岩公
カ本田カ 聖旨ヲ奉シ眼病中ニ付同人宅ニ就テ先以 聖慮奉戴候様御運
ひ被下度就ハ今日明朝間ニも岩公ニ右之段御打合被下度相願候此義ハ
決シテ御遅延然間敷奉存候委曲明日拜晤之上可申上候得共一日も遅速ヲ

争ひ候迄存候間先以書中申上候草々敬具

三月十四日

常民

大隈 明 臺

七八四

福澤諭吉書翰

大隈重信宛 明治十三年三月十六日

昨夜小泉(小泉)ニ面會承候得て正金銀行も先ツ三百萬を以て業を營ミ追テ資本
之不足を訴るニ至テ徐々ニ増株ト御内決ニも相成候哉之趣小生之所見ハ
甚タ之ニ異なり唯今之處ニハ横濱神戸其外之開港場ニ於テ迎も三百萬
銀圓之入用あるをからずさば唯今ハ營業して當年ニも來年ニも資本不
足を訴るの日を期するは甚タ無覺束然りと雖とも一方より考せば日本人
民之資金を集メて金權之一大中心を造るハ實ニ止むべからざるの要なり
貿易之バランスを取るニも内國金利之割合を左右するニも金貨紙幣之鈞

合を付るにも皆唯金權ニ在る而已且金ト紙トの差あはばおそ銀圓之入用
少なきり如きを其今後バー之日あるるきハ論を俟たせ此日ニ至て三百
萬計り之資本ニおハ迎も目的を達するニ足らず少なきも壹千五百萬位ニ
おハし度其用意ハ正ニ今日ニ在る事ト存候依る愚案ニ

五月第三期之金を集めて後ニ直ニ増株を募る事蓋シ第三期を集むバ今
の株主ハ過半の金を出したる者ニお恰も質を取りたるり如きをして其
苦情を制する事易きをなり

又本年の配當金は必ず少なき事ならん目前之利少なきものハ愚俗を誘
導するニ難きの患あり故ニ其未タ配當せざる間ニ早々増株を募り度事
なり唯今なむバ正金銀行之名望を以て金を集ること易し

又五月より募るとすむバ大藏省ハ今之百萬之外ニ又加入するを良とせ
信を篤くすむなり例ハ資本を六百萬ニすむバ省ハ貳百萬九百萬ニ
すむバ三百萬等々凡三分一ハ官金を交へ度事

又右巨額之資本ハ差向其用なきり故ニ株金集り次第不用之金を以て金
札公債證書を買入結局薄利之極ハ株主共へ六朱之利子を授る而已政府
之爲を謀むハ其株金之札をバ焼捨て、可なり一舉兩得と云ふるし

又増株を募るニ其期を急ニする所以ハ今日まで都而諸銀行之評判甚々
おしき者なしと雖トも何れの銀行り一旦失敗する者あるときハ人民ハ
直ニ銀行之名を恐む其性質如何を問はずして之を忌ミ之を避るの勢ニ
至るるし斯る反動之時勢ニ及ては如何ニ正金銀行とても矢張同一視せ
らるゝの恐あむなり故ニ増株を募るは正ニ當年中ニ在る事ト存候

右ハ小泉にも篤ト談論同人も異論なきり如し何卒中村^(達本)を御呼寄せ早々其
支度ニ着手候様御説諭被成下度候都而大事を爲すハ其機あり老臺之御在
職中畢生之一大事業として斷して御施行相成度事ニ御座候以上拜趨御面
話致度候得共本月初旬ハ頭痛ニ難澁引籠居候ニ付詳を盡すニ足らせ候得
共書を以て陳述如斯ニ御座候早々頓首

三月十六日

福澤諭吉

大隈先生

侍史

七八五 ピットマン書翰「大隈重信宛」明治十三年四月八日

日本圓貨ヲ以テ香港ノ法貨ト爲スノ件ニ付昨年末倫敦造幣局ヨリ英國政府ヘ異議ヲ陳ヘシコトハ太守ヘンテツシ閣下ノ既ニ領知スル所タリ然レモ造幣局ニ於テ報告セシ異論ノ趣旨頗ル不條理ニ涉リ候ニ付太守ハ不取敢抗議ヲ草セラレ現ニ申呈中ニ有之候依テ森閣下ヨリ閣下ニ報道相成候儀ハ目下英政府ト太守トノ往復中ニ係リ未タ斷決相成候事ニハ無之候英佛及米國ノ水師提督ハ皆北邦ニ進向セリトトーマス・ウエード君ハ芝罘ニ於テ英國水師提督ニ面會セラルヘシ

北京事件ハ未タ確定ニ至ラス尤モ清國官吏ハ舉テ開戰說ヲ主張致候得共拙者ノ目撃スル所ニテハ舊様ノ廉價ナル戎器若干ヲ買收シ又若干ノ火藥ヲ歐洲ニ注文セシ外別ニ十分軍需ノ豫備ニ取掛候景況相見ヘ不申候今般英國政府ノ變革ハ實ニ意外ニ出申候就テハ改進黨ノ政府ト相成候上ハ必ス清魯ノ葛藤ニハ關涉致サ、ルヘク左候ハ、清國ハ愈究迫ノ場合ニ至ル可クト相察申候
確信スヘキ北京ノ風聞ニ據レハ「ハルト」氏ハ北京ヲ去リ倫敦ニ歸リテ官職ニ就クヘシ又自今清國稅關ノ管轄ハ之ヲ一總監ノ手ニ委任セスシテ一局ヲ置キテ管理セシムヘシト申スコトニ有之候

千八百八十年四月八日

チヨン・ピットマン拜具

七八六 五代友厚書翰「大隈重信宛」

明治十三年四月九日

爾後御動靜不奉伺候處愈御安康御奉職可被成御座奉恐賀候陳ハ正金銀行
 之儀當春中村道太下坂之節ハ一時人氣相競ヒ加入之人員も有之候處爾後
 彼之取扱甚龜漏るる大ニ信用を破り甚不都合之景況ニ立至り候然るニ
 今般副頭取小泉幸下阪致候付大ニ苦心致し岩崎小次郎等ニも相謀り一時
 人氣相治候姿ニ御座候得共元來彼之取扱株主を見る命令を下す同様之
 所業有之且本行ハ株主ハ報告を爲ス等之龜略ある有様ニ付如斯景況を釀
 成致候情實ニ有之候間爾來能々注意右様之不都合無之候様御説諭被下度
 奉希望候猶委細之事實ニ不日岩崎歸東京可仕候間御承置可被下候猶亦迂
 生儀も外聞も有之候ニ付是非株主ニ加入致吳候様中村ハ頻ニ依頼を請且
 其時分之景況迂生加入不致時ト他人加入を不欲之事情有之不得止事壹萬
 圓丈を加入可致事ニ相約置候元來迂生儀ト家業其他之事業も有之中々正
 金銀行ト申場合ニも無御座候得共右之場合ニ付其實大ニ困却仕候尤當座
 之儀ト融通を以加入致置可申候得共何を閣下之御許可を不蒙を不得譯ニ

228105

付御内意奉伺置候今日小泉歸東京ニ付此旨尊意奉伺度恐々如斯御座候也

四月九日

松陰

重信様 侍史

貳白米一條ニ付而も不容易御配慮を蒙候趣如何ニ恐縮之至リニ奉
 存候追々事實景況ハ與倉等^(守人)御聞取被下候通ニ此節ト望外之好結
 果を得大ニ安心仕候松方與倉等を以將來を御戒被下御厚意之段厚ク
 相心得可申候元來於迂生ハ御承知之通空相場ト最不好處ニ有之候得
 共其情之生スル處幾分歟米價を相下申度老婆心より生候儀ニ此節
 之事ニ相及候譯ニ御座候乍併御嚴戒も有之候儀ニ付而も爾來決而關
 係不仕候間必ス御安心被下度奉願候猶愚意松方ハ得与申述置申度候
 付御承置可被下候早々頓首

七八七 蜂須賀茂韶書翰

〔大隈重信宛〕

明治十三年四月十日

拜啓仕リ候小生今日大藏省三等出仕關稅局長被 命候ニ付何角御話可相
伺与參上致候處折惡敷御留守中不得拜芝遺憾此事ニ御坐候猶心得置ベキ
事も御坐候得モ御示諭ニ預リ度奉存候也

四月十日

蜂須賀茂韶

大隈參議殿

七八八 佐野常民書翰

〔大隈重信宛〕

明治十三年四月廿八日

謹呈別冊御建議案拜閱仕候至極之御高案と奉存候尤御沙汰之通勸工之文
字ハ何分不穩當と奉存候ニ付調べ合候得共未適當之文字見出シ不申候○
檢査院章程會計法之儀篤々拜閱大谷共ト内々調べ合別冊付紙仕入貴覽申
候御高考可被下候右は少し都合も有之遲延仕候得共右之内準備金之儀其

外ハ何卒今少し御改正相願度候尤別冊より御改正之廉ニも御座候趣昨日
御高話ニ候定而右等之處も或ハ御改め相成候儀歟とも奉存候今朝早目
參殿委曲可申上之處少し延刻仕候ニ付何レ後刻拜晤よて愚考之次第委敷
可申陳候其他昨日相願置候取引所等之儀ハ今日中島參朝尙御願仕候通申
含置候草々敬具

四月廿八日

(大藏卿)

常民

大隈參議殿

七八九 大木喬任書翰

〔大隈重信宛〕

明治十三年五月二日

來ル八日陸軍省ヨ 行幸被爲在候御序ヲ以拙邸ヨ午後一時ヨ 臨御被爲
遊候付而モ貴官へも午後六時御陪食被下候様致し度依之同刻ヨ御來車所
希候尤番能を入 天覽候心得ニ付御陪覽被下候ハ、午後一時半ヨ御入來

被下度候右御案内申進度如此御坐候拜具

五月二日

大隈 參議

大隈 參議 殿

尙々御差支も有之候ハ、可成早々爲御知所希候也

七九〇 ハウス書翰「大隈重信宛」 明治十三年五月八日

一筆啓上仕候追々暖氣ニ相向候處益々御多祥奉慶賀候陳モ野生此度旅行可被仰付御見込誠ニ難有彌々旅行致候ハ、貴君ニも御利益ニ相成可申と存候扱小生より貴君へ遠キ先ニ御忠告致度候箇様申上候ハ、日本風俗又モ禮儀ニ甚タ失禮カモ存不申候得共尙日本國ニ利益ニ相成候事モ少も躊躇不致皆申上候ガ勤ト存候間何卒左様御許容爲被下度候小生本國政府ニ官吏ニハ少モ無遠慮何事ニ不寄報告致候故矢張其通り貴君へ御書送り

申上候トハ覺不申失敬之段モ御許願上候先達モ右旅行一條ニ付御面談致候節尙日本官吏壹人米國并ニ英國ハ一行爲致旨申上置候該事再々繰返シ候てハ御座ナク候へ共只貴君ニ日本語ヲ以テ直ニ諸事御咄申上得ベキ此貴紳ヲシテ小生ト同行爲致候ハ、如何程利益ニ相成且又日本公使領事等外國官吏ノミト交接致シ候事實ト代リ獨立旅行人トナツテ洋行致シバリ(譯會)エメントニ議員新聞記者其外平民トノ交接致シ眞ニ各國風土巡視致來リ候ハ、貴君又御中間等ハ餘程知識ヲ相増候様相成候ハ、實ニ小生ニ於テモ満足致シ候前申上候條々モ只小生ニ熟考ニ御坐候貴君乍恐御熟思アレハ此上説明候ニハ及ヒ不申ト存候小生知己ニシテ賢才アル貴紳壹人同道致シ候様致度候小生先々ヨリ心中ニ思ヒ居候モ野生ト親シク交接致シ實ニ信用可致者御座候其者ニ外國旅行ニ付ハンセン(刺然)トハ不申候へ共氣ヲ引見候處餘好シカラヌ様見承候此者モ實ニ忠義ニ骨折テ肝用ナル御用相勤候勉勵ニ付能ク考へ候節モ

此者ヲシテ右申上候役ニ御當被下度と存候若シ此者へ貴君何事ニ不寄御
 依頼相成候ハ、無疑全ク御用可相勤小生モ此者ヲ同行人ニ選ヒ致候且又
 此者參リ候ハ、貴君へ諸事之全報ニ付ルモ野生大安心致候此者ヲ各國へ
 御遣シニ相成候事ヲ褒賞トシテ御許可相成候ハ、小生ニ於テモ此者ヲ名
 指候ニ猶々安心致候如何ニトナレバ小生義此者難キ御用ニ盡力致シ候御
 褒賞トシテ昇等致シ候事ヲ聞事ナク數年其昇進ヲ相待居候故ニ御座候若
 シ此者彌右御用被仰付候へハ小生ニ於テ今二個之目的御座候先最初ニ此
 者へ勳章御與へ被下度左スレハ猶更勉強致シ彼ノ工ヲ以テ諸事取計ヒ小
 生ニハ丁度適當之人物ニテ他人ヨリハ猶能野生之目的取行ヒ安ク御座候
 ト愚察致シ候貴君ニハ 平井 *mr Hirai Yukimasa* 希昌 ヲ指シテ申上候事ヲ御驚入ル有
 之間敷ト存候勿論此手帑ニ付ルモ 平井 *mr Hirai* ハ少シモ存不申且又此者是等
 ニ付ル宜敷義ト存候哉少モ難計候間貴君左様御承引願上候
 乍併彼ニハ餘リ過タル事ト存候哉モ不計候へ共貴君ニハ左様不思召小生

申上候事之眞實ニシテ餘リカタク申上候ト御信用可有之様願上候實ニ
平井 *mr Hirai* トハ親シキ交リ致居候得共夫等ハ箇様御書送申上候第二次譯ニ
 シテ第一之譯之彼者之才智ト發明ニ御座候前申上候義何卒御許容被爲下
 度此段偏ニ願上候早々頓首

一千八百八十年五月八日

二白此後書狀差上候節之此通り和譯致シ回送致シ候哉又之意味等變
 ゼヌ様英書ニ認メ候哉此段奉伺候不備

東京築地海岸通り

九番館住

E. H. Hause

大隈重信君 閣下

七九一 五代友厚書翰

〔大隈重信宛〕

明治十三年五月十日

大隈重信關係文書第四 (明治十三年五月)

百七

拜啓仕候陳も過日渡邊昇歸坂此度堂島之一舉ニ付種々御不足之御沙汰を蒙候趣キ渡邊ニも大ニ驚き秘ニ相通し甚以恐縮仕候加ニ右云々之内閣下被相頼相場相始候趣と迂生相唱居候様申觸候由實ニ驚入申候乍併實際ニ甚遠キ巷説ニ素々御信用も不被下候事と存候得共致愚案候處此説ハ余程意味遠謀之アルト想像仕候間是非出所御探偵被成下北畠^(治房)迄極内御洩被下度奉願候何とあまの將來を注意可致旨事と愚案仕候是亦於東京此節之一舉大ニ信用を破り惡説散々あるよし閣下ニも不容易御配慮を蒙候儀与深御推計申上今更不得止事ニ候得共只々恐縮仕候何を來月初旬迄ニ出京御直ニ御詫可申上候猶亦河^(實)緒儀此度俄然交代被仰付已ニ明日出立仕候由餘り俄ニ御下命ニ付當人も御趣意之アル處を不知或は何ぞ拙策ニも致シタルカト内心痛心之姿ニ相見へ於迂生も兼而御信用厚キ仁ニ付或も他ニ御用相成候事歟或も堂島云々之爲ニ惡説を蒙候事歟御模様不相分候付乍陰も專念罷在候若堂島云々之爲ニ生候儀ニ付交代被仰付候譯

ニも候ハ、迂生之心情甚不忍事ニ御座候此度之一舉ハ中途ニ云々之趣旨を相咄候位ニ何も不存惡評之生スルハ皆迂生ニ關スル處ニ付其御責問も迂生之罪ニ御座候間明亮ニ御識別被下候様奉希望候元來此度一舉ハ始々米價を制スルノ旨趣公然相唱同志共同セシテ^{此時迂生只私心アル處幾分歟米價下直ニナル時は常平之御備米も出來ルト云フ意アルノミ}其創業ハ迂生之發論ニ無之堺商法會議所之旨趣共進會も無益ニ屬スルノ意を述且米價高直ニ過ル時ニ全國之財政を妨害スルトノ云々同行之連中主張致シ迂生を以裁決役ニ乞ひ候々生候儀ニ實際を明亮ニ御探偵被下候ハ、迂生等ニ聊不耻之意有之申候河^(實)緒儀も自見聞可有之候間御直ニ御聞取被下度此旨御詫旁奉得尊意候恐々敬白

五月十日

松 陰

重 信 様 侍 史

七九二 ハウス書翰「平井希昌宛」 明治十三年五月十一日

秘書

拜啓然バ經費ノ儀拙者自個ノ分ハ預テ他ノ目途ニ治定相成居候御手當金ヲ以テ全ク支辨可致候間更ニ拙者ノ經費金ヲ御備へ相成候ニ及ハズ又拙者同伴ノ日本人費用ハ始終同行致且萬事同様ノ取扱ヒ致候間自然拙者ト同一ニ可有之候臨時費ノ儀ニ付テハ(拙者見込之次第ハ凡テ貴下御承知ノ通り)米國ニ於テ交際費用一個人ニ付凡十弗ツ、相掛リ可申即チ一度ノ饗應費五人分五拾弗ノ割合ニ準シ又歐洲ニテハ右ノ饗應費一人ニ付五弗ヨリ七弗マデニ候拙者ノ所存ニハ米國ニ於テ諸黨派ノ人ニ交接スル者概テ四黨ヨリ多キヲ要セス又歐洲ニテハ八黨乃至十黨ヨリ多カルマジクト存候然レハ此目途ノ費用ハ一千弗ニテ充分事足り可申尤モ拙者ニ於テハ成ルベク右ノ額ヲモ省減候様精々注意致候得バ此外ニ決シテ増額相成候儀有之間敷若シ萬々一増費相成候ハ、其分ハ拙者自費ヲ以テ支辨シ決シテ

其拂方ヲ申出マジク候

右ニ付在外ノ期限六ヶ月ニ候へバ經費金左ノ通りニ有之候

一洋銀三千弗 イ！エツチ・ハウス分

一同 三千弗 同伴日本人ノ分

一同 一千弗 臨時費

合計洋銀七千弗

在外期限八ヶ月ニ相成候時ハ左ノ通り

一洋銀四千弗 イ！エツチ・ハウス分

一同 四千弗 同伴日本人ノ分

一同 一千弗 臨時費

合計洋銀九千弗

若シ又十ヶ月ニ及ビ候時ハ合計洋銀一萬一千弗ニテ其餘ハ之レニ準シ候右ノ計算ハ尙ホ成ルベク節減可致心得ニ候得共然シ其レガ爲メニ充分ノ

便宜自由ヲ得サル様ニテハ却テ使命ノ主意ヲ妨害候様相成可申候也

五月十一日火曜日

イー・エツチ・ハウス

平井希昌君貴下

七九三 榎本武揚書翰〔大隈重信宛〕 明治十三年五月廿四日

本日參邸可仕積之處御建白書ニ對シ質問仕候程に熟閱之暇無之ニ付今
篤と拜讀之上異日拜晤可相伺候草々不盡

五月廿四日

(海軍卿)

榎本武揚

大隈參議殿

七九四 大隈重信建議書 明治十三年五月

經濟政策ノ變更ニ就テ

當春太政官中從前ノ部局ヲ廢シ更ニ六部ヲ置カレ大ニ施政監査ノ方
ヲ改ム隨テ各省使院事務ノ章程就中理財ニ關スル事項ニ付キ施政ノ
主義管理ノ方向ヲ更改釐定スルヲ緊要ナリ是ニ因テ差當リ左ニ第一
ヨリ第四ニ至ル三議一件ニ付卑見ヲ具陳シ其官司ニ向テ命令訓諭ヲ
下スヘキモノハ其御達案ヲ起草シ謹テ仰高裁候也

第一 勸誘ノ爲メ設置シタル工場拂下ケノ議

凡ソ政府ニ於テ工場ヲ設置スルノ理三アリ、國家統治上ニ於テ必要ノ機具
ヲ製作スルタメニ設置スルモノニシテ本來其事業ノ性質人民ノ營業ニ任
放スヘカラサルモノ即チ陸海軍備ノタメノ工場ヲ設ケ造船修船ノタメニ
廠ヲ置キ或ハ財政上貨幣ノ鑄造所ヲ備フルカ如キ其一ナリ、事業ノ性質ハ
人民ノ營業ニ任放スルモ敢テ不可ナキニ其起興ノタメ多分ノ資財ト高尙
ノ學識トヲ要スルニヨリ、或ハ事ノ秘密ヲ要スルニヨリ人民ニ於テ發起ニ

從事セス、又政府モ容易ニ其營業ヲ許スヘカラサルモノ、即チ金銀銅鍍ノ鑄
練熔解所ヲ開キ、官用圖書ノ印刷所ヲ設クルカ如キ、其二ナリ、純然タル工場
ニアラスト、雖郵便電信ノ如キモ、亦同シ、政治上、敢テ必要ナラス、人民ノ營業
ニ任放シテ、管ニ不可ナキノミナラス、却テ之ヲ望ムト雖、正改進ノ政策ニ於
テ其開設擴張ヲ急務ト爲スニ因リ、政府先進起興シテ、人民ヲシテ其公私ニ
便益スル^ヲ覺知セシメンカタメニ設置シ、所謂工業勸誘ノタメニ其模範
ヲ示スニ止ルモノ、即チ機械ヲ以テ綿糸ヲ紡績スルノ所ヲ開キ、製絨所及ヒ
機械製作所ヲ設クルカ如キ、其三ナリ、此第三ノ目的ヲ以テ開設シタル工場
ハ其事業漸ク整頓シ、爾後幸ニ其管理ノ方法ヲ愆ル^ヲナクシ、ハ收支ノ金員
ヲ計較シ、既ニ幾分ノ利益アルニ至ルカ、又ハ收支上ニ於テ利得ナキモ未タ
曾テ製作ノ方開ケサルノ物産ヲ作出シ得ルニ至レハ、乃チ起業ノ目的ヲ達
シタルナリ、事業ニ依リテハ政府自ラ經營シテ利益ナキモ、人民ヲシテ營業
セシメナハ、其利益ヲ收ムルモノアラン故ニ、若シ利益アルニ政府仍ホ營業

ヲ經續シテ止マサル^ハ識ラス知ラス專業ノ狀勢ヲ來シ勸誘ノ本旨ニ乖
ク若シ利益ナキモ仍ホ繼續シテ止マサレハ倍々國營ノ損失ヲ嵩ム、寧ロ元
資ノ幾分ヲ棄捐シテ速ニ人民ニ賣渡シテ煩冗ヲ除クヘキナリ、況ンヤ方今
國債償還ノ資ヲ増加スルノ急且要ナル苟モ歲出ヲ節減スルノ方アラハ之
レカ舉行ヲ怠ルヘカラサレハナリ
勸誘ノタメ開設シタル工場即チ内務工部兩省所管ノ工場總計十四ヶ所、千
住製絨所、第一綿絲紡績所、第二綿絲紡績所、新町紡績所、富岡製絲場、石炭酸製
造所、砂糖製造所、赤羽根工作分局、赤羽根木具塗物場、深川工作分局、兵庫工作
分局、長崎工作分局、深川白煉化製造所、品川工作分局、ハ工業既ニ其緒ニ就ケ
リ、今之ヲ人民ニ拂下クル^ハ第一其損失ヲ補足スルノ金額即チ金拾萬三
千九百拾三圓拾七錢^{十一年ハ}、度每年通常歲出ノ額ヲ減ス、第二之ヲ拂下クル
^ハ營業資本金ヲ實納セシムレハ、即チ金百八萬七千七百六拾九圓三拾三錢
^{十二年度}調營^ヲ準備金ヘ増加ス、第三拂下ケノ^ハ興業費年賦返還ノ約ヲ結ヘ
業資本金高

ハ其年限中 年々若干ノ雜收ヲ増シ滿期ニ至レハ總計貳百八拾萬千六百三十拾圓四錢ト洋銀千三百七拾六弗七セント十二年度調ノ興業費高ナリ損失ナク元金ニテ拂下ケ得ルモノト假定シテ斯ノ如ク準備金ニ追加シ乃チ國債ノ償還ニ充ルヲ得ヘシ

前陳スル如ク勸誘模範ノ工場ヲ漸次人民ニ拂下クルヲ冀望スト雖凡拂下ケ約條ノ標準ヲ規定セス單ニ該官ノ行政處分ニ委ネ區々ノ情願ニ任セテ其約條ヲ取結フヲ得ヘキモノトセハ自然囑託先入ノ情誼ニ誘惑セラレ時ニ充分公當ノ處置ヲ施シ難キヲ保セス蓋シ從前ノ慣例ニ於テ世間ニ公告シテ衆人ノ競争ヲ聽ルシテ其宜キヲ撰ムノ方ナキヲ以テナリ然シテ其弊害ノ及フ所遂ニ政府ノ財産ヲ侵蝕缺減スルニ至ル宜シク一定ノ標準ヲ示シテ此弊害ヲ豫防スヘキナリ

以上ノ考案ヲ以テ左ニ工場拂下ケ内規案ヲ草シ謹テ裁可ヲ仰ク○違案工場拂下概則ハ發布セラレタルモノト同一ニツキ省ク

第二 諸學校ヲ文部ニ統轄シ普通小學ノ補助金ヲ廢スル議

一 政務ヲ九省一使ニ分任スルハ仍ホ夫ノ財學分業ノ主義ニ於ケルト同一理ニシテ勤勞資財ノ冗費ヲ省キ各々一科若クハ類似ノ數科ヲ専門トシテ技術ヲ研究シ自ラ其優勝トスル所ヲ得テ以テ倍々其進歩ヲ圖ラントスルニアリ今文部省ノ學制組織ヲ案スルニ大學ニ法律、土木、鑛山、建築等ノ専門科ヲ備ヘテ各々多少ノ生徒アリ是レ固ヨリ文部省自ラ使用センカ爲メニ設ケタルノ學科ニアラス生徒ニアラス國家一般ノ爲メニ設ケタルモノナリ果シテ然ラハ他ノ省局ニ於テ同一學科ヲ開設シテ生徒ヲ教育スルハ寔ニ重複ノ事務ニシテ管ニ分業ノ便利ナキノミナラス勤勞資財ノ冗費モ亦タ鮮ナカラサルナリ現ニ諸科教員ノ如キ是ニ於テハ内國人ヲ以テ之ニ任スルモ彼ニ於テハ猶ホ外國人ヲ備フテ之ニ補スルモノアリ且司法省ニ法律學校ヲ有シ工部省ニ工部學校ヲ有スルカ如ク各省各自所要ノ人員ヲ教育セハ夫ノ大學ニ於テ教育スル所ノ生徒ハ卒業ノ上之ヲ擧ケ用ユルノ所ニ乏シキナリ昔日 文部ノ學制完全ニ至ラ

ス諸學科ヲ開進スルノ急ナル時ニ際シテハ各省各々所要ノ生徒ヲ教育シタルコト固ヨリ一時ノ便法タリト雖モ今ヤ一般ノ學制既ニ其緒ニ着キ各科卒業ノ生徒モ亦寡カラス因テ軍學校ノ陸海軍ノ兩省ニ於ケルカ如キ其學科ノ特別ナルモノヲ除クノ外ハ宜ク此際舉テ文部ノ所轄ニ歸スヘキナリ

二普通小學ノ制タル初メヨリ民立ヲ主トシ官ハ之ニ若干ノ補助金ヲ給與シテ獎勵スルニ過キス而シテ中央ト地方トヲ問ハス小學校設置ノ普及セシヤ小學校總計二萬五千四百五十九省十年文部省年報ノ大數ヲ觀ルニ至ル自今官司ノ誘導獎勵ヲ急トスルハ最早覺舍ノ設立ニアラスシテ不就學ノ兒童ヲ減シテ就學ノ兒童ヲ増スニアルナリ故ニ各地ニ散付シテ僅少ナル小學校補助金十二年度ニ於テ小學校補助金貳拾萬圓之ヲ三府三十五縣ニ配賦スレハ平均五千貳百六十三圓餘ノ支給ヲ廢止シ次項ニ陳スル所ノ工藝學校新設ノ費ニ供セント欲ス

三普通小學校ノ設立ハ最早獎勵ヲ急トセス之ニ代テ須急ノ施設勸奨ヲ要スルモノアリ即チ工藝學校ノ設置農學校ノ擴張是ナリ何トナレハ農産工産ヲ改良振起シテ國力ヲ養成スルノ捷徑ハ敢テ高尚博學ヲ要セス各地物産ノ種類ニ依リ其改良前進ノ度ニ適應スルニ足ルヘキ分ノ學科ノ知識アル者ヲ早成シ直ニ民間ノ工場田土ニ就テ施術教導ヲ爲ス者ヲ要トスレハナリ但シ工藝ノ學校ニ種類等級アリ農學校ニ試驗場ヲ附屬スルヲ要トスルノ事アリ其之ヲ施設スルノ序次方法ハ猶ホ詳悉ノ論究ヲ要ス

○達案ハ之ヲ略ス

第三 御領ヲ定ムルノ議

維新開國ノ法令中ニ於テ最モ公明ニシテ爾後法律經濟ノ原則トナリタル法令ノ一ツハ人民ニ於テ土地ヲ所有スルノ權ヲ定許シタルモノ是レナリ

萬世一系ノ御國體普天率土皆是レ天祖ノ遺傳ニシテ即チ 聖上ノ臣士タルコハ獨リ古今ノ史乘ニ徵シテ顯然タルノミナラス苟モ御國民タル者ノ腦裏ニ感銘シテ失セサルナリ惟ルニ維新ノ盛舉ニ大義ヲ看破シ數百ノ侯伯封土ヲ奉還シタルノ時ニ際シ朝廷ハ斷然正理ノアル所ニ基キ無比ノ卓見ヲ以テ之ヲ各民ニ分與スルノ實ヲ示シテ所有ノ權ヲ定許シタリ彼ノ歐洲諸國ニ於テ人智ノ發達事物ノ開進ニ感動セラレタル人民ノ抗衝強迫ニ因テ始メテ土地ノ私有權ヲ認定シタルノ比ニアラサルナリ然リ而シテ以降倍々改進ノ政圖ヲ計畫シテ怠ラス八年四月ニ至リ更ニ 詔勅アリテ漸々立憲ノ政體ヲ構成セントス是ニ因テ有司各々擔任ノ政務ヲ修整シテ立憲ノ基礎ヲ鞏フセンコトヲ孜孜トシテ是レ勉ム此際全國ノ土地中ニ就テ御領ヲ定メ土地ノ種別ヲ明確ニ爲スコト寔ニ緊要ナリトス

歐洲諸國ニ於テ一國ノ土地(土地ノミニアラス他ノ財產モ亦然リト雖モ畢竟土地ノ附屬物タルヲ以テ其主ノミヲ舉ケ其從ヲ略ス)ヲ大別シテ第一國

有第二官有第三民有ノ三種トス蓋シ河港城寨兵器船艦ノ工廠等該國ノ存立ニ必要ナル土地ニシテ決シテ賣買讓與若クハ期滿得權ニ依テ所有權ヲ移轉スルヲ得ヘカラサルモノヲ第一種トシ動產ト不動產トヲ問ハス行政ノ定規ニ從フトキハ恰モ一箇人所有ノ財產ト均シク賣買讓與等ニ依テ其所有權ヲ移轉スルヲ得ヘキ財產ニシテ官府ノ所有ニ係ルモノ及ヒ國中主ナキノ財產ヲ第二種トス又此第二種中ニ於テ帝王ノ私領ヲ分チ森林宮殿等ヲ以テ之ニ充ツ第三種ハ即チ人民各自私有ノ土地是ナリ英國ノ如キハ國有ト官有トノ稱ヲ別タス單ニ英王ノ所有ト稱シ且看倣スカ如シト雖モ財產ノ性質上自ラ其別アルハ仍ホ他ノ諸國ト異ナルコトナシ夫レ斯ノ如ク土地ヲ種別シ帝王ノ私領ヲ定ムルノ所以ハ第一國費ト宮内ノ用度トノ會計法ヲ異ニシ宮内ノ用度ニ就テハ一ニ帝王ノ特權ヲ以テ其支出ヲ計リ敢テ一般會計法ノ檢束ヲ受ケス以テ帝位ノ光榮ヲ悠久ニ保續センカ爲メナリ第二時勢ノ變遷不慮ノ禍亂ニ因テ政體ノ變更アルトモ帝家ノ面目後嗣

ノ威儀ヲ辱シメサランカタメナリ
本邦ニ於テ御領ヲ定メント冀望スル所以ハ彼ノ歐洲諸國ニ於テ帝王ノ私有財産ヲ定ムル所以ト同一ナルニアラスト雖モ宮内ノ用度中御領ノ收入ニ係ルモノハ一般ノ會計法ニ依ラス專ラ 聖上ノ御思召ヲ以テ學士工人ノ藝能獎勵ノ特典無告奇特者ノ恩賜皇族諸宮ノ用度等ニ活用セント欲スルノ點ハ同一ナリ而シテ山林ヲ以テ御領ト爲サントスルハ之ヲ管理スルニ易ク且森林ノ保護栽培ノ方モ自ラ改良ニ赴クヲ以テナリ全國官有ノ山林ヲ計スルニ七百二十六萬七千三百八拾三町二段餘即チ四千六百七十七方里而シテ其枯木下タ草實果等ノ收入六萬三千四百四拾九圓(十年度決算額)營業資本金拾萬圓收支差引益金壹萬四百五拾七圓(十一年度決算額)ト外ニ拾八萬六千六百六拾四圓餘ニ當ル木材其他ノ現品アリ山林局ノ豫算ニ依レハ十五年度ニ至レハ收支差引益金五萬貳千八百八拾三圓餘ト三拾九萬三千九百四拾三圓餘ニ當ル木材ノ貯蓄ヲ有シ總計四拾四萬六千百貳拾六

圓ノ益金ヲ收入シ得ルモノト爲セリ以後管理ノ方法ノ如何ニ依テハ多少收支ノ金額上ニ増減アルヘシト雖モ追年運輸ノ便栽培ノ法宜キヲ得ハ前段ノ豫算ニ大差ナキ收入アルニ至ラン是ニ因テ仰キ願クハ即今先以テ御領ヲ定ムルノ議御裁定アランヲ幸ニ御聽許ヲ蒙ラハ内務宮内等ノ諸官吏中ヨリ委員ヲ命シ御領山林元簿ノ調製管理ノ方法等ヲ審議セシメンヲ希望ス

第四 各省中局課ノ分合所屬改替ノ件

各省ノ章程改定ノ際ニ當リ局課ノ分合所屬ヲ改替セント欲スルモノアリ即チ左ニ列記シテ裁ヲ仰ク幸ニ聽許ヲ蒙ラハ其公達案ノ如キハ追テ起草上申スヘシ

- 一 内務省中ノ土木局ヲ工部省ノ所轄ニ付ス
- 二 内務省山林局所管ノ官有山林ノ著大ナルヲ撰ンテ御領トシ其管理ハ宮内省ニ歸シ宮内省中御領管理局ヲ置ク

- 三内務省中ノ山林局ヲ地理局ニ併ス
- 四内務省驛遞局ノ管船課ヲ大藏省ノ所轄ニ付シ商務局中ニ置ク
- 五内務省中ノ博物館ヲ宮内省ノ所轄ニ付ス
- 六工部省中ノ電信局ヲ内務省ノ所轄ニ付ス
- 七内務省所轄官有財産管理ノ事務ヲ大藏省ノ所管ニ付シ大藏省中新ニ官有財産管理局ヲ置ク

明治十三年五月

參議 大隈重信

【備考】

この建議は二個の重要事項を含めり、一は經濟政策の變更にして、一は皇室財産の設定これなり、明治十三年は日本の産業及び經濟史上に於ける一轉期にして、この年を契機として、我が國の産業は所謂慈父的干渉主義より自由放任主義に移り、直接官營の方針より、間接保護の方針に推移せり、而してこれ皆重信のこの議に因れるものなり、尙ほこの具體的に現はれしは明治十三年十一月五日の工場拂下の達なり、工業勸誘ノ爲メ政府ニ於テ設置シタル諸工場ハ其組織整備シテ最

初目算ノ事業漸ク舉カルニ從ヒ官廳ノ所有ヲ解テ之ヲ人民ノ營業ニ歸スヘキモノニ付別紙概則ニ準據シ其省諸工場漸次拂下ケノ處分ニ及フヘシ此旨相達候事

皇室財産設定の議は、久しく唱道せられしか、未だ實行せらるゝに至らざりしが、重信はその急務を思ひ、この建議をなしたるなり、而してこゝに注意すべきは、重信が皇室財産設定の理由にして、皇室財産の設定を以て、民權の發達によつて生れいづる、國會に對抗すること、即ち財産を以て皇室擁護の城壁と考へたる、一部の人人々の思想に反し、皇室財産を以て、皇室の優恩を發揮するの資に供するにありとなしたることこれなり、

七九五 大隈重信建議書 明治十三年五月

頃日金銀の價值非常に昂上するに従ひ物品の價值も亦た亂動浮沈して定らず其禍害の及ぶ所まさに測られざらんとするの狀勢あり今日に於て之を救治するの政策は正金通用の制を設る一事を除て復た他に良謀善計あるを見ざるなり願くは非常の英斷を以て是の政策を舉行あらんことを是

の政策施行の方案及び其得失利害は即ち別冊に列擧して進呈す凡そ應變の政策に貴ぶ所の者は其果決急施に在り今日金銀物貨變動の勢たる其救治一日を後るゝは即ち一日の禍害を増添し一日を早くすれば即ち一日の功績を收む若し遷延遅緩して而して時去り機失し社會の驚悸轉た急劇を増さば人心の向背亦た或は測るべからず是時に當りて假令ひ辛苦經營百方計畫するも亦た遂に及ぶこと能はざるべし斯くの如き情勢あるが故に別冊の政策速に裁可決行あらんことを冀望す若し是の事果して決行せらるゝに至れば物價次第に落下すべきは明白あり然らば即ち今日各官廳より物價昂起の爲に要請する經費の増額は悉皆之を減殺して可なり是政策を施行して別冊方案中に述るが如く外債募集の擧あるときは各官廳より金銀を輸出するの費途亦た充分に之を節減せしめざるべからず此他各官廳の事務に於て其緩急大小を考慮するときは今日尙ほ不急の業務なきにあらず又各官衙の間に於て一事層行の重複に渉る者あり是等の類は亦た

此際に於て嚴に節減更革せざる可からざるなり凡そ是等の條件は是方案裁可を得るの後に於て更に詳悉具申する所あるべし今日金銀物價の變動其勢の急劇なる禍害の慘害なること前段に陳述するが如し別冊方案速に裁可あらんことを望む

通貨の制度を改めんことを請ふの議

貨幣政上の事たる維新以來漸次整頓に趨き猶ほ數年を経過するの後一昨年未より昨春に至り一の變動を現出して銀貨非常に騰貴し嗣て又今日の變動を見る是に於てか世の論者或は之を紙幣の増發に歸し或は之を投機盛行の故とす凡そ此等の事皆以て多少變動の勢骸を煽颺するに足れりと雖も其實因の在る所を究迹するに復た唯輸入の不平均依稀舊に仍り許多の正貨を以て其差を補つて今に至るまで絶えざるに依るなり内地殖産の實績猶未だ顯はるゝに違あらず海關稅則の改正亦た未だ急施するに及は

す而して一方に於ては依然として甚た正貨を得るの道に乏しく固有の古金銀愈々隱伏乏少に傾向するの勢あり是即ち今日の變動を招來するの禍源にして一昨年来及び今日の變動たる蓋復々前後同一軌に出ると謂て可なり

維新以降本邦は紙幣専用の時世にして別に金銀を要すべき場合なく唯海外貿易に於てのみ獨り金銀を通用せり故に金銀需用の範圍は單に貿易市場の一部分に止まり是部分を除くの外は邦内に於て曾て金銀の多少伸縮を感覺すること無しと云ふも可なり茲に若し金銀の輸出入相平均するの有様ならんには假令ひ邦内の金銀如何に乏少なりとも需用の供給に超過すること無るべし果して然らば金銀は紙幣に對して決して昂上すること能はず紙幣は依然として其格位を保ち邦内に流通して些少の障害を見ざるへし斯の如き時世ならんには紙幣専用の制も亦た何の不可なることか有らん之れを察せずして而て深く紙幣通用の制度を罪するは抑も亦た冤

かり故に紙幣通用は其制の不可なるにあらず唯輸出入不平均の時世に不利あるのみ

然れとも斯の如き國勢斯の如き時運に遭逢するときは即ち其禍源の輸出入より生ずると紙幣より發するに拘らす速に應變の政策を定て以て是の禍害の社會に布及するを防備せざる可らざるなり昨春の變動に當てや、國庫より正貨三百萬圓を市場に發布し以て能く一時の勢燄を滅殺せり是策の如き襲て之を施爲するときは想ふに應に若干の効驗を收め得へしと雖も有限の責を以て無窮の變に應ずる者は本と一時の方略にして國家永遠の長算大策にあらざるなり

又今日の勢たるや金銀獨り紙幣に對して昂低上下するに止まらず内地の物貨も亦た亂動浮沈を與にせり故に之を大にしては工商諸業に損益危険の狀勢を現し又下等生計の人民をして窮苦の悲態に陥入せしめ之を小にしては各官廳の經費頗る不足を生して比々其増額を要請し國帑の歲計爲

に匱乏を告るに至る凡そ此般の狀勢之を前日の變動に比するに其大小輕重固より同日の論にあらざるなり然即ち其以て之を救治する所の政策亦た自ら前日に異ならざるを得ず

時變斯の如く大なり紙幣通用の制永く施行すへからず禍源斯の如く深し一時の方略以て之を醫治するに足らず然らば即ち同日の計たる唯正金通用の一事あるのみ今若し等閑に計畫し去れば正金通用其事甚た至難なるに似たり然れとも非常の英斷と非常の忍耐とを以てせば天下何事も爲し得へからざる者あらんや正金通用の方案は條を逐て左に陳叙す其利害得失の如きは末段に於て更に之を議論すへし

附正金通用方案

第一 紙幣流通額の事

是方案に於て最初に説明を要する者は現時の紙幣流通額にして其總計及

ひ十三年度迄に消却するの殘額は左表の如し

本年三月三十一日流通額	一一二、六五〇、〇〇〇圓
十三年度迄に消却すべき額	七三二〇、〇〇〇圓
差引十三年度末日の流通額	一〇五、三三〇、〇〇〇圓

是差引流通額壹億五百三拾三萬圓は則ち以下に陳述する方法を以て之を正貨に交換消却すへし

第二 外國債を募る事

明治六年家祿處分の舉あるに際し當時七分の利子と九拾貳旁半の賣價とを以て貳百四拾萬旁の公債を英國に募りしに之に應ずる者幾んと一千萬旁の員數に上れり維新戰亂の後を承け百事草創の政府にして外人の信用猶且つ然り況んや財務日に整齊する明治十三年の政府は外人の信用を復た前日の比にあらざるなり而て英國の金利は其低下あること猶ほ前日の如し故に今日六分の利子と九十五旁の賣價とを以て一千萬旁の公債

を起すも其事頗る易々たるへきなり然れども今假に其利子を七分とし其賣價九十五磅とし償還期約を二十五ヶ年とし以て我か通貨五千萬圓の員數を募集するときは即ち左の如し

募集稱呼額	一〇、五二六、三一五磅
賣價實額	一〇、〇〇〇、〇〇〇磅
我邦の正貨に當る	五〇、〇〇〇、〇〇〇圓
募集稱呼額の利子	七三六、八四二磅
我邦の正貨に當る	三、六八四、二一〇圓

斯く外債を募集して以て先づ五千萬圓の正貨を得へし

第三 國庫儲存の正金を募集の外債金に合して紙幣を交換する事

現時政府の準備金五千餘萬圓の中に就き國庫に現存する金銀貨幣及ひ地金并に新舊銅貨の合計は壹千四百壹萬圓にして此他人民に貸與せる分の

本年中に返償すべき者等亦た三百四拾九萬餘圓あり故に本年中に於て國庫に儲存するの總額は即ち壹千七百五拾萬圓にして是の總數を外國募集の五千萬圓に合するときは即ち六千七百五拾萬圓の紙幣を消却するを得へし然れども紙幣の市價低落するの今日に於ては六千七百五拾萬圓の正貨を以て能く七千八百萬圓の紙幣に交換し得へき正貨壹圓を以て紙幣壹圓十五錢五厘五毛に交換す斯の如くして紙幣流通の總額壹億五百三拾三萬圓の中より七千八百萬圓を交換し盡すときは其剩殘せる員數は僅に貳千七百三拾三萬圓に過ぎざるなり而て之を消却するの處置は次第に陳說するが如し

第四 銀行の抵當公債證書を變更する事

現時銀行より發行する紙幣の抵當には皆尋常の公債證書を用ひしめたり而て其價格は本年三月に於て三千四百四拾貳萬餘圓なり故に今若し是抵當法を變更し金札引換公債證書を以て之に代はらしむることゝ爲さは各銀行は政府に向て三千四百四拾貳萬圓の紙幣を納高し以て金札引換公債

證書を請求すへし是に於てか政府は是公債證書を附與して容易に三千四百四拾萬圓の紙幣を斷截するを得ん然れとも正貨を以て交換せる紙幣の殘額は貳千七百三拾三萬圓に過ぎず又本年中に剩殘せる備荒儲蓄金九拾餘萬圓を金札引換公債證書に變するときは銀行の抵當公債を變更せしむるは唯貳千六百四拾三萬圓にして足れり斯くして幾分の紙幣を消却し又幾分を正貨に交換するときは政府發行の流通紙幣は悉皆交換消却して遺す所なきこと左表に計上するが如し

金札引換公債を以て引揚る紙幣の員數	二七、三三〇、〇〇〇圓
正貨に交換して引揚る紙幣の員數	七八、〇〇〇、〇〇〇圓
紙幣引揚の總額	一〇五、三三〇、〇〇〇圓
流通紙幣總額	一〇五、三三〇、〇〇〇圓

是他に流通する紙幣は唯銀行より發行せるものにして其員數三千三百七拾萬圓なり銀行紙幣は本と要求に應して正貨と交換すべきの性質を有す

る者ありと雖も邦内に於ては紙幣専用の時世なりしか故に政府發行の紙幣と交換して以て其義務を果たすの制を設けたり然れとも世間流通の貨幣已に正金に變するなり銀行紙幣は則亦た正金銀と應需交換の義務を負荷すべきは無論なり然るときは三千三百七拾萬圓の銀行紙幣は即ち通用正貨の代券たるよ過ぎず故に政府發行の紙幣のみを消却交換し盡すときは全國の通貨は悉皆正金銀に一變したるの理ある事を知るへし

第五 正貨通用に變するも通貨過少の憂なき事

以上陳述するが如く流通紙幣の總額中より貳千七百三拾三萬圓を消却し又七千八百萬圓を正貨に交換するときは全國の通貨は俄かに六千七百五拾萬圓に縮減したるの有様あり是の餘尙は銀行紙幣三千三百七拾萬圓ありと雖も正貨と應需交換の性質に變更する以上は少くとも其發行額五分の一は正貨を儲持せざるへからず故に全國通貨の總額は政府發行の正貨と銀行紙幣五分の四とを合算せし者にして其計數は左表の如し

政府發行 of 正貨

六七、五〇〇、〇〇〇圓

銀行紙幣五分 of 四

二六、九六〇、〇〇〇圓

故に是方法を難する者或は通貨の過少にして工商の諸業に不利なるを疑はん然れども正貨通用の時世に變するときは舊時に隱伏せし正貨自ら現出通用の勢を生すへし今若し新貨幣の鑄造額と其輸出額とを對比すれば猶ほ邦内に留存埋隱する所の計算左表の如し

造幣起業の初年より十三年の始に至る迄の新貨鑄造額

八七、六九〇、〇〇〇圓

同輸出額

三四、九八〇、〇〇〇圓

差引邦内に留存する額

五二、七一〇、〇〇〇圓

新貨の留存額と募集の外債金と銀行紙幣五分の四とを

合算せる全國通貨の總額 一四七、一七〇、〇〇〇圓

右の表に依るときは現時の紙幣流通額に比して猶ほ幾分の超過あるを見

るへし況んや市價低落せる今日の紙幣實貨の總額に比するときは尙ほ更に正貨通用の過多なるを知らん又古金銀の概計と其輸出し或は改鑄せる員額とを計較するに今猶ほ壹億貳千三百拾六萬圓を儲存するの割合あり然れども是等の計數は其精確を證し難き者あれば今假に是額の半と爲すも尙ほ六千五百拾八圓の員額あり是等の金銀全く隱伏して現はれざる所以の者は他なし紙幣金銀時有て昂低し浮沈定らざるか故に苟も餘財ある者は即ち金銀に交換し以て藏蓄を謀ればなり然れとも今や金銀邦内の通貨たるに至れば其之を舊時に藏蓄せし者も亦た自ら使用の念を生せん果して然らば流通の貨幣決して壹億四千七百拾七萬圓に止らす是の埋藏せし者を併せて遂に貳億八百七拾五萬圓の巨額に増加するをも得へきなり

第六 外國債及金札引換公債の利子を支辨する事

斯く金銀を通貨とし全國の幣制を一變するの道あるも紙幣に交換する五

千萬圓の外債には年々三百六拾八萬圓の利子を支出せざるへからず又貳千七百三拾三萬圓の紙幣を消却する金札引換公債には年々百六十四萬圓の利子(六分に當る)を支出せざるへからず今我が國力と政府の會計とに於て果して是の五百三拾二萬圓を毎歲支辨し得へきや否やを思考するときには其事決して至難に屬せざるなり何となれば歐米諸邦に比するに本邦の事物は尙課税を免るゝ者多く課税を被る者と雖も其割合未だ甚だ多からざればなり近く例せば酒煙草の如き奢侈品も尙ほ能く許多の歳入を今日に増加するを得べし今其酒税のみに就て歳入増加の手段を陳述せん當時酒税の税額は概數五百八拾五萬圓にして其中四百七拾三萬圓は則釀造税の收入なり今若し釀造税を増課し一石壹圓の税額を更めて更に之を一石三圓と爲すときは則壹千四百拾九萬圓を得へし然れとも重税の爲に二割の釀造を減すると假想するときには其實收額壹千百三拾五萬圓にして現釀造税額に對し則ち六百六拾貳萬圓の増加なり故に獨り是新增額を以て能

く新募の外債又金札引換内債の利子合計五百三拾貳萬圓を毎年支辨して餘剰あり又是他當時遵行する減債方案中には紙幣消却の爲め毎年平均貳百萬圓を支出するの割合なれとも正貨通用の方法を施行するに至れば是貳百萬圓は年々他の費途に支消するを得へき者なり然らば則減債方案中の紙幣消却資金と酒類釀造税の新税額とを合算するときには紙幣消却の爲に募集する内外公債の利子を支辨して尙ほ年分の餘贏を存する事左表計數の如きあり

釀造税の増額	六、六二〇、〇〇〇圓
毎年紙幣消却に充つへき資金	二、〇〇〇、〇〇〇圓
合計	八、六二〇、〇〇〇圓
新募内債の利子	五、三二〇、〇〇〇圓
差引贏餘額	三、三〇〇、〇〇〇圓

右に陳述するが如くなれば即ち是の利子を支辨するの難からざるを知る

へし

第七 是方案施行の後國債總計の結果如何
以上の方案を實施するときは内外公債増減の結果左表の如し

現額新額の區分		内外債の區分	
現時 の額	新法 の額	内債	外債
三五一、四九〇、〇〇〇 <small>圓</small>	二六五、四〇〇、〇〇〇	一、四九〇、〇〇〇 <small>圓</small>	六、一四〇、〇〇〇
減 八六、〇九〇、〇〇〇	増 五〇、〇九〇、〇〇〇	増 三六三、一〇〇、〇〇〇 <small>圓</small>	増 三二七、二二〇、〇〇〇
		増 三六、〇九〇、〇〇〇	
		合計	

有利債と無利債の結果は左の如し

新舊	有利 無利	
	有利内債	無利内債
現時の額	二、六六三、〇〇〇 <small>圓</small>	一、三、八五〇、〇〇〇 <small>圓</small>
新法の額	二、五、九六〇、〇〇〇	九、四三〇、〇〇〇
新額の増減	増 二七三、〇〇〇、〇〇〇	減 一、三、四二〇、〇〇〇
	増 五、〇〇〇、〇〇〇	増 七、一〇〇、〇〇〇
	減 一、三、四二〇、〇〇〇	減 一、三、八五〇、〇〇〇
	合計	合計

右の表に依れば是方案を施行するに因て無利債壹億壹千三百四拾貳萬圓を減し有利債七千七百三拾三萬圓を増せしと雖とも内外公債の總額に於ては即ち三千六百九萬圓を減少したり唯有利増加の一事少しく不利なるに似たりと雖とも我が國力と政府の合計とに於て之を支辨するの容易なるは即ち上章に陳述するが如し

斯く全國を正貨通用となし又三千六百九萬圓の國債を減し政府の國庫には尙ほ三千餘萬の準備金を儲存するを得政府の合計尙ほ餘裕ありと云ふへきなり

今や海外貿易の狀勢に於て金銀の輸出入權衡相稱はす毎年平均六百餘萬圓の輸出を超過し従て邦内の金銀を乏少ならしめ工商諸業の衰頽を來さんとするの危勢あるに際し今又新に外債を募り巨額の利子を年々海外に支出するときは金銀輸出入の不平均をして轉た急劇の勢を添へしむるに似たり是れ或は是方案を難する者が過慮するの要點なるへし然れとも今

若し事物利弊の輕重と募債の爲め海外支出を増すへき實際の金額とを計較し來るときは實に是方案の萬々已むへからざる理由あるを知るへし夫れ新募外債の利子は其額三百六拾八萬圓にして金銀輸出の超過に是金額を添加するか如くなれとも實際必しも然るにあらず何となれば外國舊公債全償の期日已に來年度中に在り故に十四年度以降は毎年是が爲に海外輸送に係る金額七拾餘萬圓を減少すへし是の員額は即ち新輸出支辨の利子三百六拾八萬圓中より除算すへき者にして是方案施行の爲め金銀の輸出を實際に増加すべき員額は即ち貳百九拾餘萬圓に過ぎざるあり又他の一方を願れば貿易不平均の致す所とは云ひなから紙幣金銀の格位亂動浮沈して定まらず遂に諸物價の變動を醸成し生計下等の人民をして或は窮苦の嘆聲を發せしむるの危境に達せんとす而るに今や僅に貳百餘萬圓の金銀輸出を増加して以て世運の爲めに紙幣通用より生ずる此等の不利を除却するを得は是れ豈得多して損少き者にあらずや利弊相ひ伴ふは世

常の常數にして邦國爲政の責に任する者は唯其輕重如何を計較深慮すへきのみ且つ當時諸般の業務に關し政府より金銀を海外に輸送する者毎歲五百餘萬圓に下らす是れ皆行政上必要の費途なりと雖とも若し深く其緩急大小を考慮するときは其中豈亦々幾分の減省すへき者なからんや果して然るを得は外債募集の爲め新に金銀輸出を増加すべき員額或は貳百萬圓以内に下らんも亦た未だ知るへからざるなり

貿易の權衡其平を失して金銀年ごとに外出し邦内の金銀乏少なるの極度に於て通貨に對し物價低落する時は金銀再ひ邦内に復歸す是れ理財の定法なりと雖とも紙幣通用の時世に在ては一種異様の状態有て是事容易に望むへからざるなり抑も金銀乏少の爲めに金銀に對して紙幣落下するときは物品も亦金銀に對して落下すへきの事理なり是れ金銀は獨り紙幣にのみ對して乏少なるにあらず物品に對して亦た乏少なればなり故に今日金銀乏少の原因より紙幣落下の結果あらざるへからず紙幣に對して金銀

五割の昂貴を生ずれば物品に對するも亦五割の昂貴を生ずるなり故に紙幣物品相與に金銀に對して落下するも物品紙幣の間に最低の差等あるへからざるなり斯の如くなれば金銀を以て購買する外國品獨り其價を貴くし紙幣を以て購買する内國品に比較して五割餘の高價なるが故に輸入減少して輸出増加し金銀速に邦内に復歸すへきに今や紙幣に對しては金銀五割の昂貴あれば内地の物品も亦た紙幣に對して五割を昂貴す故に金銀を以て購買する外國品も内國品も均しく五割の昂貴にして其間に最低の差ある事なし故に金銀再び邦内に復歸するの道を失ふ

金銀と内國物品と其昂貴するの遲速割合に於ては固より先後多少の差異なりと雖とも其昂貴を同くするの跡あるは世人の知る所なり唯金銀の昂貴は前に在て内國物品の昂貴は少しく之に後るゝが故に甲貴く乙未だ貴からざるの時間に於てのみ輸入減少輸出増加の形象を現出すれとも内國の物品其價値を昂上し來るときは輸入を抑制する所の者又忽ち消滅して

依然舊様に復歸す斯く金銀の昂貴と與に物品其價を進むるの極度に於ては紙幣の實價非常に減少し夫の通貨過少なると同一の結果を生じて利息今日に幾倍するに至らは始て天然回復の定法に依り金銀再び邦内に復歸すへしと雖とも斯く回復の甚だ遲緩なる所以は紙幣通用の時世あるに因るあり又前段に陳述する有様なるが故に天然回復に至る迄の歳月中に於て物價の變動は其幾回なるを知るへからず是の變動毎とに人民は物品授受の上に於て常に不正の損益を被り又下等生計の者をして困迫の狀勢に陥落せしむるを免れず是亦た紙幣通用の不利なり故に今若し幸に正貨通用の時世に變するを得は天然回復其事甚だ速にして而て又物價亂動の憂を免れん然らば即是の一事に就て論するも正貨通用の紙幣通用に優れる事萬々なり

然れとも紙幣通用の時世と正貨とに拘らす通貨通用の時世乏少にして邦内の金利其高度に昂上し工商諸業の澁滯を極むるの日にあらざれば海外

の金融決して邦内に復歸すへからず故に天然回復なるものは單に金銀を邦内に復歸せしむる迄にして其間多少義務の縮減を醸生す然れば即ち假令ひ金銀の復歸を得るも是れ豈に快望すへき事ならんや然るに今や天然回復の力を借らすして金銀輸入の平均に屬望すへき者なり即ち海關稅の改正是なり是改正案に於ては輸入稅の平均一割三分餘にして舊稅に比すれば則九分餘を増加し又輸出の舊稅は平均八分にして新案は之を全廢せり從來の經驗に依るに九分の増稅は輸入の一割五分を減し又輸出四分の廢稅は其五分を増すへし則ち輸入の總額は貳千七百六十餘萬圓に減し輸出の總額亦た貳千七百六十餘萬圓に進むへくして(以上は最近二ヶ年の平均額より加除せし算程なり)之を對照比較するときは即ち輸出入其平均を得るに近し又輸入額の増進と輸出額増進の割合とを比照するときは輸入は明治二年より十一年迄十年間に二と三との割合を以て進み輸出は一と二との割合を以て増加せり然らば即ち爾後十年間此割合を以て増進せば

輸入は四千八百八十餘萬圓にして輸出は五千貳百六十餘萬圓輸出の輸入に超過する事三百七十餘萬圓に至るを得へきなり然るときは人爲の助長に頼らす天然増進の力に於て輸出は輸入に對抗すへきの勢あるに際し今又稅則即ち改正の手段以て之を助長するあらは數年を出てす海外貿易上に於て輸出は輸入に超過するの好結果を呈すへし況んや其平均を得るの容易なるに於ておや從來豫想の形狀斯の如き者は是れ即ち正貨通用の爲めに輸入を誘進するの憂なしとする所以なり
若し金銀價の昂貴をして獨り紙幣の増發に起因せしめは今日の政策たる單に紙幣を消却して可あり然れとも一再建議する書中に述し如く其實因は紙幣増發にあらずして而して金銀の乏少に基す是則正貨通用の政策以て止むへからざる所以なり凡そ前段に於て縷述せる條件は實事豫想相半はすと雖とも已往の事以て將來を徵するに足れりとするときは是方案の以て國家を利すへき者又疑を容れざるなり然りと雖とも稅則改正の如き

其事成るに垂んとして而て未だ結落に至らず正貨通用の政策果して施行を決するときは金銀外出の事猶ほ非常の注意を要す海外支出の金銀を節減するの一事政務上に於て念々忘る可らざる者なり

明治十三年五月

參議大隈重信

【備考】

この時に當り我が國は紙幣の増發により、價額下落し、銀紙の差甚しく、この年には銀貨一圓に對し、紙幣は六十七錢二厘となれり、その結果物價は著しく騰貴し、輸入は激増し、社會は米價騰貴のため一時的繁盛を來せしが、これ全く一時的の根據なき繁榮にして徒に投機業のみ流行し、堅實の産業起らず、且つ物價騰貴して小民の生活は著しく困難となり、各官廳は物價の騰貴により豫算の如く遂行するを得ざるに至れり、この形勢を見て憂慮のあまり重信の計畫せるもの即ちこの建議なり、重信の建議は廟堂に大波瀾を起し、一部の人はこの議にして若し成立し、外債募集さるゝ事あらば日本は滅亡するに至るべしと稱して反對せり、概して長州出身の參議省卿及び舊侍補の人々は反對し、薩州出身の參議省卿は贊成し、廟議二分せり、大臣等はその決に苦しみしが遂に明治天皇の聖斷を仰ぐこととなり、重信の議は遂に採用せられざりき、

参考のため次に勅語その他を附記す、

【參考】

山縣有朋書翰「三條實美宛」明治十三年五月十四日

今日午後會計之一事ニ付集議有之可罷出奉存候處俄ニ用事出來出席不得仕候可然御聞置願上候此中大隈氏ヨリ意見書差廻候ニ付一閱致候處將來國家興廢浮沈ニ關係スヘキ重大事件故反復遂熟議御一決不相成テハ不容易禍害ヲ引起候事ト奉存候井上伊藤兩氏ハ經理上數年實地研究致候事ニ付自ラ意見モ可有之充分御聞糺相成候上尙御熟考御決定企望仕候乍併目下切迫ノ會計上大困難ヲ此儘打捨置候譯ニハ參リ不申孰ニシテモ困難ノ原因ヲ治療スヘキ目的相立候テ斷然御處置無之テハ不相成歟ト奉存候於生モ聊意見有之候ニ付明朝拜宇萬縷可申上草々頓首

五月十四日

山縣有朋

三條 公閣下

【參考】

勅 語 明治十三年六月八日

朕惟フニ明治初年以來國用多事ナルヲ以テ會計困難ヲ生シ遂ニ三十
年ノ今日ニ至リ正貨ハ海外ニ流出シ隨テ紙幣ノ信ヲ失フニ至ル因テ
大隈參議ヨリノ建策ヲ一覽シ又内閣諸省ノ意見同一ナラサルヲ聽ク
朕素ヨリ會計ノ容易ナラサルヲ知ルト雖外債ノ最今日ニ不可ナルヲ
知ル去年克蘭德ヨリ此外債ノ利害ニ於テ盡言スル所アリ其言猶耳ニ
在リ然ルニ今日會計ノ困難目前ニ迫リタル上ハ前途ノ目的ヲ定ムル
勤儉ノ主意即チ此時ニ在リ卿等宜ク朕カ意ヲ體シ勤儉ヲ本トシテ經
濟ノ方法ヲ定メ内閣諸省ト熟議シテ之ヲ奏セヨ

【參考】

グラント談話 明治十二年八月十日

予カ抱ク所ノ今一ノ意見ハ外債ノ一事ナリ凡ソ一國ニ於テ避クヘキ
モノハ外債ニ過クルモノナシ陛下彼ノ他人ヨリ金ヲ借テ其極任意ニ

之ヲ辨償シ能ハサルモノヲ見スヤ彼レ實ニ憫然タル無力者ニシテ徒
ニ債主ノ奴隸タルヲ免レス誠ニ卑屈彼カ如キモノハ又他ニアラサル
ナリ一個人ニシテ猶此ノ如シ況ヤ一國ヲヤ試ニ埃及西班牙或ハ土耳
斯ヲ觀ヨ其憫然タル狀態想フヘキナリ彼レ一國ノ鴻益トナルヘキモ
ノハ孰レモ抵當トナシ其極今日ニ至テハ其自國ノ所有ト稱スヘキモ
ノハ全ク地ヲ拂ヒタリ埃及ニ於テハ「キヂーウ」ハ遂ニ禪位スルニ至リ
西班牙ニ於テハ無益ノ外債ヲ起シタル弊害ハ各種ノ内國稅ヲ非常ニ
増加スルニ至レリ加フルニ該國ニ於テ諸收稅官吏間ニ賄賂盛ンニ行
ハレ惜ムヘシ有力ニシテ且國產ニ富ミタル良國モ之カ爲ニ漸ク衰頽
スルノ狀アリ臣ハ日本ノ甚大ナラサルト聞キ之ヲ喜ヘリ日本ノ外債
證書所持者ニ於テ支拂期限ノ來ルニ先チ金額ヲ受取ルコトヲ肯セハ
外債ハ何時ニテモ支拂フコトヲ得ヘシ之ヲ支拂フコトヲ急速ナレハ益
日本ノ利タリ將來日本ハ決シテ再ヒ外債ヲ起スヘカラス

陛下固リ知了シ給ハン或ル國ハ弱國ニ金ヲ貸スコトヲ甚タ好メリ之ニ由テ其威權ヲ張り弱國ヲ籠絡セリ彼金ヲ貸スノ目的ハ政權ヲ掌握スルニ在テ常ニ金ヲ貸スノ好機會ヲ窺ヘリ凡ソ東洋ニ於テ外國ノ支配或ハ干涉ヲ漸ク其半ヲ免レタルモノハ獨リ日本ト清トノ兩國ノミ故ニ此兩國カ干戈ヲ交ユルハ彼等ノ喜フ所ニシテ此機會ニ乘シ專横ノ約束ヲ立テ金ヲ貸シ恣ニ内國ノ政治ニ干涉セント欲スルナリ

【附記】 以上はグラントの濱離宮中島御茶屋に於て外債の害に就いて明治天皇に奏聞せる大要なり、岩倉公實記の記載に由る、

【參考】

佐々木高行書翰「岩倉具視宛」 明治十三年五月卅一日

拜呈此頃途路之風評ヲ聞クニ會計切迫ニ立至リ外國債ヲ起スノ義アリト高行初思ヘラク是レ世人ノ想像ニシテ決シテ信ズルニ足ラズト如何トナレバ高行平素閣下ノ高論ヲ拜ス亦大隈參議會テ外國債ノ不可ナルノ論說アリ然リ而シテ追日前評尤モ甚敷高行ノ耳底ニ入ルコ

頻ナリ爰ニ於テ投杼疑念ヲ生ズ今日ニ當テ外國債ヲ起ス是レ國家安危存亡ノ秋ナリ高行不肖ト雖モ維新來頗ル

天恩ニ浴シ今日尙高官ヲ汚ス豈默々トシテ止ム時ナランヤ然リト雖モ未ダ其議ノ虛實ヲ詳カニセズ果シテ其議真ナラバ幸ニ閣下高行ニ密示セヨ高行大ニ思フ所アリ因ツテ平日ノ恩遇ニ對シ一言心血ヲ吐露シテ敢テ閣下ニ乞フ

五月卅一日

高行

岩倉公

閣下

【參考】

元田永孚書翰「佐々木高行宛」 明治十三年五月廿九日

今朝ハ御來臨奉多謝候御内示(外債募集反對ノ件)之一條出仕之上御都合奉伺候所内閣臨御前ニ被 召出候間十分ニ極言仕置候尤未ダ大略御聽ニ入候御模様

ニ追テ委細奏

聞ニ可相成ト被致恐察今日ノ言上ハ先ヅ機先ニ出候事ト相考ヘ候此
後之儀ハ事六ヶ敷候ヘハ必ズ拜聞候様ニ御都合可有之ト被存候猶御
聞込ミノ儀モ候ハ、御聞カセ被下候様御依頼仕候別ニ相覺エタル御
咄モ無之候間先々右迄拜呈仕候餘ハ拜顔ニ讓置候頓首

五月廿九日

永 孚

佐々木賢臺

尙別紙大東ノ建言書内密貴覽ニ入レ候大東モ深ク謹慎ニテ草稿
モ不留差出候トノ事ニ候間其御心得ニテ御一覽御返却奉願候也

【参考】

伊藤博文書翰「熾仁親王宛」 明治十三年六月八日

本日各大臣參議一統ヘ

勅諭被爲在寫書御下附捧讀仕候尙取調云々博文も其列ニ被加候旨被

仰聞奉畏候既ニ昨日御内諭之砌及言上置候通到底此儘維持之目的無
之候ニ付豫而此儀ハ條巖二大臣ヘ御斷申上置候得共

叡慮を以是非奉命可仕様との御諭示ニ付不得止敬承罷在候ヘ共愚考
ニ而ハ廟堂舉而精神を入替候程ニ奮發ニ而會計困難之爲ニハ何事ヲ
とりも忍ンデ此危急ヲ救済スルト云衆議一決ニ無之而ハ目的ヲ達ス
ルノ見込無御座候右等ニ大意ハ昨日も申上置候ニ付乍恐

殿下御奏上奉願置度博文微恙平癒之上ハ參 朝詳細言上可仕候ヘ
共目下不能其儀候敢冒瀆尊嚴奉懇願候頓首再拜

六月八日

博 文

有栖川宮殿下

【参考】

元田永孚書翰「佐々木高行宛」 明治十三年六月十日

先時ハ御細書被成下候處侍從會談中ニテ御即答モ不仕失敬仕候一兩

日御所勞之由如何被成御座候哉明日ハ御出勤ノ由ニテ速ニ御全快珍重奉賀候略○中外債一條ハ御聞取ノ如ク實ニ
叡慮ニ被爲出候テ打止ニ相成候段御互ニ爲邦家安悅此事ニ御座候右ハ全ク初發ニ御心添被成下候故先ニ盡言致シ少シハ根本ノ補助ニ相成候歟ト奉存候近日ノ御模様猶御内話仕候件々モ有之紙上ニハ差扣へ申候明日四ツ時ニ罷出他ノ集會前ニ御閑話仕度左様御承知奉希候
遲延過刻ノ拜答早々如此ニ候頓首

六月十日

元田 永孚

佐々木賢臺

七九六 德大寺實則書翰「大隈重信宛」 明治十三年六月六日

御用被爲在候條明七日午前九時御參 内可有之旨 御沙汰候此段申入候

也

明治十三年六月六日

宮内卿德大寺實則

參議大隈重信殿

七九七 芳川顯正書翰「大隈重信宛」 明治十三年六月九日

御清佳奉恭賀候昨日御約束申上候通本省(外務省)十三年度豫算概略書差上候間御落手被下度候尤此節伺中之巴里府ニ可取立領事館經費書加候ニ付昨朝差上候分ハ多少増額ニ相成候ニ付其御含ヲ以御覽願度候右得貴意度勿々拜具

五月八日

(外務少輔)
顯 正

大隈參議殿

大隈重信關係文書第四 (明治十三年六月)

七九八 三條實美書翰「大隈重信宛」明治十三年六月十四日

明十五日午後一時會議有之候條參官可有之候也

十三年六月十四日

三條太政大臣

大隈參議殿

七九九 ハウス書翰「平井希昌宛」明治十三年六月十九日

昨日大隈公ノ御決定相成候事項ニ付聊カ過失誤解ノ義無之様致シ候爲メ
同公ノ御冀圖并ニ御考案ノ次第拙者ノ記憶致候分ヲ左ニ列記シテ奉伺候
様可致ト存候附テハ御手數ナカラ本書ノ趣キ貴下ヨリ同公へ御上申被下
果シテ同公ノ御見込ト符合致候哉否御伺定被下度奉願候
一東京タイムス新聞ハ本月以後一時停止可相成候得共右補助金ニ付預テ

取結ヒ候契約ノ義ハ來千八百八十一年ノ結末マテ尙ホ從前ノ如ク執リ行
ヒ候事ト心得候右ニ當ル資本金ヲ以テ拙者義ハ用意整ヒ次第預メ上陳致
置候通り出發致可申大隈公ニハ又後日ノ手數ヲ省カレン爲メ來月始メ拙
者ノ出立前ニ八ヶ月分ノ御手當金即四千圓御渡シ被下候筈ト存候是ハ拙
者旅行ノ間右期限ヲ超過セサルベキ見込ニ因ル所ニ候若シ又拙者滞在ノ
間右期限ヨリモ遅引相成候ハ、一時拙者私有ノ資金ヲ以テ繰替へ置キ追
テ歸朝ノ上後チノ御手當金ノ中ヨリ精算可相成候事
一拙者歸朝ノ上ハ東京タイムス新聞ヲ再興シ政府ノ御用ヲ奉スルニ付テ
更ニ最モ便宜ナリト認ムル所ノ方法ニ自カラ從事致候事
一旅行一件ノ細事ハ近日大隈公ニ拜晤ノ節審議決定可相成候事
右ノ條々ハ昨日決定相成候事件ノ要領ト信據致候得共萬一拙者誤解ノ條
件モ有之候ハ、大隈公ヨリ御示諭被下候様奉願候敬具

千八百八十年
六月十九日

大隈重信關係文書第四 (明治十三年六月)

イー・エツチ・ハウス

平井希昌殿

貴下

八〇〇 佐野常民書翰「大隈重信宛」 明治十三年六月廿三日

謹呈陳ハ一昨日會議之席にて諸省長官より増額請求相成候波伊藤參議其席にて書載相成候書面并其後又尊公寺島參議共ニ又右請求額より減少之見込被相付伊藤書留候もの且又昨日御申合之減額書面之も多分尊公之御手許ニ可有之ニ付右波御申請明朝早目持參候様岩公より御内沙汰有之候間何卒御取調御手許ニ御座候半之此ものまで御下附被下度相願申候草々敬具

六月廿三日

常民

大隈明臺

八〇一 竹添進一郎書翰「大隈重信宛」 明治十三年六月廿七日

酷暑日増候處益御安泰被爲在御座奉恐悅候次小生無異勤務候條乍恐御放神可被下候然之古庄嘉門儀御庇蔭ヲ以テ今度内務省ニ出勤致し小生迄辱仕合ニ奉存候尙乍此上御眷顧被下候様奉願候
左宗棠總理衙門出仕之初ハ攘夷論ヲ主張するとの風評盛ニ有之候へ共近日ニ至り其噂も相絶へ申候併し外交上ニ付幾分り國權(并上)ヲ恢復するに注意致し候様相見へ申候其他見聞之事情も一々外務卿へ特別機密信ヲ以テ申上候儀ニ付其節ニ御轉覽被遊候事ト奉存候間錄上不仕候
右時候御伺且御禮詞申上度以小書如此ニ御座候謹言

六月廿七日

竹添進一郎

大隈參議殿

閣下

八〇二 鍋島直彬書翰「大隈重信宛」 明治十三年六月廿九日

尊兄倍御清剛爲國家奉大賀候述モ小弟滯京中ハ御繁劇之際ヲモ顧ミス瑣屑ノ件ニ至ルマテ高誨ヲ請ヒ專ラ御誘掖ノ御蔭ヲ以テ職務上切迫懇願ノ件モ兎ヤ角辨理シ不相變御厚情感佩之至ニ御座候御承知之通唯一義理上ノ精神ヲ以テ非常御處分之後ヲ承ケ奮テ艱難ニ當リ草創ノ期先ツ大失錯ニ至ラス大抵整理スト雖モ小生義地方之吏務ハ疎且暗クシテ滯京中ニモ諸事疎漏御心配ノミ奉懸候歸縣後ハ東京ニテノ發病全癒ニ至ラサリシヤ或ハ東京ノ冷地ヨリ俄ニ熱地ニ至リシ爲メカ又々腦痛相發シ頗困難候得共十二年度ノ末期ニテ繁忙病ヲ勉メテ勤務罷在格別劇シキ事ニモ不相成候ニ付乍憚御降慮被下度候滯京中願伺等ノ事件ニ付テモ尊兄格別ニ御配

(沖繩縣少書記官)

慮被下候段原忠順ハモ委詳申聞候處猶小生ヨリ宜敷申上吳候様依頼候縣廳新築之件ハ御蔭ニ内閣ニ於テモ請願通リ御許容之事ニ御決定之趣出立前伊藤參議殿ヨリ親シク確承安心仕候得共兎角表向夫々之御指令ニ不相成候ハ實地着手之場ニ至リ兼又々當惑罷在候勿論爾後數日ヲ經過候事ユヘ最早總テ御指令濟之運ニ到リ候事ト推察候着縣後實際假縣廳之體裁ヲ視ルニ殆ント狹隘ノ廢屋咫尺ノ餘隙ナク事務上ニモ大ニ差支ヲ生シ萬一廳外之人參リ候テモ接對之場所サヘ無之新築請願之意愈切迫ナリ此他滯京中ニモ御内々伺置候地方費ニ屬スヘキ科目經費地方稅等明瞭區分(未)縣會モ開設ノ度ニ至ラス期ニ至ルマテハ特別ノ御詮議ヲ以テ總テ國庫ヨリス郡區ノ制モ定マラス御渡相成度且無祿士族廢藩ニ付テ廢セラレ目下困難ノモノ救助一件十二年度増額願至急御裁可該金一日モ急ニ御下ケ渡シ相成度十三年度經費豫算モ御許容之義急ニ奉待候此他判任定額增加之件等佐野大藏卿迄委細及書通置候ニ付尙乍御面倒 尊兄之御高配ヲ仰望仕候此段着縣後御窺旁諸

件御依頼旁匆匆以寸楮陳述仕候也恐々頓首拜

六月廿九日

(沖繩縣令)
鍋島直彬

大隈賢兄研北

八〇三 松方正義書翰〔大隈重信宛〕 明治十三年七月三日

聖上倍御機嫌能被爲涉恐悅之至奉存候本日之勢州神戸御着輦之御日取天氣都合も申分無之旁御同慶之義ト奉存候卑官義も本日當地(名古屋)へ安着明一日丈當處へ滞留各處之見分ヲ爲濟明後日 行在所へ伺候ノ筈電信にて致上申置候扱先日出發之際縷々陳述仕置候富岡製糸場處分方之義モ何分可然御取計被下度尤右ニ付（名古屋）る最早上申書差出之運ニモ相成候半ト奉存候然ル上モ猶更速ニ御決議相成候様致度右製糸場情實之事ハ速水堅曹御宅へ罷出詳ニ上陳可仕旨此度申遣ハシ候間同人罷出候ハ、猶又篤ト御聞取被

下度奉存候此段不取敢前件ノミ得御意候也

明治十三年七月三日於名古屋

松方正義

大隈參議殿

八〇四 内海忠勝書翰〔大隈重信宛〕 明治十三年八月二日

拜啓先般御内示相成候佐賀士族就産金拜借之一件ハ已ニ難聞届旨御指令相成候由ニテ今般再願書差出候ニ付別紙之通小官ヨリ具情仕置候間右御諒察閣下ニ於テモ御内周旋被成下候ハ、好都合ト奉存候間別紙寫ヲ以テ入御内覽候尙詳細ハ御而晤之節可申上候草々不具

十三年八月二日

内海忠勝

大隈重信殿

八〇五 鈴木大亮書翰「大隈重信宛」 明治十三年八月十七日

一翰拜啓酷暑之候益御清雅奉敬賀候陳ハ昨夏本道御巡視之際高諭ヲ賜リ且不一方御賛成ヲ以許可相成候鐵道モ追々進歩即今之景況ナレハ本年中ニハ必ス落成可仕殊ニ連旬之牢晴土功木作共大ニ好都合ニ御坐候鐵道モ如此廉價ニシテ且如此速ニ出來候者ナレハ青森鐵道トテモ敢テ至難ノ業ニハ有之間敷ト妄想ヲ引起居候有珠製糖所モ夫々都合ヲ得定テ好結果ヲ可被得奉存候先ハ暑中御窺申上度草々謹言

八月十七日

(明治使權大書記官)
鈴木大亮拜具

參議大隈公閣下

尙々昨年東京滯在中ハ數回御優待ヲ蒙リ實ニ望外ニ光榮ヲ辱フシ拜

謝之至ニ奉存候右御禮厚ク申上候敬具

八〇六 五代友厚書翰「大隈重信宛」 明治十三年八月十九日

昨日來一寸參上と存候處彼是被取紛御不沙汰申上候扱米納云々ニ付猶愚意相認申候間御一覽被下度昨日(并上略)清盛入道罷出候由如何之論有之候哉否相ワカラス候得共又外國債云々之如キ反復表裏相成候而終ニ閣下獨立之姿ニ相成候儀モ乍陰痛心仕候伊藤ニモ今日モ粗不得止米納ニ而も相用候外無之心中決定罷在候模様と相聞候御注意被下度何モ明朝モ參上猶事情可申上候得共其内昨今之景況上申仕度此旨奉得尊意候也

八月十九日

松陰

重信様 侍史

八〇七 五代友厚書翰「大隈重信宛」明治十三年十一月五日

拜啓別紙疾相認已ニ差上候心得之處豈圖や手箱之内取落有之乍延引此便
 差上申候扱爾後商景京阪地ハ彌金融壅塞此節季極モ大坂ニ拾貳文之
 日歩ニ相登リ神戸ハ拾五文と相成申候是ニ金融之景況御推計被下度節
 季後ニ相成少々モ金融も相付候模様當時日歩大坂ニ六七文と申事ニ候
 當時さへ如斯之勢ニ有之候間是ヨリ年暮ニ相成候ハ、如何之景況を來可
 申歟と銀行杯モ只今顔色を青し罷在申候米も金融不相付ニ爲騰貴スル不
 能先つ拾壹圓内外ニ相居申候迂生ニ明日ハ播磨鑛山ハ出張之筈來ル十
 一日ニ歸坂之日積リニ有之機械建設成功迂生出張之上運轉相始候筈旁好
 都合之由ニ御座候御同慶被下度貿易會社設立云々之儀去月廿八日佐野卿
 ハ内諭モ前回相達候付一昨三日金權名望を有スル貳拾名を撰舉一會を開
 キ及示談候處何モも同意早速盟約出來申候間是又御放念被下度實際着手
 之目的ニ候故本月下旬出京之上猶御賢考可奉伺候此旨御通信申上度如斯

御座候也

十一月五日

松陰

重信様

貳白 三井銀行支店切迫之事情過日吉原迄電報を以照會仕候處早速
 御手配被成下候趣キ御蔭を以同支店も相凌申候由兼申上置候通御
 助援被下候御目的ニ有之候ハ、此上信用を不失内ニ御保護不被成下
 候モ彌信用を失ひ各自當座預金等取出候様相成候モ到底凌兼可
 申候同店之爲ニモ當時最不容易場合と想像仕候間何卒速ニ御工夫被
 下置度今日之處ニモ些少之御助援ニモ再信用を復可申と存候

八〇八 德大寺實則書翰「大隈重信宛」明治十三年十一月八日

明九日午前九時御出門吹上御苑へ

行幸近衛士官競馬御覽被爲在候ニ付御都合ヲ以テ御隨意御拜見可被成旨御沙汰候條此段申入候也

十三年十一月八日

實 則

大隈 參議 殿

八〇九 岩倉具視書翰「大隈重信宛」 明治十三年十一月九日

追伸

冷泉某杏某二人採用之事御配慮忝存候冷泉ハ既ニ宮内省ヨリ部長局へ御問合相成千萬安心致候早々以上

過日來御引籠當分之事と存居候處傳承候得テ意外御困却之趣併今日ハ最早御順快之由尙御保養專一と存候扱あつか御配慮相成候宮内省ハ御用ヲ以テ當分ノ間年六朱利附金拾萬圓御借上之事一兩日之内ニ同省ヨリ可

相運候間佐野（常民大藏卿）にも御傳可然御取計之様分わ御頼申入候素り御承知と存候得共爲念如此候早々以上

十一月九日

具 視

大隈 重信 殿

八一〇 德大寺實則書翰「大隈重信宛」 明治十三年十一月十一日

兼テ岩倉右大臣（其親）ヨリ御内談申入有之候華族保護ノ爲メ當省ニ於テ金圓借入之義別紙（佐野常民）ニ通大藏卿へ申入候尤金拾萬圓ハ差向必要ニ付此節受取申度殘金貳萬圓ハ來ル十二月交付之義等貴官御關涉之儀ニ付宜敷御含有之度候此段申進候也

明治十三年十一月十一日

德大寺 宮内卿

大隈 參議 殿

今般當省ニ於テ必要御用有之候間金拾貳萬圓年六朱之利付ヲ以テ借入申度可然御繰合早々右金額御交付相成候様致度候此段申進候也
明治十三年十一月十一日

宮内卿德大寺實則

大藏卿佐野常民殿

追テ本文金額之内金拾萬圓ハ此節御渡有之度殘金貳萬圓ハ來十二月御渡之義与御領承相成度此段申添候也

八一 佐野常民書翰「大隈重信宛」明治十三年十一月十二日

謹呈益御清健御奉職奉敬賀候陳ハ先晚ハ御光駕被成下候處失敬之至御高免可被下候其後御外氣ハ定テ御清快々奉存候拙ニも去ル五日此地入湯之爲罷越候ニ付其前參殿縷々申上候合之處差急不能其儀不得止山口深川兩

氏ニ頼托シ申上置候儀ハ御聞取被下候事々奉存候授佐賀拜借金願書一條ハ定テ御懇配被成下候儀々奉存候拙ニも内海縣令ハ度々懇談且内務卿并前島ハ頼談仕置候前島之話ニハ願書ハ未勸農局屬官取調中ニ右之種類多分有之急ニハ相揃申間敷哉之由其後如何相運候哉内海ニも昨朝より此地發程歸京相成來ル十八九日間ノ船便より歸崎被致候積リ之由就テハ何卒其迄ニ相運候半テハ六ヶ敷可有之佐賀ハ除祿一條も有之何分特別之御吟味被相付候半テ迎も自餘ニ釣張候テハ願濟困難歟ト愚考仕候是ハ拙例之老婆心より過慮ニ可有之歟何分ニも縣令ハ能御申談被下願意貫徹候様御高配之程奉仰候拙ニも十七日迄ニ歸京之積ニ御座候間歸着次第參殿萬可申上候得共過日前件申上後レ候ニ付卒度得御意候草々敬具

十一月十二日

常 民拜

大隈 明 臺

八一二 伊藤博文書翰

天隈重信宛

明治十三年十一月十九日

別紙ハ大坂府知事(建野三)到來御一覽被下度候隨分尤ナルコニ被考候小生ハ豫
而大坂府ノ小管轄ト京都府ノ過大ナルハ不釣合ナル物ト愚考仕居候處尊
慮ハ如何拜晤ニ上篤ト御相談可申上候也

十九日

博文

大隈殿

【別紙】

謹呈仕候陳モ今般地方事務改良ニ見込ヲ以テ新法御施行相成候付而
モ當府將來尤困難ニ場合ニ遭逢致候間別紙建言書壹通(松方正義)内務卿迄及内
申候間寫壹括呈尊覽候條何卒御採用被下置度奉懇願候畢竟當府ノ希
望致候義モ郡村ノ所轄增管被仰付様ノ旨趣ニテ別ニ他縣ヲ廢合シ天

下ノ施設ヲ彼是申上候譯ニモ無之候東京ノ如キハ警察監獄ニ兩費無
之京都府モ莫大ノ郡村ヲ管轄シ獨阪府而已如此ノ不幸ニ遭逢スル所
謂モ全ク天下第一ノ地方警察費ヲ要シ諸府縣第一ノ監獄費ヲ要シ
之レガ支出ヲ要スル原素タル地租三分ノ一今般ノ改ハ徵收ニ充ツル
郡村僅少ニシテ市街ハ却テ地租額僅少ナレバナリ東京府ト違ヒ營業稅
モ此度情
願セリ

一堺縣廢合ノ件モ凡ソ天下ノ輿論ナランカ幸ニ縣令ノ滿期ナルガ故
ニ此際好機會ト奉存候

兵庫縣ノ義モ御都合モ可被爲在與奉存候得共堺縣ニ義モ何卒御英
斷ヲ以テ至急御所分相成候ハ、幾分カ御節儉ノ御旨趣モ適當可
仕奉存候別紙建白ノ義自然御評議ニ相懸リ候ハ、當府大書記官も
欠員ニ儘當分御差置被下度佗日ノ便利上まで乍細事添テ及内申置
候恐々敬具